

# 小松市内遺跡発掘調査報告書 XII

二ツ梨豆岡向山窯跡群

2017.3

石川県小松市埋蔵文化財センター

---

## 例 言

---

1. 本書は、石川県小松市において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。

【二ツ梨豆岡向山窯跡群】(平成 17 ~ 21 年度)

[調査地] 石川県小松市二ツ梨町

[調査原因] 個人農地

[調査面積] 2,267m<sup>2</sup>

[発掘調査] 2005. 7.21 ~ 2005.10.17 (260m<sup>2</sup>)

2006. 9.19 ~ 2006.12.12 (640m<sup>2</sup>)

2007.10. 2 ~ 2007.11.30 (280m<sup>2</sup>)

2008. 9. 1 ~ 2009. 3.18 (487m<sup>2</sup>)

2009. 9. 1 ~ 2009.12.11 (600m<sup>2</sup>)

[調査担当] 大橋由美子

発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。

4. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成 27・28 年度に実施した。
5. 遺構の実測及び写真撮影は、発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、執筆担当者が行った。
6. 本書の作成は、第Ⅰ章の執筆を宮田 明が担当し、第Ⅱ章と付章 1 の執筆を望月精司の指導のもと、横幕 真が担当した。付章 2 については、小林克也氏およびパレオ・ラボ AMS 年代測定グループより玉稿を賜った。全体の編集は横幕が行った。
7. 資料の検討にあたって、能美市立博物館と首原雄一氏（能美市教育委員会）に御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
8. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市埋蔵文化財センターで一括保管している。

---

## 凡 例

---

1. 本書に示す座標は平面直角座標 VII 系、高度は標高 (T.P.) で表示し、世界測地系「測地成果 2000」に準拠している。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。
4. 本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録では、時代名称は原則として『石川県遺跡地図』の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

---

## 目 次

---

I 位置と環境 .....	1
II 二ツ梨豆岡向山窯跡群発掘調査 2 (遺物編 1) .....	13
付章 1 その他の遺構 .....	43
付章 2 自然科学分析 .....	45

写真図版 1 ~ 24

報告書抄録

# 第Ⅰ章 位置と環境

## 第1節 地理的環境

### 1 市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約20km、南北約30kmに跨る市域は面積371.13km<sup>2</sup>を測る。南は大日山（1368m）で福井県勝山市と境し、ここより約5km北に位置する鈴ヶ岳（1174m）を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約11万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣7町村を合併して昭和15年市制施行、その後2次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

### 2 加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地（加越山地）は新第三紀火碎流堆植物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約20m程度あるが、平均的には5～10m程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全城、柴山潟の約3分の2が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・津上川等を合わせて国府台地をえぐりながら西に向を変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図2は明治時代の河道と水域を合成したものだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

### 3 梯川と梯川デルタ

梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもっとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ



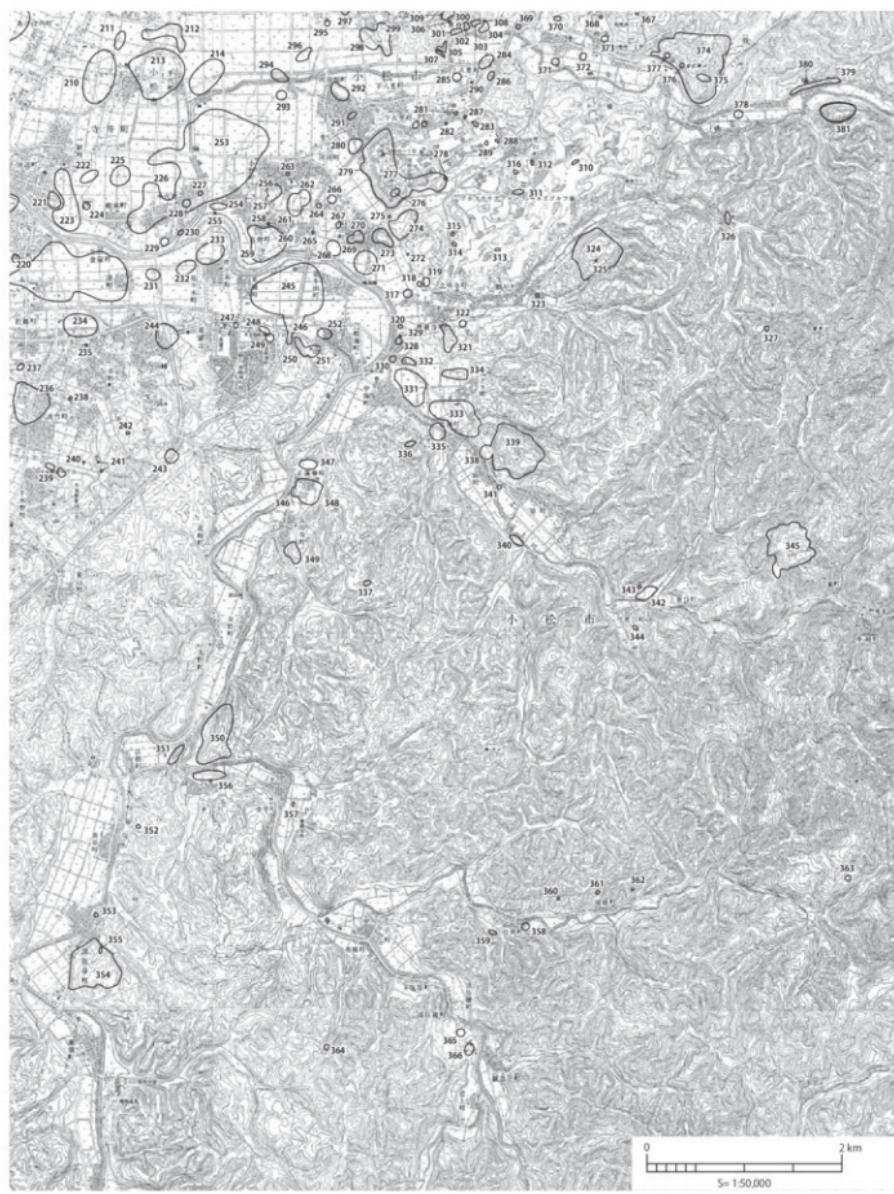
第1図 小松市の位置



第2図 小松市の地形



第3図 遺跡分布図



れてきた。明治 44 年～大正 12 年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事实上、梯川と今江渕・木場渕を結んだ領域を指している。図 2 に表示はないが、この領域には明治 20 年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治 32 年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返し行われた。

## 第 2 節 歴史的環境

### 1 旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少くないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界隈で言えば、河田山遺跡（276）や八里向山 A～F 遺跡（300～305）など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、集落遺跡としての確認例は断片的である。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷 A～D 遺跡や宮竹うっしょやま A・B 遺跡（いずれも図郭外）など、縄文時代中期を中心豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念仏林遺跡（37）が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。近現代の開発も含め、多くが後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一例を提供している。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

### 2 弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡（198）が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂遺跡（図郭外）、大長野 A 遺跡（210）、漆町遺跡（220）、荒木田遺跡（245）のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡（276）や八里向山 A 遺跡（300）で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのではなく、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

### 3 古 墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山 5・6 号墳、秋常山 1 号墳、和田山 5 号墳（いずれも図郭外）を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵界隈では、中期後半以降、河田山古墳群（277）や下開発茶臼山古墳群（図郭外）など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在ないしいずれかのみの構成で築造される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代才オキダ遺跡（226）で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では白のぼぞ古墳（44）や御幸塚古墳（82）などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を作う。矢田借屋古墳群（52）のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石積横穴式石室が採用される。

#### 4 古墳時代～古代・中世の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6世紀以降8世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7世紀代の月津台地では、額見町遺跡(32)の発掘調査以降、矢田野遺跡(43)、薬師遺跡(70)でL字形カマドを設えた堅穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動静が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との相関性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8世紀、在郷の財氏関連遺跡とされる佐々木遺跡(231)が異彩を放つほかは、概ね盛期が9世紀後半～10世紀前半になる傾向が知られている。墨書き土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図3には中宮八院(319、322、331、338、347、348、349、352)を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺跡(243)、八里向山B遺跡(301)、里川E遺跡(314)が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、近年調査が行われた松谷寺跡(349)では、8世紀前半に遡る古代山林寺院跡が確認され、「松谷庵寺」として名称上の区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6世紀前半には二ツ梨東山古窯跡(105)で須恵器生産を開始し、二ツ梨豆岡向山古窯跡群(100)、二ツ梨殿様池古窯跡群(101)で埴輪を焼成した窯も確認されており、江沼地域の古墳出土埴輪の供給地と考えられている。以後、10世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。一方の能美丘陵では、7世紀前半に八里向山J遺跡(地蔵谷古窯跡:309)で須恵器生産を開始し、同後半には湯屋古窯跡群(図郭外)に操業の拠点を移動する。8世紀前半には和気古窯跡群(図郭外)へさらに移動し、9世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯1基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、今までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッショウタン遺跡(183)で製鉄に伴うと見られる製炭窯が7世紀後半～末ないし8世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で莊園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡、下開発遺跡(いずれも図郭外)が律令期に成立した東大寺領幡生莊に比定されている。また、白江梯川遺跡(218)、漆町遺跡(220)は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江莊に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡(218)は、『能美郡誌』によれば、従前の白江念佛寺塔遺跡(漆町遺跡:220)周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事實を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りは、ここに比定すべきだろう。

#### 5 中世の城館・寺院・窯跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。岩渕城跡(339)、岩倉城跡(345)、波佐谷城跡(354)など、縄張図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にはほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、壺を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12世紀末までには二ツ梨奥谷1号窯（108）で操業を開始し、湯上谷古窯跡群（143）で盛期を迎えるが、これを最後に14世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯（岡郭外）で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

## 6 近世～現代

1640（寛永17）年、藩主を退いた前田利常の小松城入城を契機として、城下町としての小松町が成立するが、関連するところで大川遺跡・東町遺跡（194）が埋蔵文化財包蔵地（近世の町屋跡）として周知化されている。大川遺跡では発掘調査も実施され、小松市でも近世城下町の町屋の様相が明らかになりつつある。なお、前田利常の没後、亡骸は三宅野（現在の小松市河田町地内）で荼毘に付されたとされており、灰塚（264）が伝わっている。

近代窯業の関連で、南加賀では19世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯（235）に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯（186）、小野窯（263）などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括りで言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり（土佐古墳：81）、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり（左門殿古墳：45）するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

第1表 遺跡地名表

No.	名 称	種 别	時 代	備 考
1	奥山本村跡1号	古塚	縄文	
2	奥山本村跡2号	その他の遺跡	中世	
3	奥山本村跡3号	遺布地	不詳	
4	奥山本村跡4号	城郭跡	中世	
5	一分A遺跡	遺布地	古墳～古代	
6	篠山古塚	古坟・集落跡	縄文	加賀市指定史跡
7	篠山本村跡	古塚	古代	
8	篠山本村跡2号（本塚地）	遺布地	古生	篠山本村跡A地内に所在する古墳
9	山口A遺跡	遺布地	縄文	篠山古塚に隣接する地点
10	丸美屋古墳	墓塚	不詳	
11	豆利屋古墳	墓塚	不詳	
12	今川遺跡	遺布地	不詳	
13	新堀遺跡	遺布地	古代（平安）	
14	新堀古跡	集落跡	古生～中世	
15	新むらき地祇社跡	遺布地	古代	
16	新堀跡	聚落跡	中世（室町）	
17	横川町生センター遺跡	遺布地	古代	
18	横川遺跡	遺布地	古代	
19	分校A遺跡	遺布地	古墳	
20	分校B遺跡	遺布地	古代（平安）	
21	分校B-1古墳群	古墳	古墳	円墳 2
22	分校C-1山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳 3、円墳 10、方墳 6
23	分校D-1古墳	古墳	古墳	前方後円墳
24	行耕A遺跡	遺布地	縄文	
25	行耕B遺跡	遺布地	古生	
26	行耕跡	城郭跡	中世（安土桃山）	
27	駒形A-1古墳	集落跡	古生～中世	
28	駒形A-2古墳	遺布地	不詳	
29	駒形A-3古墳	遺布地	縄文	
	その他の遺跡	古代（奈良）		

No.	名 称	種 别	時 代	備 考
30	川津才生跡	遺跡地	古墳・中世	
31	川津人跡跡	遺跡地	古代（奈良）	
32	船貝町遺跡	遺跡地	縄文	
33	船貝町前人跡跡	遺跡地	古墳・中世	船貝町前人跡跡の一部
34	船貝町前日遺跡	遺跡地	縄文	船貝町前人跡跡の一部
35	赤町遺跡	遺跡地	縄文・平安	
36	月津野遺跡	遺跡地	縄文・古代	
37	笠佐町遺跡	集落跡	縄文	
38	笠佐町南遺跡	集落跡	弥生・古墳	
39	矢田山遺跡	集落跡	古代（奈良）	
40	万何理遺跡	遺跡地	縄文	
41	矢田A 遺跡	遺跡地	縄文	
42	矢田B 遺跡	遺跡地	古墳	矢田野遺跡の一部
43	矢田山遺跡	集落跡	古墳・古代	
44	白の山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
45	白門山古墳	古墳	古墳	円墳
46	策石古墳	古墳	古墳	円墳、2段築成
47	興原山古墳	古墳	古墳	円墳
48	笠佐山古墳	古墳	古墳	円墳
49	笠佐山古墳	古墳	古墳	円墳、木立古墳？室
50	丸森山古墳	古墳	古墳	円墳、石室・埴輪式石室、東形右室
51	鶴森山古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
52	矢田野町古墳群	古墳	古墳	円墳、前方後円墳、木柄 1、木立古墳室
53	大入原山古墳	古墳	古墳	円墳
54	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳、前方後円墳 1
55	矢田野エジリ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
56	西幡山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
57	羽津山の古墳	古墳	古墳	円墳、石室・埴輪式石室
58	中村山古墳	古墳	古墳	円墳、石室・埴輪式石室
59	矢田山神社古跡跡	遺跡地	古代（平安）	
60	下蒙山 A 番 <sup>12</sup> 跡	切石墓	不詳	横穴 7～8
61	鳥狩塚	斜坡	不詳	
62	下蒙山多岐 <sup>13</sup> 跡	切石墓	不詳	横穴 2
63	鳥瀬跡	集落跡	弥生・中世	
64	島 B 遺跡	遺跡地	古代	
65	島 C 遺跡	遺跡地	古墳	方墳？
66	弓津 A 遺跡	遺跡地	縄文	
67	弓津 B 遺跡	遺跡地	縄文	
68	弓津 C 遺跡	集落跡	古墳	
69	矢崎山の下遺跡	集落跡	縄文・中世	
70	葉原山遺跡	集落跡	古墳・古代	
71	ホカノヤマ A 遺跡	遺跡地	古代（奈良）	
72	ホカノヤマ B 遺跡	遺跡地	古墳	
73	ホカノヤマ C 遺跡	遺跡地	古墳	
74	今山ノ山遺跡	遺跡地	弥生	
75	鶴山遺跡	集落跡	古墳	
76	千百瀬跡	遺跡地	縄文	
77	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
78	五郎山丘陵	丘陵	縄文	
79	矢崎山古墳	古墳	古墳	
80	鶴山山遺跡	古墳	古墳	
81	千石山遺跡	古墳	古墳	
82	鶴森山古墳	古墳	古墳	前方後円墳、今石山古墳完跡
83	千石山古墳	古墳	不詳	横穴 4
84	鶴子山古墳	城郭跡	中世	「千石山」古墳の一部
85	弓石跡	古墳跡	中世末	鶴石
86	弓石山跡	古墳跡	近世初期	鶴瓦窯
87	天崩遺跡	遺跡地	古代	
88	渡河山古墳群	その他の墓	中世末	船形不定跡
89	林別山古墳	古墳	不詳	
90	林遺跡（林タカケヤマ古跡跡群）	生度遺跡	古墳	近世初期 3、南加賀古跡跡北群
91	林遺跡（林タカケヤマ古跡跡群）	生度遺跡	古墳	近世初期 2、千葉原 1、南加賀古跡跡北群
92	林遺跡（林タカケヤマ古跡跡群）	生度遺跡	古代	製鉄炉 1、製鐵窯 1
93	林遺跡（林タカケヤマ古跡跡群）	生度遺跡	古墳	近世初期 7、製陶窯 1、南加賀古跡跡北群
94	川津 A 号 <sup>14</sup> 跡	生度遺跡	古代（平安）	製鐵窯
95	川津 B クラニ <sup>15</sup> 跡	生度遺跡	不詳	製鉄炉 1、製鐵窯 1、南加賀古跡跡北群
96	川津 C ワカダニ <sup>16</sup> 跡	生度遺跡	古代（平安）	製鐵窯 1、製鐵炉 1、南加賀古跡跡北群
97	川津 D ヤマツ <sup>17</sup> 跡	生度遺跡	不詳	製鐵窯 1、製鐵炉 1、南加賀古跡跡北群
98	二ツ割一団山古跡跡群	生度遺跡	古代	製鐵窯 12、土師の坑 28、製鐵炉 1、製鐵窯 2、南加賀古跡跡北群
99	二ツ割山古跡跡群	生度遺跡	古墳・古代	製鐵窯 4
100	二ツ割山周山古跡跡群	生度遺跡	古墳・古代	遠古遺跡 12（樹根遺跡 2、瓦陶器遺跡 2）、南加賀古跡跡北群
101	ツブ原塚山古跡跡群	生度遺跡	古墳（平安）	近世初期（樹根遺跡 3）、土師の坑 3、南加賀古跡跡北群
102	ツブ原塚山古跡跡群	生度遺跡	古代	土師の坑 4、南加賀古跡跡北群
103	ツブ原塚山古跡跡群	生度遺跡	古墳	近世初期 3、南加賀古跡跡北群
104	ツブ原塚山古跡跡群	生度遺跡	古墳	近世初期 8、南加賀古跡跡北群
105	ツブ原塚山古跡跡群	生度遺跡	古墳	近世初期 9、南加賀古跡跡北群
106	ツブ原塚山古跡跡群	生度遺跡	古代（奈良）	近世初期 1、製鐵炉 1、製鐵窯 1、南加賀古跡跡北群
107	ツブ原塚山古跡跡群	生度遺跡	古代（奈良）	近世初期 1、製鐵炉 1、南加賀古跡跡北群

No	名 称	種 别	時 代	考 参
100	ツヅル谷1号墳	生遺跡	古代(平安末)	前史部第2、奈良律1、南加賀古宮跡主部
100	ツヅル谷1号・2号墳跡	生遺跡	不詳	製鉄炉
110	ツヅル谷2号墳	生遺跡	古代	前史部第4(高陶製鉄炉)、南加賀古宮跡主部
111	ツヅル谷2号・3号墳跡	生遺跡	不詳	前史部第4、南加賀古宮跡主部
112	美田町野原山1号墳	生遺跡	古代(奈良)	前史部第6、南加賀古宮跡主部
113	美田町野原山2号墳	生遺跡	古代(奈良)、中世(縄文)	前史部第4、加賀律2、製鉄3、南加賀古宮跡主部
114	越前川クサガサ古窯跡群	生遺跡	古代(奈良)、中世(縄文)	前史部第6、南加賀古宮跡主部
115	越前川鍋	踏査地	中世	
116	越前川鉢	踏査地	中世	
117	小天王谷1～2号墳跡	生遺跡	中世(縄文)	加賀律2
118	小天王谷1号墳跡(天王山1号製鉄跡)	生遺跡	不詳	製鉄炉
119	小天王谷2～3号墳跡	生遺跡	不詳	製鉄2
120	大久保谷1～2号墳跡	生遺跡	不詳	製鉄2
121	大久保谷古窯跡	生遺跡	不詳	
122	熊谷1号墳	生遺跡	中世(縄文)	加賀律
123	美田町カタマダニ製鉄跡	生遺跡	不詳	製鉄3
124	美田町1～5号橋穴	掘六墓	不詳	
125	熊谷1～5号橋穴	掘六墓	不詳	
126	熊谷5号橋穴	掘六墓	不詳	
127	熊谷6号橋穴	生遺跡	不詳	製鉄炉3
128	「見事」コマダニ製鉄跡	生遺跡	不詳	製鉄炉2
129	「見事」コマダニ製鉄跡	生遺跡	古代(平安)	前史部第4、製鉄3、南加賀古宮跡主部
130	「見事」コマダニ製鉄跡	生遺跡	古代(平安)	前史部第4、製鉄3、第6、7、8、9、10、11、12式式1、南加賀古宮跡主部
131	「見事」コマダニ製鉄跡	生遺跡	古代(古代)(鉢)	前史部第4、南加賀古宮跡主部
132	「見事」カタマダニ古窯跡群	生遺跡	不詳	前史部第4(高陶製鉄炉)
133	「見事」トリニティ古窯跡群	生遺跡	古代(奈良)・中世(縄文)	前史部第4、加賀律1、製鉄炉1、南加賀古宮跡主部
134	「見事」オジマヤマ古窯跡群	生遺跡	中世(縄文)	加賀律4、製鉄炉1
135	糸津1～2号墳跡	生遺跡	不詳	製鉄炉2
136	糸津1号墳跡	持古跡	中世(縄文)	
137	糸津1号墳跡(古窯跡)	踏査地	古代・中世	
138	「見事」古窯跡	生遺跡	不詳	製鉄炉1
139	荒尾1号古窯跡	生遺跡	古代(平安)	前史部第4、製鉄炉1、南加賀古宮跡主部
140	荒尾2号古窯跡	生遺跡	不詳	製鉄炉1
141	「荒尾」カツコウヤマ古窯跡	生遺跡	古代(平安)・古墳	古代(平安)・古墳、晴原
142	「荒尾」ハカルタニ古窯跡群	生遺跡	中世(縄文)	加賀律2
143	山上古窯跡群	生遺跡	中世(縄文)	加賀律10、製鉄炉2
144	西脇6号橋穴	生遺跡	不詳	製鉄
145	西脇6号橋穴マナクン製鉄跡	生遺跡	不詳	製鉄2
146	現1号古窯跡	生遺跡	不詳	製鉄2
147	現10世遺跡	遺迹	中世(縄文)	現10世紀地
148	山山古窯跡	生遺跡	不詳	製鉄炉複数
149	月1津原製鉄跡	生遺跡	不詳	製鉄
150	月1シンドウ古窯跡	生遺跡	不詳	製鉄
151	月1山廻跡	踏査地	不詳	
152	林八幡神社周囲	經原	中世(縄文)	
153	津波佐木トヨジ跡	掘六墓	中世(平安末)	地下式窓6、2基調査
154	大谷1号古窯跡	経文		
155	小山山古窯跡	踏査地	不詳	新潟市布境
156	小山山手干1号古窯跡	生遺跡	不詳	製鉄炉2
157	小山山手干2号古窯跡	生遺跡	不詳	製鉄炉2
158	津波佐木ハラミヤ2号古窯跡	生遺跡	不詳	津波佐木ハラミヤ2号古窯跡
159	木場1号古窯跡	古墳	古墳	伊勢4
160	木場1号古窯跡	古墳	古墳	現古1号古窯跡とされる
161	木場1号古窯跡	踏査地	不詳	
162	木場1号古窯跡	経文	不詳	
163	木場1号古窯跡(木場1号窓口)	生遺跡	古代(奈良)	製鉄炉1、製鉄窓2
164	木場1号古窯跡	踏査地	古代(平安)～中世	
165	木場1号古窯跡	踏査地	不詳	
166	木場遺跡A式15(1月窓跡)	生遺跡	古代(平安)	製鉄窓3、新津磨石場
167	木場遺跡B式16(2月窓跡)	生遺跡	古代(平安)	製鉄炉3、製鉄窓2
168	木場遺跡C式16(3月窓跡)	生遺跡	不詳	製鉄
169	木場遺跡D式16(4月窓跡)	生遺跡	不詳	製鉄炉1、製鉄窓1
170	木場遺跡E式16(5月窓跡)	生遺跡	不詳	製鉄
171	木場遺跡F式16(6月窓跡)	生遺跡	不詳	製鉄
172	木場遺跡G式16(7月窓跡)	生遺跡	不詳	製鉄炉
173	木場遺跡D式16(8月窓跡)	掘六墓	不詳	掘6.1
174	大山遺跡	踏査地	不詳	新潟市布境
175	長谷村遺跡の山廻跡	踏査地	不詳	新潟市布境
176	「古窯跡」	踏査地	不詳	新潟市布境
177	「古窯跡」	踏査地	不詳	新潟市古遺跡
178	「古」古窯跡	不詳	不詳	現在又は塚
179	「古」古窯跡	踏査地	古代～中世	
180	「古」古窯跡	生遺跡	不詳	製鉄炉1、新津磨石場
181	「運行」古窯跡	踏査地	不詳	小堀崎・鶴ヶ丘
182	「運行」古窯跡	生遺跡	中世(縄文)	製鉄炉1、製鉄窓1
183	「運行」古ノヤマ2号古窯跡	生遺跡	古墳	製鉄窓3、新津磨石場
184	「運行」A通跡	踏査地	不詳	新潟市布境
185	「運行」A通跡	生遺跡	近世	製鉄
186	「運行」A通跡	生遺跡	近世末	新潟市「運行寺」
187	「運行」A通跡	生遺跡	近世末明	機械業
188	「運行」A通跡	踏査地	中世	古式瓦廠「運行寺」既定地
189	安宅1号古窯跡	その他の遺跡	不詳	新潟市定地
190	安宅1号古窯跡	踏査地	不詳	
191	安宅1号古窯跡	その他の遺跡	中世(復興)	
192	安宅1号古窯跡	不詳	不詳	櫛石原とも櫛石とも、現存せず
193	小松1号古窯跡	踏査地	近世	本丸・二ノ丸・三ノ丸の三層、本丸北門は小松市既定地
194	大川遺跡	踏査地	近世	近江小浜城下下、御用兵跡

No	名 称	種 别	時 代	備 考
194-2 東町遺跡	集落跡	近世	近世小此城下町・東町・東別院	
195 三原遺跡	生産遺跡	中世（室町）	範地	
196 多太郎日向内遺跡	居住地	中世（室町）	理知内古戸地	
197 木村御跡	城跡跡		木村氏が御跡山を領の一	
198 八日山地方遺跡	居住地	縄文～中世		
199 鶴見跡	集落跡	弥生	櫛塚集落	
200 福山中郷遺跡	居住地	古代（平安）		
201 福山中郷B遺跡	居住地	弥生	福山に分離された丸方郷御藏地	
202 福山A遺跡	居住地	古墳	福山に分離された丸方郷御藏地	
203 福山B遺跡	居住地	古墳		
204 鶴見跡	城跡跡	中世（室町）		
205 鶴見跡	居住地	弥生～古代	一里一宿・鶴川筋上郡垂衝民衝の承地	
206 鶴見跡	居住地	中世		
207 丸駒遺跡	居住地	縄文～弥生・中世		
208 長田遺跡	居住地	古墳		
209 長田遺跡	居住地	弥生～古墳		
210 大丘町A遺跡	居住地	弥生	大丘町・中世	
211 大丘町B遺跡	居住地	不詳		
212 大丘町C遺跡	居住地	古代（平安）		
213 末代ノジロ遺跡	居住地	弥生	末代ノジロ	
214 幸舟ツマニ遺跡	居住地	縄文～中世		
215 幸舟城跡遺跡	居住地	古墳	福山に分離された丸方郷御藏地	
216 幸舟城跡B遺跡	居住地	弥生	福山に分離された丸方郷御藏地	
217 幸舟城跡C遺跡	居住地	弥生	福山に分離された丸方郷御藏地	
218 GII998	城跡跡	中世（室町）	GII動向地図地図化事業	
219 GII遺跡	居住地	古墳～中世	透町遺跡の一帶	
220 透町遺跡	居住地	弥生～中世		
221 一針遺跡	居住地	縄文		
222 一針ノ遺跡	居住地	弥生～古墳		
223 一針ノ遺跡	居住地	弥生～古墳		
224 定地跡跡	社寺跡	中世（室町）		
225 末代・蓬莱遺跡	居住地	古墳～中世		
226 末代オキダ遺跡	居住地	縄文～弥生		
227 末代ノ前町遺跡	居住地	古墳	方道6	
228 末代跡	城跡跡	中世（室町）		
229 末代ノ村遺跡	居住地	古墳		
230 硬地遺跡	居住地	縄文		
231 佐々木遺跡	居住地	古墳	財氏城毛跡（余目）	
232 佐々木ノタウ遺跡	居住地	弥生～中世		
233 佐々木アサハラ遺跡	居住地	弥生～中世		
234 行糸遺跡	居住地	古墳		
235 行糸跡	生産遺跡	近世末	西側九谷（行糸坂）、透町式登案	
236 吉竹遺跡	居住地	弥生～中世		
237 吉竹ノ遺跡（吉竹遺跡19番区）	居住地	古墳	31河岸の海跡	
238 吉竹ノ遺跡	居住地	弥生～中世		
239 木本遺跡	居住地	縄文		
240 木本ノ遺跡	古墳	古墳	方道8	
241 朝向小遺跡・朝向乙司跡	古墳	古墳	所不詳、現存するのは現代残土の上に立地する式登案	
242 朝向ノア山1号山ノ遺跡	生産遺跡	古墳	近世長崎の式登案	
243 清水寺跡	社寺跡	古代～中世	創建は加賀国府・因幡守臣(山神寺開基)の…	
244 八幡遺跡	居住地	縄文		
八幡ノ遺跡	居住地	弥生～古墳・古代（余目）～中世（鐘骨）		
八幡ノ遺跡	その他の墓	古代（平安）	土居墓	
八幡ノ遺跡	古墳	古墳	内側8、木花桔子室	
八幡ノ遺跡	生産遺跡	近世末	西側九谷（八幡村社屋）、八幡有司領を削平して築いた透町式登案	
245 木本遺跡	居住地	古墳～中世		
246 朝向小ノ今ノ遺跡	居住地	縄文		
247 大谷ノ遺跡	居住地	弥生		
248 船山遺跡	居住地	弥生～中世		
249 船山ノ遺跡	生産遺跡	古墳	玉作	
250 船山中世墓群	その他の墓	中世（室町）	葉石墓羣	
251 船山中世寺	社寺跡	古代（平安）	大谷当山承地	
252 西方ノ寺跡	社寺跡	古代（平安）	西方当山承地	
253 古谷ノのまし遺跡	居住地	弥生～古墳		
254 古谷遺跡	居住地	古代（平安）		
255 古谷アシント遺跡	居住地	古代（平安）		
256 十九勢ノ小遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀郡分寺難波町	
257 十九勢ノ中世墓群	その他の墓	中世（室町）		
258 古谷町	半洋	半洋		
259 古谷ノ遺跡	居住地	古代（平安）～中世		
260 南野行跡	居住地	縄文		
261 小野遺跡	居住地	古代（平安）	加賀郡御定地の一隅	
262 小野スヌノ遺跡	居住地	古代（平安）	加賀郡御定地の一隅	
263 小野跡	生産遺跡	近世末	西側九谷（小野風）	
264 前田山愛公塙跡	その他の墓	近世	前田時宗公が參拝に使われた塙地される	
265 前田山の塙跡	その他の墓	近世末	古田の古伊勢と御用方法を記した村、小松市御定地跡	
266 前田山セナノ遺跡	居住地	不詳		

No	名 称	種 别	時 代	備 考
267	須山ヒサンゴ遺跡	遺布地	不詳	
268	須山ヒランゴ遺跡	遺布地	古代・中世	
269	須山ヒラカガ遺跡	遺布地	古墳	
270	芦谷ラ原敷遺跡	遺布地	縄文・中世（奈良）	
271	須山御跡	遺布地	古代	
272	須山塚	古墳	不詳	
273	須山山古墳群	古墳	古墳	円墳9、木柏古墳、木芯粘土室
274	須山古墳群	古墳	古墳	円墳12、方墳4
275	翻井森古墳	古墳	古墳	円墳
276	河山古墳群	遺布地 集落跡 その他の墓	古墳 弥生 古代（奈良）	前方後円墳2、前方後円墳2、円墳22、方墳34、不明1、木柏古墳、木芯粘土室、切石結構六石室
277	河山古墳群	古墳	古墳	地下式古窯、河山山1号墳の内部に所在
278	河山山1号墳	生産遺跡	古代（奈良）	前方後円墳2、前方後円墳2、円墳22、方墳34、不明1、木柏古墳、木芯粘土室、切石結構六石室
279	河山古墳308	生産遺跡	不詳	地下式古窯、河山山54号墳の前に開口
279	河山1号墳	遺布地	縄文・古代（奈良）	遺物堆积、能美古御跡跡群、八壁・河山古支郡、河山山60号墳の北側斜面に所在
280	河山2号墳	遺布地	不詳	遺物堆积、能美古御跡跡群、八壁・河山古支郡
281	下八幡橋古跡	城六墓	不詳	地下式古窯6、鐵穴1、不明1、3地點で計8基
282	六場橋古跡	城六墓	不詳	鐵穴2基
283	上八幡橋古跡	城六墓	中世（奈良）	鐵穴11基
284	上八幡橋古跡	その他の墓	中世（奈良）	
285	上八幡A遺跡	遺布地	縄文・古代（平安）	
286	上八幡B遺跡	遺布地	古代（奈良）	
287	上八幡C遺跡	城六墓	古墳	
288	上八幡D遺跡	遺布地	古墳	
289	上八幡E遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	遺物堆积、能美古御跡跡群、八壁・河山古支郡
290	上八幡F遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	地下式古窯、能美古御跡跡群、八壁・河山古支郡
291	河内町	不詳	不詳	
292	河山古墳群	遺布地	縄文・中世	
293	下山田影跡群	遺布地	不詳	
294	赤野人遺跡	遺布地	弥生	
295	赤野人遺跡	遺布地	古墳	
296	赤野人・石川遺跡	遺布地	古墳	
297	赤野人・石川遺跡	遺布地	古代（平安）	
298	河山山下遺跡	遺布地	古代（奈良）	
299	河山山古墳群	古墳	古墳	円墳7
300	八壁山山A遺跡	遺布地 集落跡	縄文 弥生	高地性集落
301	八壁山山B遺跡	遺布地 社寺跡	古墳 古代（奈良）	加賀808、圓分寺河山山寺院跡の…
302	八壁山山C遺跡	集落跡	弥生	円墳10、木柏古窯
303	八壁山山D遺跡	古墳	古墳	前方後方墳1、木柏古窯
304	八壁山山E遺跡	古墳	古墳	方墳2、木柏古窯
305	八壁山山F遺跡	古墳	古墳	方墳1
306	八壁山山G遺跡	その他の墓	縄文・古代（平安）	集石器、96号調査
307	八壁山山H遺跡	その他の墓	中世（鎌倉）	集石器、96号調査
308	八壁山山I遺跡	生産遺跡	古代（平安）	遺物堆积、能美古御跡跡群、八壁・宝来支郡
309	八壁山山J遺跡	生産遺跡	古墳	遺物堆积、能美古御跡跡群、八壁・宝来支郡
310	八壁山山K遺跡	生産遺跡	古墳	遺物堆积、20号調査20
311	里川1号墳	生産遺跡	不詳	遺物堆积
312	里川2号墳	生産遺跡	不詳	遺物堆积
313	里川3号墳	遺布地	縄文	
314	里川4号墳	社寺跡	古代（平安）	加賀808、圓分寺河山山寺院跡の…
315	里川5号墳	長方形	古代（平安）	加賀808、圓分寺河山山寺院跡の…
316	里川6号墳	遺布地	不詳	
317	道楽タカラタケリ遺跡	遺布地	古代（平安）～中世	社寺（跡明寺）又は城跡伝承地
318	道楽タカラタケリ遺跡	遺布地	古代（平安）～中世	社寺（跡明寺）又は城跡伝承地
319	小明寺古跡群	生産遺跡	古代（平安）	遺物堆积（石狗遺跡）
320	道楽寺古跡	遺布地	縄文	古代遺跡の可能性も
321	河内山遺跡群	その他の墓	（平安）	遺物4、3基調査、2号墓は鎌倉時代に疑毎に利用された？
322	道楽寺古跡	社寺跡	古代（平安）	中河内88、西側にある石碑の…
323	安地寺古跡	社寺跡	中世（奈良）	一回・複・宇治安地の宮守跡とも
324	鶴川御跡	城跡跡	不詳	一回・複・宇治安地の宮守跡とも
325	鶴川山六	不詳	不詳	地下式古窯
326	弘大寺古跡	社寺跡	中世	
327	弘大寺とうじ山古跡	古墳	古墳	
328	弘大寺跡	社寺跡	中世	
329	弘大寺塚	縄屋	中世	
330	ブツコウジヤマ古跡群	古墳	古墳・中世	円墳2、木芯粘土室
331	中海1号遺跡	集落跡	古代（平安）	中河内88、地名伝承のみ
332	中海2号遺跡	遺布地	古代（平安）～中世	
333	中海3号遺跡	遺布地	縄文	
	別沢1号遺跡	遺布地	古墳	

No	名 称	種 别	時 代	備 考
334	赤坂山跡遺跡	その他の墓	中世	
335	赤坂山跡遺跡	踏布地	縄文	
336	朝の谷塚古墳	不詳	不詳	
337	赤坂古ズギノ谷塚古墳	城内墓	不詳	存在自体が不明、5基跡に記される 城六号、地下式塚4
338	黄岡古跡	丘寺跡	古代(平安)	小菅八幡
339	羽須古跡	城跡跡	中世	
340	乞土田跡跡	城跡跡	中世	
341	乞跡山跡・乞跡丘墓	その他の墓	古代(平安)	小松市指定史跡
342	吉田山跡	踏布地	縄文	
343	吉川10世紀跡	その他の墓	中世	
344	下吉川町古墳	城内墓	不詳	城六3
345	羽音跡跡	城跡跡	中世(室町)	
346	唯の木山跡跡	踏布地	縄文	
347	丘跡古跡	丘寺跡	不詳	小菅八幡
348	瀬田谷跡跡	丘寺跡	古代(平安)	小菅八幡
349	板谷寺跡	丘寺跡	古代(奈良)	8世紀前半に遡る古代山林寺跡
	板谷寺跡	踏布地	不詳	中世八幡
350	平野寺跡	城跡跡	中世(室町)	一の坂・平野尾山城伝承地
351	江出跡跡(山神山跡跡)	城跡跡	中世(室町)	
352	蓮花寺跡跡	丘寺跡	不詳	中菅八幡
353	西谷古跡跡	踏布地	中世(室町)	
354	西谷寺跡跡	踏布地	中世(室町)	一の坂・宇摩の内側古跡伝承地
355	(未)西谷町古跡跡	丘寺跡	中世(室町)	
356	西谷寺跡跡	踏布地	不詳	城六13、地下式塚5
357	東谷寺跡跡	踏布地	縄文	
358	東河寺跡跡	踏布地	縄文	
359	大竹山跡跡	城内墓	不詳	城六3
360	こかく谷城古	城内墓	不詳	城六1
361	云山城古	城内墓	不詳	城六1
362	道城山跡	城壁	中世(室町)	
363	崩山城古	城内墓	不詳	城六1
364	赤堀跡跡	踏布地	縄文	
365	今ノ原跡跡	踏布地	縄文	ほかに羽目跡の伝承あり
366	鶴子山跡跡	城跡跡	不詳	
367	和気山古跡跡	生産跡跡	古代(平安)	千賀羽目山、能美古跡跡南群、鷹山古群
368	和気山古跡跡2号跡跡	生産跡跡	古代(奈良~平安)	能美古跡跡、能美古跡跡南群、鷹山古群
369	和気山古跡跡3号跡跡	生産跡跡	古代(平安)	能美古跡跡、能美古跡跡南群
370	和気山古跡跡	生産跡跡	近世	
371	和気丸山跡跡	踏布地	縄文	
372	和気山古跡跡	城跡跡	不詳	
373	和気山古跡跡	生産跡跡	不詳	武野羽目、能美古跡跡南群、鷹山古群
374	唐守城跡跡	城跡跡	中世	
375	唐守城古跡跡	城内墓	不詳	
376	寺合山跡跡	生産跡跡	不詳	能美古跡跡、能美古跡跡南群
377	寺合山跡跡	古墳	古墳	
378	綱谷寺跡跡	丘寺跡	不詳	
379	綱谷山跡跡	その他の墓	中世	
380	綱谷寺跡跡	城内墓	不詳	
381	綱谷寺跡跡	城跡跡	不詳	

## 参考文献

- イ 石川県教育委員会(1992)石川県遺跡図
- 石川県立埋蔵文化財センター(1986)漆町遺跡I,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988)漆町遺跡II,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988)辰口西部遺跡群I,石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988)白江桺川遺跡I,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)漆町遺跡III,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)漆町遺跡IV,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)白江桺川遺跡II,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)蓮代寺地区遺跡I,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1990)小松市高堂遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター(1993)能美丘陵東遺跡群I,石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1995)石川県小松市荒木田遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター(1997)能美丘陵東遺跡群II,石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1998)能美丘陵東遺跡群III,石川県能美市
- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999)能美丘陵東遺跡群IV,石川県能美市
- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999)能美丘陵東遺跡群V,石川県能美市

- (財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 辰口町上徳山谷山西古窯跡, 石川県能美市
- (財) 石川県埋蔵文化財センター (2002) 加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡
- (財) 石川県埋蔵文化財センター (2006) 小松市矢田野遺跡群
- (社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1993) 小松市林遺跡
- (社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1998) 石川県小松市八幡遺跡 I
- 石川考古学研究会 (1988) 石川県城館跡分布調査報告
- ワ 上野 興一 (1965) 考古篇, 小松市史 4. 風土・民俗篇, 小松市教育委員会, 石川県
- カ 輸海用水誌編纂委員会 (1996) 輸海用水誌, 小松東部土地改良区, p75-77, p201-221, 石川県
- コ 小松市教育委員会 (1988) 念仏林遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (1990) 海上谷古窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (1990) ニツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (1992) 矢田野エジリ古墳, 石川県
- 小松市教育委員会 (2000) 矢田僧屋古墳群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I, 石川県
- 小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2005) 小松市内遺跡発掘調査報告書 I. ニツ梨豆岡向山窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II. 矢田僧屋古墳群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 千代才オキダ遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 頼見町遺跡 I, 石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 小松市内遺跡発掘調査報告書 III. 薬師遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 頼見町遺跡 II, 石川県
- 小松市教育委員会 (2008) 頼見町遺跡 III, 石川県
- 小松市教育委員会 (2009) 頼見町遺跡 IV, 石川県
- 小松市教育委員会 (2010) 頼見町遺跡 V, 石川県
- 小松市教育委員会 (2011) 小松市内遺跡発掘調査報告書 VII. 矢崎宮の下遺跡・薬師遺跡 V 次, 石川県
- 小松市教育委員会 (2014) 大川遺跡, 石川県
- 小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦, 小松市, 石川県
- 小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と荘園, 小松市, 石川県
- タ 辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶臼山古墳群, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窯跡, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窯跡 III, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶臼山古墳群 II, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2005) 和気後山谷窯跡群, 石川県能美市
- チ 寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群, 石川県能美市
- ハ 日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌, 能美郡役所, p366-375, p642, p823, p1268-1269, p1342-1343., 石川県
- 日置 謙 (1925) 石川県江沼郡誌, 江沼郡役所, p679., 石川県
- ホ 北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸, 桂書房, p193-208.

## 第Ⅱ章 二ツ梨豆岡向山窯跡群2（遺物編1）

### はじめに

今報告は『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』（小松市教委 2015）にて遺構編を報告した「二ツ梨豆岡向山窯跡群2」の遺物編1にあたる。報告遺物は4号窯（4-1号窯及び4-II号窯）関連遺物である。なお調査の経緯と概要については、小松市教委（2015）を参照されたい。

付章として、その他遺構の一部（SK02・SK03）と、2次調査（小松市教委 2005）及び3次調査（今報告）で出土した炭化材の自然科学分析結果を報告する。自然科学分析については、小林克也氏およびパレオ・ラボ AMS 年代測定グループの御協力により玉稿を賜った。記して感謝の意を表したい。

#### 【凡例】

##### 1. 遺物の器種分類と編年観

須恵器・土師器とともに、北陸古代土器研究会で使用するものに準じ、第5図の通り設定した。防戸貝に関しては、北野博司1999「須恵器防戸貝の器種分類案」[北陸古代土器研究第8号]に基づいたものである（ただし、直A・直Bおよび直D・直Eは区分していない）。

土器編年と曆年代観は、田嶋明人氏の古代土器編年軸（田嶋明人1988「古代土器編年軸の設定」「シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）」及び1997「知賀地域での10・11世紀土器編年と曆年代」「シンポジウム北陸の10・11世紀（土器編年相）」に基づいて、望月精司氏が示した編年観と繩分案に準じる（望月精司2002「北陸古代土器編年と南加賀窯跡群細分案」「二ツ梨一貫山窯跡」及び2005「第8章考察—能美窯跡群の8世紀後半～9世紀中頃の須恵器編年と窯場動向—」和氣後山谷窯跡群）、2009「南加賀地域古代土器編年軸と曆年代観」[頬見町遺跡IV]）。

近年、古代V期を若干遅らせた曆年代観（2010「南加賀地域古代土器編年軸と三輪台編年、曆年代観」「頬見町遺跡V」）が提示されているが、今報告では従来のものを踏襲する。

##### 2. 遺物図版について

- ・ 縮尺は食膳具と焼土1/3、貯蔵具と焼炊具1/4を基本とする。
- ・ 製造番号と「実測回数番号」を併記。
- ・ 須恵器は断面黒塗、土師器は表面白抜き。
- ・ 黏土塊や焼台片等付着物は断面斜線バーン、赤色は黒20%塗。
- ・ 「▼」を正中線に付すものは、全体を反転復元するもの。それ以外は全実測あるいは部分的に反転するものである。正中線と稜線・調整線等が離れているものは、ゆがみが大きいか残存率が低く、径の数値が正確でない可能性があるもの。
- ・ ヘラケズリ調整の範囲や方向は矢印で示す。
- ・ 底部に回転系切痕をもつものは「●」を付す。
- ・ その他特徴的な調整は觀察表に付記した。

##### 3. 遺物觀察表について

器種：上記の器種分類に準じた器種名を示す。

区・地点・取上げ詳細：出土した調査区及び遺構名・グリッド名を示し、「窯床」「窯灰床（焚口前面土坑）」「窯舟底状ビット内」「灰原」「窯埋土」「SK01」の地点ごとに記載する。詳細な出土地点は一部省略しつつ注記内容に準じた。なお表上や盛土からの出土など2次堆積の可能性が極めて高いものには（ ）を付す。

法量：「口」＝口径、「底」＝底径、「台」＝高台径、「脚」＝脚部径、「胴」＝胴部大径、「頭」＝頭部径、「つ」＝つまり径、「高」＝器高、「台高」＝高台高、「頭高」＝頭部高、「つ高」＝つまり高、「頭高」＝頭部高で示し。（ ）は残存値、〔 〕は推定復元値を表す。単位はcmに統一した。

性格：「製」は器種分類に準じた使用が想定される製品とし、「転」は主に2次被熱痕がある製品の中で焼台や置台として転用した可能性をもつものとして扱った。

焼成：「堅焼き」＝焼き締まりが非常に強いもの、「良好」＝焼き締まりが強め、が堅焼きより弱いもの、「良」＝還元状態を保つが焼き締まりが弱いもの、「やや良」・「やや不良」＝「良」と「不良」の中間に位置するもの、「不良」＝白い生焼け状態のもの（生）や酸化状態の焼成不良で軟質のもの（軟）をそれぞれ示す。

色調：障壁部分、釉付着部分を除いた大まかな色調を示す。ただし素地の色が不明瞭な場合は通常灰や褐色を示した。色調の判別は以下のとおりマニセル表色系に準拠して表記する。

白色～N-8（生焼け品）、灰白色～N-8、灰色～N-7～5、

灰オーリーブ色～5Y6/1～4/1、明青灰色～5PB7/1あるいは

5PT7/1、青灰色～5PB6/1～5/1あるいは5P6/1～5/1、暗

（青）灰色～N-3あるいは5PB4/1～3/1、褐灰色～7.5YR6/1

～4/1、（明）赤灰色～2.5YR7/1～6/1あるいは2.5YR7/2

～6/2（酸化焼成品）。ほか例外となる色調はその都度付記した。

胎土：「通常」＝南加賀窯跡群の戸津オダニ社群で通常見られる、粘土質の土に適度に砂粒（粒径 2mm 未満）が混在し、まれに礫粒（粒径 2mm 以上）を含む胎土、「砂（礫）多」＝通常の胎土よりもやや砂粒や礫粒が多い胎土、「礫多」＝混和材と呼べる大粒の礫を多量に混在させる土師器焼炊具同様の胎土を、それぞれ示す。ほか特記すべき事項がある場合は付記する。

完存：口縁部残存率（36 分率）を示す。他の部位で示す場合は、脚、底、台、脚等を数値に付記する。

回転：ロクロ回転の方向かヘラケズリや底部ヘラ切り痕・糸切り痕の觀察から判明した場合は、回転方向を「右」「左」で示す。

備考：その他下記のような記載事項がある場合は備考に記す。

・ 底部糸切り・糸切りがある場合に記す。ヘラ切りの場合は特に記さない。

・ ヘラケズリ一部を示し、「回転ケズリ」もしくは非回転ケズリの場合は「ケズリ」と記す。

・ ヘラ記号一部と種類を示す。種別できない場合は「不明ヘラ

書き」。

- 重ね焼き分類一環B 烧成痕跡の分類。北野博司 1988 「重焼の觀察」『辰口西部道路工』に基づく（I類—蓋正位組合せ重ね焼き、II a 類—逆位と身正位の組合せ重ね焼き、II b 類—蓋正位・逆位と身正位・逆位の組合せ重ね焼き、III類—蓋および身の柱状重ね焼き）。対象は有蓋器種（环B）だが、無蓋器種（环A・盤A・盤B）についても皿類が觀察されたものは付記する。
- タキ分類—貯蔵具の側部形成や調整の際に生じる叩き具・当て具痕跡の分類。花塚信雄 1984 「須恵器表面叩き目文について」『金沢市歴史・寺中道路』に基づく。

## 第1節 4号窯関連遺物の概要

調査区 A 区に 4 号窯と SK01 が位置し、A 区から D 区にわたって灰原が広がる。灰原は後世の切土・盛土によって搅乱が激しいため、灰層確認状況から灰原範囲（か 3 ～か 5 グリッドおよび、き 3 ～き 5 グリッド）を推定した。今報告で計測・実測の対象とした灰原出土遺物は、基本的にこの範囲からの出土であるが、搅乱による 2 次堆積の可能性をもつものが含まれている。SK01 は遺構編で窯操業時に伴う土取り場・製品や燃料の置き場・廃棄場の機能を想定した。窯埋土から出土した遺物は操業後の埋没・廃棄品と考えられる（調査区の位置は第 24 図参照）。

4 号窯は遺構編で 9 世紀前半で位置づけたが、今報告の遺物報告をもって詳細な時期を確定したい。灰原を含む調査区 D 区の表土や標高の低い地点には 5・6・13 号窯由来と考えられる時期の新しい遺物が混ざるため、それらの遺物は極力除外した。

SK01 は基本的に 4 号窯に伴う遺物が主体だが、窯操業時期より新しい VI 期以降の内裏塊 B や鉢 B（括れ鉢）を確認している。おそらく操業後も廃棄場として機能したと推測されるものだが、今報告では除外した。

遺物の出土量はパンケー（64.5cm × 37.5cm × 14.5cm）に換算すると、凡そ窯体内出土遺物（窯床・窯灰層・舟底状ピット）が 4 箱、灰原・窯埋土出土遺物が 100 箱弱、SK01 が 2 箱である。遺物の接合状況は、窯灰層—灰原—窯埋土—SK01 の間で複数認められているが、窯床面と他地点の接合は 1 点のみ調査区表土との接合を除いて確認していない（詳細は本章末尾の観察表参照）。

## 第2節 器種構成と各器種について

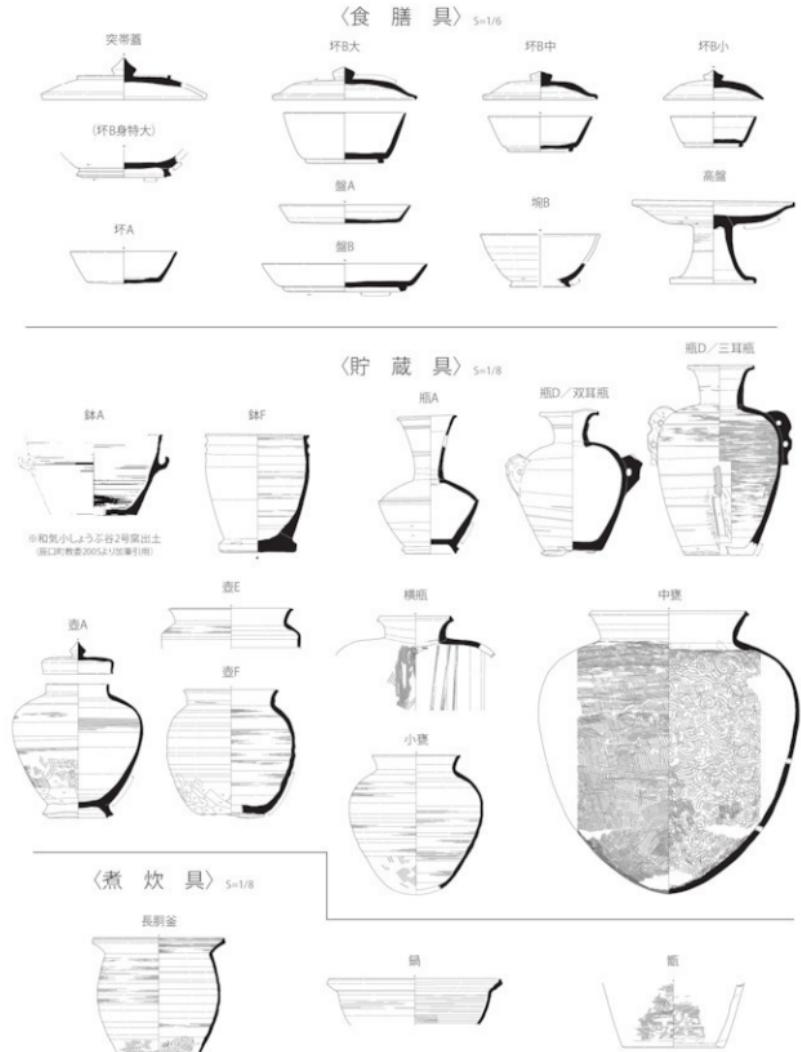
器種構成表（第 2 表）に示したように、出土遺物は高火度還元焰焼成の須恵器食膳類が約 90% を占め、貯蔵具と煮炊具が伴う。煮炊具は低火度酸化焰焼成の土師器器種であるが、須恵質と土師質のものが存在するため、構成表に加えた。表に示したもの以外に塊 B・小型貯蔵具・赤彩土師器塊 A・貯蔵具専用焼台が出土しているが、極わずかであるため計測対象から除外し、特殊品として別に扱った。また、环 B は蓋の計測値を採用し、有蓋の壺 A につく壺蓋は除外した。

- 頭部接合分類—瓶類の頭部接合法は「和気後谷窑跡群」（2005）に倣い、A 類（風船技法）と B 類（開口法）に大別し、A 類は 3 層分した（A1 類—大円盤閉塞、A2 類—中円盤閉塞（内盤底見えるタイプ）、A3—小円盤閉塞（内盤底見えないタイプ）もしくは円盤閉塞しない取り切り）。

\* 観察箇所を示す場合、（部位）—（内面・外側）—（上半・下半）の順に略して記載



第4図 出土地点概略図



第5図 器種分類図

## 参考文献(第Ⅱ章および付章1)

小松市教育委員会 1975『戸津5号窯跡(概報)』

小松市教育委員会 1991『戸津古窯跡群』

石川県埋蔵文化財保存協会 1993『小松市林道路』

石川県埋蔵文化財センター 1999『辰口町上徳山谷山西谷窯跡』

小松市教育委員会 2005『小松市内遺跡発掘調査報告書1』

辰口町教育委員会 2005『和氣後山谷窯跡』

小松市教育委員会 2015『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』

※凡例で記載したものは一部省略

食膳具は底部回転ヘラ切り器種で占められ、環Bと盤Aが合わせて70%以上にのぼり、これに環Bと盤Bが伴い、わずかに高盤が含まれる。貯蔵具は壺瓶類が主体で、これに甕類が伴い、わずかに鉢類と横瓶が含まれる。煮炊具の約90%は（長胴）釜で、鍋と甑は個体数でわずかに1個体のみの出土である。なおこれら各器種の中には、焼色が白色系で堅緻に焼かれる一群が一定量存在する。

参考までに窯体内の器種構成表を第3表に示した。全体の構成と同じく食膳具主体であるが、この中には焼台（置台）転用品が多く含まれ、貯蔵具（瓶台部・壺口縁・甕胸部）転用品もみられた。詳細は確認していないが、壁床修復材として利用されたものも一部含まれると思われる。以下、各器種の概要を述べる。

第2表 全体器種構成表（口縁部計測値総計17,509／36）

器種	環B（蓋・身）	環A	盤A	盤B	高盤	食膳具計	
口縁部計測値（/36）	蓋 1,843	身 1,492	6,432	5,339	2,306	118	16,038
占有率	11.5%		40.1%	33.3%	14.4%	0.7%	91.6%
器種	鉢類	瓶類（瓶D内訳）	壺類	横瓶	甕類	貯蔵具計	
口縁部計測値（/36）	20	506 (251)	606	20	218	1,370	
占有率	1.5%	36.9% (17.9%)	44.2%	1.5%	15.9%	7.8%	
器種	釜	鍋	甑・底盤	煮炊具計			
口縁部計測値（/36）	90	5	6	101			
占有率	89.1%	5.0%	5.9%	0.6%			

第3表 窯体内器種構成表（口縁部計測値総計1,546／36）

器種	環B（蓋・身）	環A	盤A	盤B	高盤	食膳具計	貯蔵具計	煮炊具計
口縁部計測値（/36）	68	46	558	558	232	35	1,451	88
占有率	4.7%		38.5%	38.5%	16.0%	2.4%	93.9%	5.7%

## 1 食膳具

〈金属器系有蓋器種（1・2）〉 天井部を巡る突帯や高い宝珠形のつまみをつける金属器系の蓋（突帯蓋）が特徴的である。器種構成表では環B蓋に含めた。全体の器形が分かることはわずかであるが、2法量（20cm以上と20cm～19cmか）が存在し、ヘラケズリや厚く降灰する点など優品として生産されたものと考えられる。この蓋に伴う身は特定できていないが、環B身として掲載した中で台部高く踏ん張り、体部から底部をヘラケズリするシャープなつくりのもの（45）が候補としてあげられる。

〈環B（3～74）〉 蓋口径から法量分化を見ると、19cm未満14.5cm以上を大、14.5cm未満12.5cm以上を中、12.5cm未満を小の3法量に分けられる。19cm以上の確実な特大法量は確認できおらず、前述の金属器系器種があてはまるのかもしれない。大法量と中小法量の境目は明確で、中法量と小法量の境目は近接するが、小法量は口縁端部折り曲げの無いタイプ（39～42）として作り分ける傾向にある。金属器系器種（特大法量）を含めて大まかな量比を口縁部計測値から算出すると、特大と小がそれぞれ約10%で、大が約50%、中が約30%となる。

蓋は乳頭状つまみ（8）や偏平つまみ・偏平器形（15・24・25・37）の古いタイプに、高い宝珠形つまみ（14・29）や、天井部丸味を帯びて器高が高く口縁端部がつぶれて外屈傾向にある（13・14・16）新しいタイプが伴う。天井部ヘラケズリ率は実測個体数中で55%。

身は蓋よりも口径が1～1.5cm程小さくなるサイズで、体部外傾化傾向にある。前述の金属器系

器種と推測される特大の台部(45)があり、壺瓶類台部を思わせるがっしりとしたつくりをしている。それ以外にも大法量の中に金属器系器種の影響と考えられる太高い台部(台高 0.9 ~ 0.8cm)があり、体部下半~底部をヘラケズリするもの(46)や径高指数 54 の超深身になるもの(47)がある。一般的な大法量は台高 0.5cm 前後に径高指数 37 ~ 45 程度で、中には台径小さく口縁が大きく聞く塊形指向タイプ(59)が存在する。61 は体部にヘラ描きを施す。中小法量は径高指数 32 ~ 37 の大法量よりもやや偏平器形となるものが主体である。底部ヘラケズリは大法量のみにみられ、実測個体数中で約 19% にとどまった。

蓋身の重ね焼き方法は確認個体数 109 点中で、I 類 41 点(38%)、II a 類 53 点(49%)、II b 類 15 点(14%)と II a 類がやや多く I 類がそれに次ぐ。以下の無蓋器種は身のみを重ねる III 類となる。

**〈环 A (75 ~ 123)〉** 口径 12 ~ 14cm 前後、径高指数 21 ~ 30 主体の 1 法量。器形は底部厚く丸みを帯びて立ち上がる一群(88 ~ 94)とやや外反する一群(80・81・86・95 ~ 101)の古いタイプと、底部薄く体部外傾する新しいタイプ(76・77・118 ~ 123)がある。後者のタイプは底部小さい深身器形とやや偏平器形に分けられる。

**〈盤 A (124 ~ 173)〉** 口径は概ね 15 ~ 18cm に分布する。环 A 同様に体部外傾化傾向にあり、体部長く伸びるタイプが主体である。これに底部から丸く立ち上がる一群(135 ~ 139)、体部やや短く立ち上がる一群(140 ~ 144)といった古いタイプが伴う。底部ヘラケズリは 1 個体確認(124)。

**〈盤 B (174 ~ 192)〉** 口径は概ね 19 ~ 23cm に分布する。环 A・盤 A 同様、体部外傾化傾向にあり、外傾化が著しいものもある(174・175)。これに体部が立ち気味となる古いタイプ(176・179 ~ 182)が伴う。底部ヘラケズリは盤 A に比べて多く、実測個体数中で約 63% を占める。

**〈塊 B (193)〉** 口径 14.5cm の施釉陶器模倣器種で 1 個体のみ確認。図上復元のため計測値に誤差があるかもしれないが、深身で体部内湾して口縁端部が外反する器形である。体部上半にはロクロヒダが残り、下半にヘラケズリを施す。底面のヘラケズリは残存部位から確認できなかった。焼色は灰白堅緻で、口縁端部が黒化し、内面には台部片が軸着することから、重ね焼き III 類と判断される。

**〈高盤(195 ~ 199)〉** 盤器形に脚部のつく器種。盤部は全て口径 20cm 前後の環蓋逆転器形を呈し、ヘラケズリを施す。脚部は太く短いタイプである。

## 2 貯蔵具

**〈鉢類(200 ~ 205)〉** 鉢 A と鉢 F を確認しており、後者が主体である。鉢 A は把手 1 点のみの確認(205)で、窯土が付着し破面が研磨されていることから、窯道具への転用が考えられる。鉢 F は容量 2.5 ℥ 程度で、やや内湾気味に立ち上がる器形である。200・202・203 で底部糸切り痕が確認され、202 ~ 204 の底面および底側面にはヘラ先刺突が施される。

**〈瓶類(206 ~ 227・256)〉** 瓶 A、瓶 D、横瓶を確認し、瓶 D が瓶類全体の約半数を占める(残りの半数は瓶 A 主体で、なで肩球胴形となる明確な瓶 B は確認できていない)。瓶 A は容量 1 ℥ 程度の肩張り長頸台付器形である。口縁端部は面取り風のナデ仕上げ(206)と外屈(207・208)の 2 つがあり、口頸部は長く外反する。胴部下半はヘラケズリを施すものもある。瓶 D は耳付きのなで肩平底器形である。耳は双耳主体で三耳が伴い、1 穴穿孔が主体である。容量は 2 ℥ 代(小)、4 ℥ 前後(中)、5 ℥ 以上(大)の 3 法量あり、217 の小型球胴形以外は胴長傾向にある。口縁端部は外屈面取り(218・220)、折り返しつまみ上げ(217・221・226・227)、上下端つまみ出し(222)があり、口頸部は細く短くつくのが一般的である。胴部下半~底部はヘラケズリするものが多い。216 のみ底部糸切り痕を確認した。ほかに口径 4 ~ 6cm の小型品(223 ~ 225)も確認している。横瓶

(256) は胴部叩き成形する俵形器形で、口頭部が太く短く外反するタイプを確認した。

瓶Aと瓶Dの頸部接合法については、大円盤閉塞（A1類）は認められず、小円盤閉塞もしくは絞り切り（A3類）が主体である。瓶A内訳は確認個体数12点中でA2類1点とA3類11点、瓶D内訳は確認個体数12点中でA2類3点、A3類7点、B類2点となった。

〈壺類（228～255）〉 貯蔵具の中で最も高い占有率となる器種である。壺A・壺E・壺Fを確認しており、壺A・壺Fが主体である（概ね3:7の割合だが、小甕口縁が混ざる可能性あり）。壺Aは有蓋で、なで肩球胴付器形である。容量は身では2ℓ～4ℓ前後が主体であるが、蓋口径では10cm～12cm（228～230）、15cm台（231～233）、20cm台（234）の3法量がある。蓋は天井部へラケズリするほか、234の大型品は面に対して円弧を描くように叩き成形する。また2次被熱を受けた転用痕が多くみられた。身は口径10cm前後の狹口で、口頭部立ち上がり付近に蓋袖着痕が残る。胴部下半はヘラケズリするが、4ℓ前後のものには叩き成形後ヘラケズリする（235・238）。台部は瓶A同様の形状が主体だが、一部に足高となる新しいタイプも存在する（237）。壺Eは南加賀窯では客体的な肩張り器形である。252と254が肩部張る確実なものだが、253は246・247同様の中型壺、255はやや肩の張りが弱いもので、厳密には分類できないかもしれない。壺Fは広口で肩平底器形で、容量8ℓ台（大）と3～4ℓ程（小）の2法量存在する。大法量は長く聞く口縁、小法量は短く聞くか直立気味となる口縁である。共に胴部下半に非回転のヘラケズリを施し、大法量には叩き成形するものも含まれる（245）。251の底面には押圧痕が観察された。

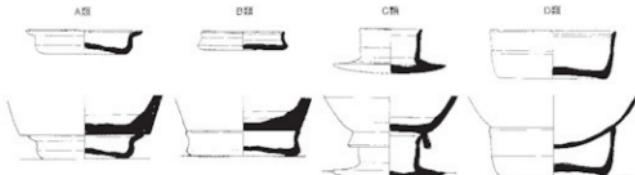
〈甕類（257～266）〉 中甕（30ℓ台）と小甕（30ℓ未満）が主体で、大甕が伴う（頸部片確認、掲載なし）。胴部成形については、外面平行線文叩き出し後カキメ調整、内面同心円文当て具痕が基本だが、中甕の中に叩き出し後内面ハケ調整するものがある（261・265）。叩き工具痕は外面He類、内面Da類が主体である。

### 3 煎炊具

釜（267～272）、鍋（274）、甑（273）を確認しており、釜主体である。釜は長胴形で、カキメ調整後に非回転ヘラケズリおよび胴部下半～底部の叩き成形を行うものである。叩き工具痕は外面Ha類、内面Da類が主体となる。口縁端部は上につまみ上げるもののが主体だが、一部つまみ上げた部分を外へわざかに伸ばす新しいタイプ（271）を含む。鍋も釜同様に口縁端部をつまみ上げるタイプで、胴部はカキメ調整を施す。甑は底部付近のみの資料だが、叩き成形後のカキメ調整が観察される。

### 4 上師器

底径5.5cmの赤彩土師器塊A（279）を確認した。器面の風化が激しいが、内外ともに赤彩の痕跡が認められる。本窯で焼かれたものではないと推測されるが、他の器種と時期的に齟齬がないため掲載した。ほか271・272・273が上師質の製品である。



第6図 貯蔵具専用焼台の基本類型（小松市教委2002より・S=1/6）

## 5 窯道具

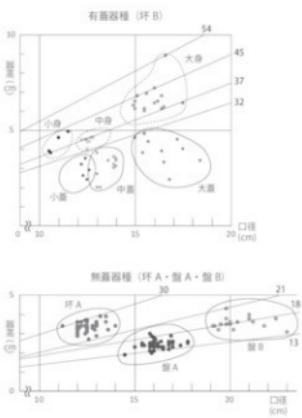
明確な量比は出していないが、前述したように窯体内を中心に須恵器食膳具や貯蔵具の転用焼台(置台)を多数確認している(写真図版 12 参照)。275 は瓶 A の台部片と粘土塊を組み合わせた転用焼台で、体部内傾する専用焼台 C 類のような断面形状をつくる。一方、専用焼台は灰原周辺の表土でいくつか検出されている。多くは本窯よりも新しい時期に位置づけられる 5・6・13 号窯由来のものが混入したと考えられるが、その中から本窯に伴うと思われるものを抽出した(276 ~ 278)。特に 278 は能美窯で確認される底部穿孔を施す古いタイプであるが、わずか 1 個体にとどまるため、本窯では積極的に専用焼台を使用しなかったことが推測される。

### 第 3 節まとめ

概要の中で漠然と「古い」「新しい」という語句を用いたが、前者を古代IV期、後者を古代V期の要素として考えている。南加賀窯では同時期に、戸津 5 号窯・58 号窯、二ツ梨一貫山 9・11 号窯灰原および斜面下方堆積灰原の資料があるが、部分的な資料や複数時期混在の資料である。そのため同時期と考えられる能美窯(和氣後山谷窯跡群)と対比しながら、操業時期を評価したい。

食膳具は环盤類主体で、能美窯と比べて环 A・盤 A 主体は共通するが、环 B が少なく盤 B が多い。金属器系器種(突帶蓋)の生産や全般的な体部外傾化・薄手化傾向、白色系堅織製品の定量生産は新しい要素と言えるが、古手の器形や口縁端部折り曲げない环 B 小法量、底部ヘラケズリの存続等古い要素も認められる。ヘラケズリは盤 A でほぼなくなり、环 B 蓋や盤 B で多い。环 B 重ね焼きの II a 類主体は IV<sub>2</sub> 期以降の南加賀窯の特徴で、II b 類主体となる能美窯とは逆転傾向にある。能美窯で新たに加わる塊類や足高の盤 B 等は確認できず、わずかに定着前の塊 B が存在するのみである。高盤は伝統的な太く短い脚部に環蓋逆転器形の盤部を有する。

第 4 表 食膳具の法量分布

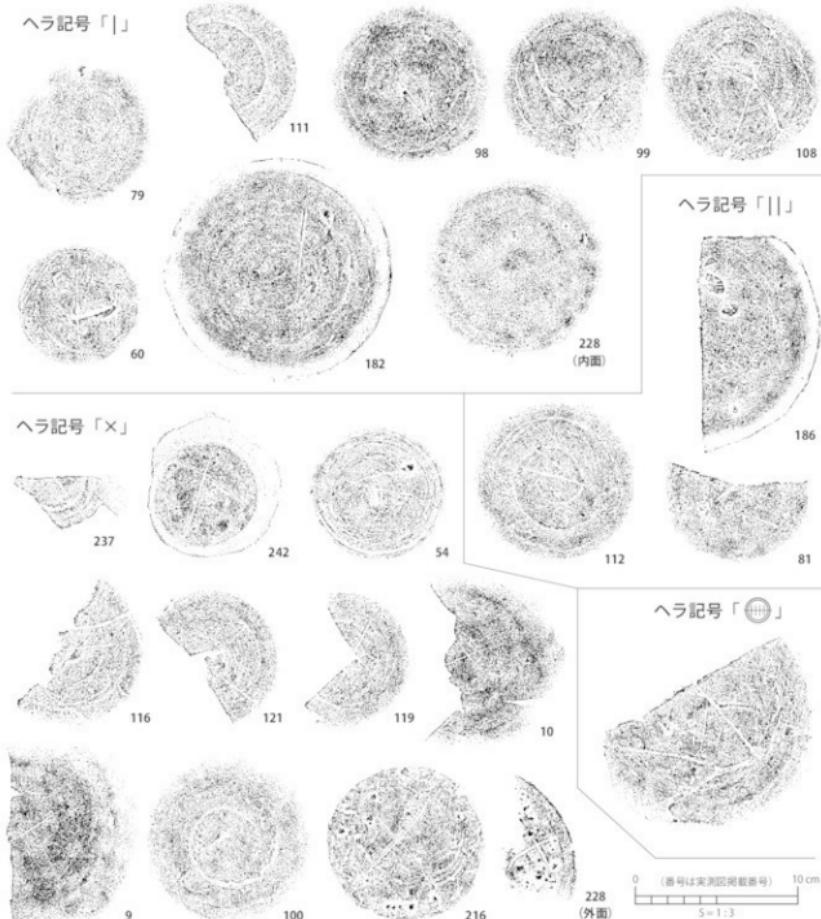


貯蔵具は壺瓶類主体で、IV<sub>2</sub> 新期以降に能美窯で進行する現象に共通するが、鉢 B や瓶 B 等の新器形は確認できない。ただし瓶 D の生産率は高く、IV 期以前の特徴(細く短い口頭部や球胴形の胴部)を残しつつ、V 期以降につながる長胴化や法量分化の兆しがみられる。壺類では壺 A 台部足高タイプは新しい要素であるほか、壺 F が多いのは V 期以降に壺 E が増加する能美窯とは異なり、南加賀窯の特徴である。また叩き成形する壺類が存在するが、V 期以降に中張の小型化と壺 F 増加によって小張が減少することと関連するのかもしれない。横瓶は南加賀窯では IV<sub>2</sub> 古期以降衰退する器種だが、わずかに残存する。貯蔵具専用焼台は積極的に導入せず、伝統的な転用品を多用する。

能美窯と南加賀窯の生産体制が前者は先進的で後者は保守的と評価される点や、本窯が修復や改造を経ている点を考慮して、本窯操業時期を IV<sub>2</sub> 新期～V<sub>1</sub> 期(8 世紀末～9 世紀前葉)に位置づけておきたい。また V<sub>1</sub> 期でも古い段階(上徳山谷山西窯段階か?)で操業を終えると推測される。

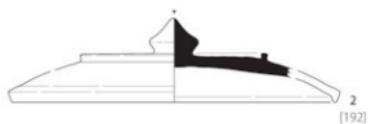
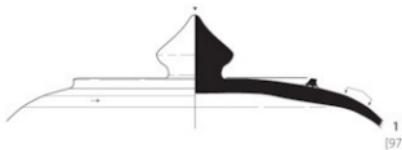
第5表 ヘラ記号構成表

	环 A	环 B 盖	环 B 身	盤 A	盤 B	食器其 分類不可	壺 盖	壺 類	瓶 類	野 碗 其 分類不可	計
	44	6	6	45	5	1	1		1	2	111
	6	1		4	2			2			15
	1			2							3
×	24	4	1	17	9		1	3	1		60
不明ヘラ描き	49	2	4	34	8	2		1		2	102
計	124	13	11	102	24	3	2	6	2	4	291



第7図 ヘラ記号拓本

〈灰原出土 突帶蓋〉



〈4-II号窯 1次床出土 坯B蓋〉



〈4-II号窯 2次床出土 坯B蓋〉



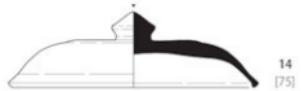
〈窯灰層出土 坯B蓋〉



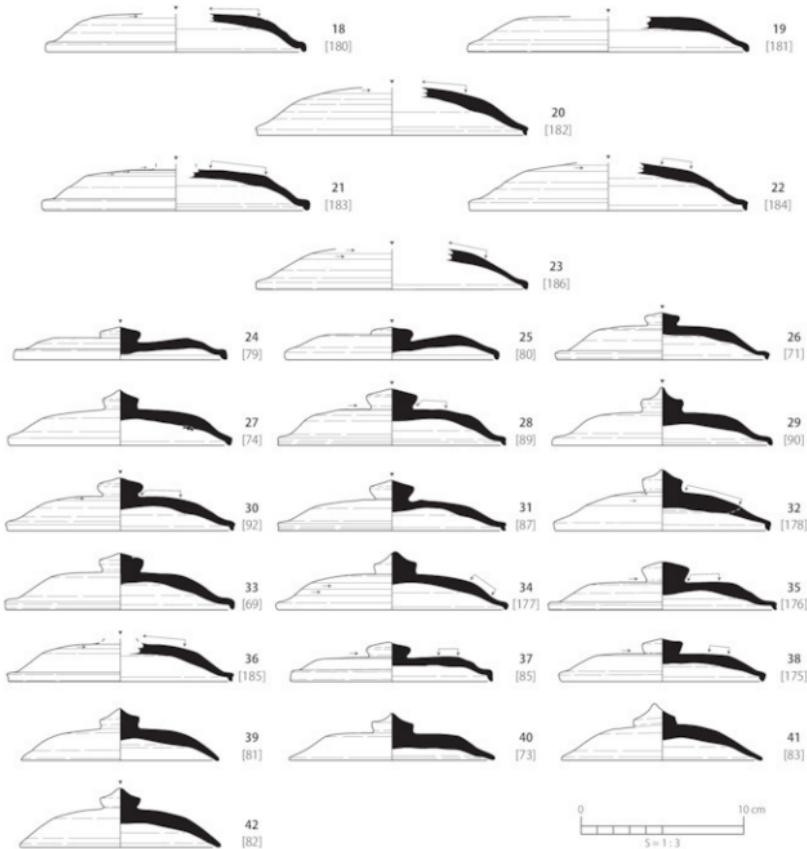
〈SK01出土 坯B蓋〉



〈灰原・窯埋土出土 坯B蓋〉



第8図 遺物実測図 1



〈舟底状ピット出土 环B身〉



43  
[31]

〈SK01出土 环B身〉



44  
[200]

〈灰原・窪埋土出土 环B身〉



45  
[190]



46  
[63]

第9図 遺物実測図2



第 10 図 遺物実測図 3



〈4-I号窯2次床出土 坯A〉



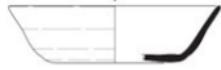
〈4-I号窯2次床+4-II号窯1次床下出土 坯A〉



〈4-II号窯1次床出土 坯A〉



〈4-II号窯1次床下出土 坯A〉



〈舟底状ピット出土 坯A〉

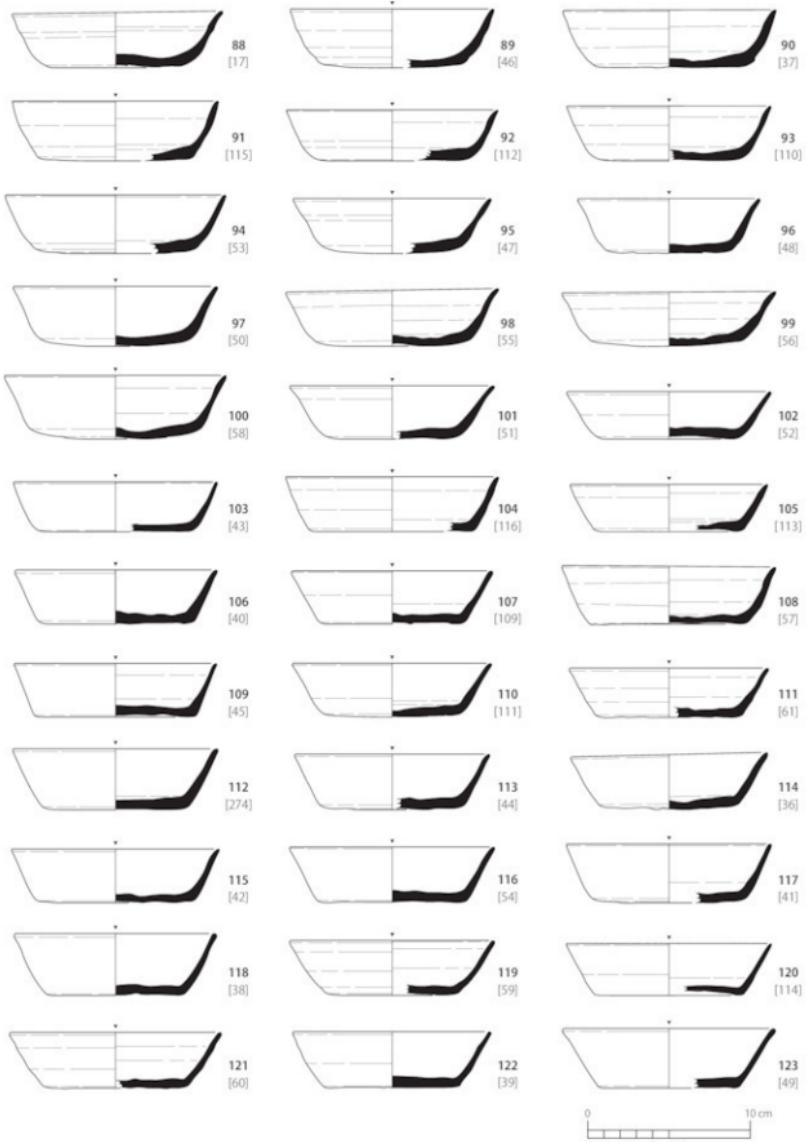


〈SK01出土 坯A〉



第11図 遺物実測図4

## 〈灰原・窯埋土出土 坯 A〉



第12図 遺物実測図5

〈4-I号窯 2次床下出土 盤A〉



〈4-I号窯 2次床+4-II号窯 1次床出土 盤A〉



〈4-II号窯 1次床(下)出土 盤A〉



〈舟底状ピット出土 盤A〉



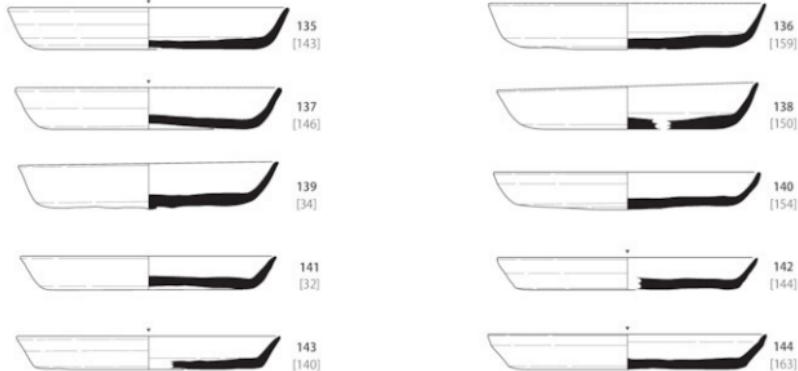
〈窯灰層出土 盤A〉



〈SK01出土 盤A〉



〈灰原・窯埋土出土 盤A〉

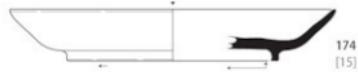


第13図 遺物実測図6



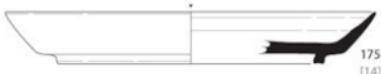
第14図 遺物実測図 7

〈4-I号窯2次床+4-II号窯1次床出土 盤B〉



174  
[15]

〈4-II号窯1次床出土 盤B〉



175  
[14]

〈4-II号窯2次床出土 盤B〉



176  
[13]

〈舟底状ピット出土 盤B〉



177  
[30]

〈SK01出土 盤B〉



178  
[201]

〈灰原・窯埋土出土 盤B〉



179  
[165]



180  
[66]



181  
[166]



182  
[171]



183  
[170]



184  
[168]



185  
[174]



186  
[173]



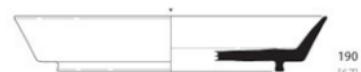
187  
[167]



188  
[164]



189  
[68]



190  
[67]



191  
[169]



192  
[172]



第15図 遺物実測図8

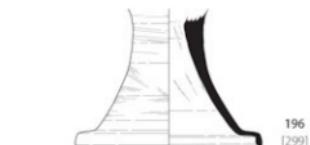
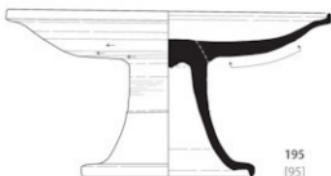
〈灰原出土 壺 B〉



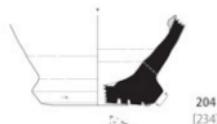
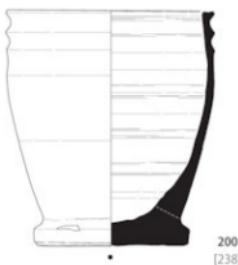
〈舟底状ピット出土 高盤〉



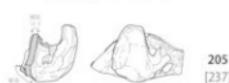
〈灰原出土 高盤〉



〈灰原出土 鉢 F〉



〈灰原出土 鉢 A〉

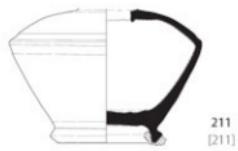
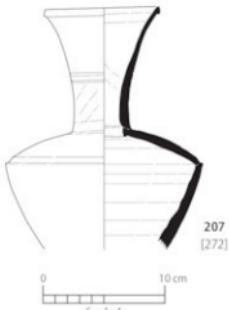
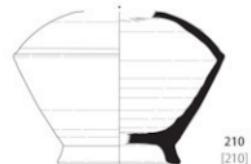
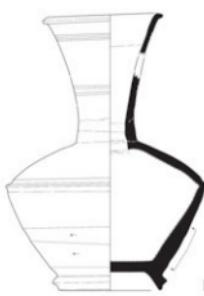


第16図 遺物実測図9

〈SK01 出土 瓶 A〉



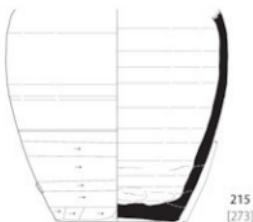
〈灰原・窯埋土出土 瓶 A〉



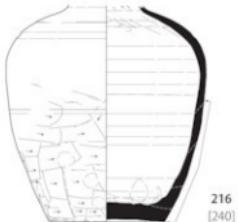
〈4-II号窯 2次床出土 瓶 D〉



〈SK01 出土 瓶 D〉



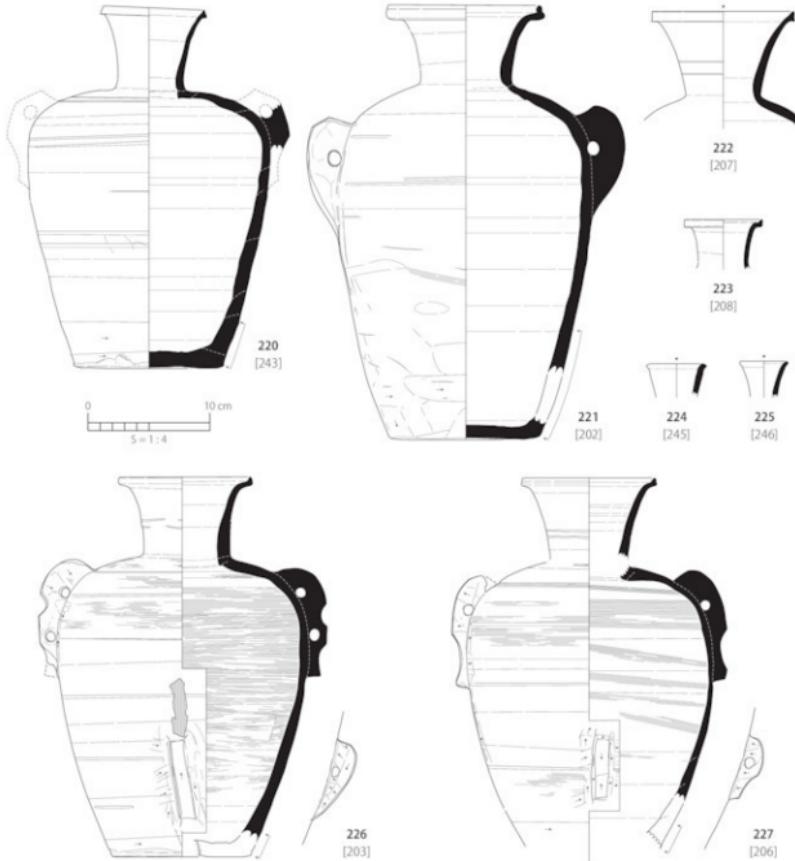
〈灰原+SK07 出土 瓶 D〉



〈灰原・窯埋土出土 瓶 D〉



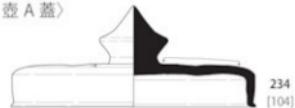
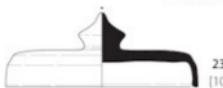
第 17 図 遺物実測図 10



〈SK01+ 灰原出土 壺 A 蓋〉



〈灰原出土 壺 A 蓋〉



229 [102]

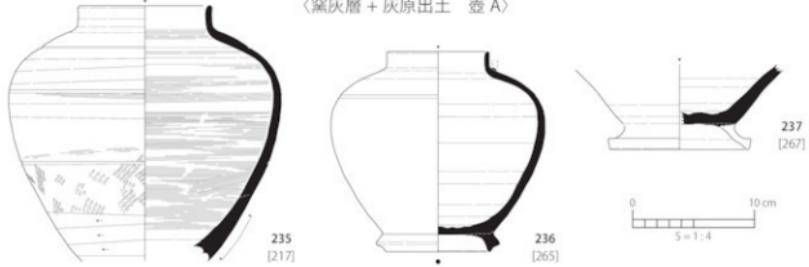


230 [101]

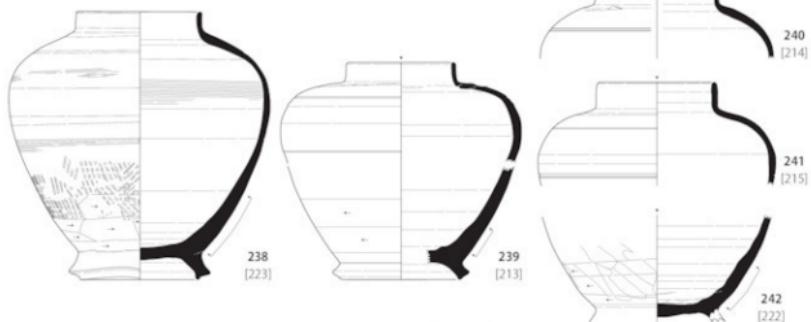


第 18 図 遺物実測図 11

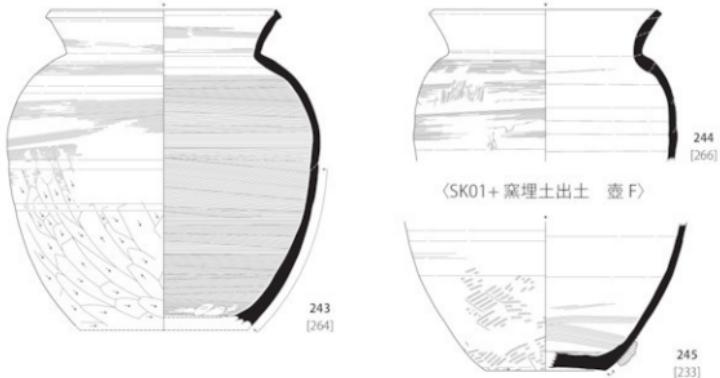
〈窯灰層 + 灰原出土 壺 A〉



〈灰原・窯埋土出土 壺 A〉



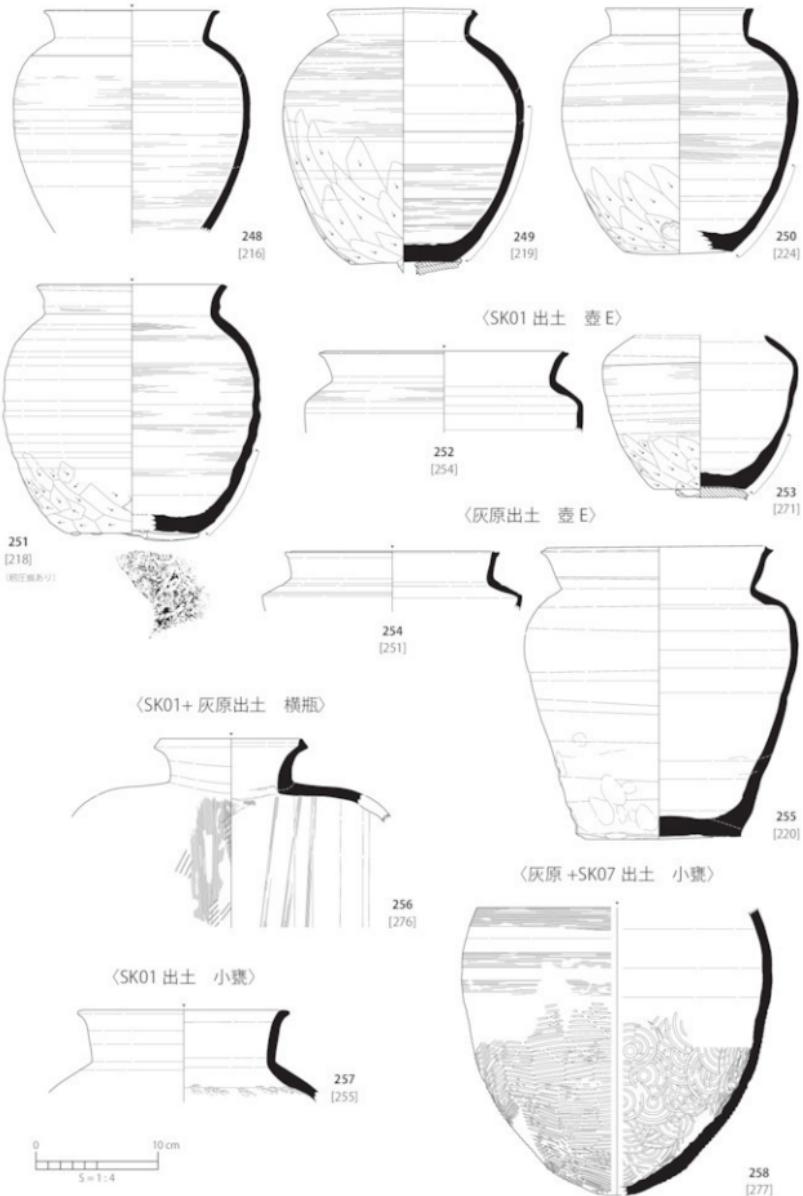
〈窯灰層 + 灰原出土 壺 F〉



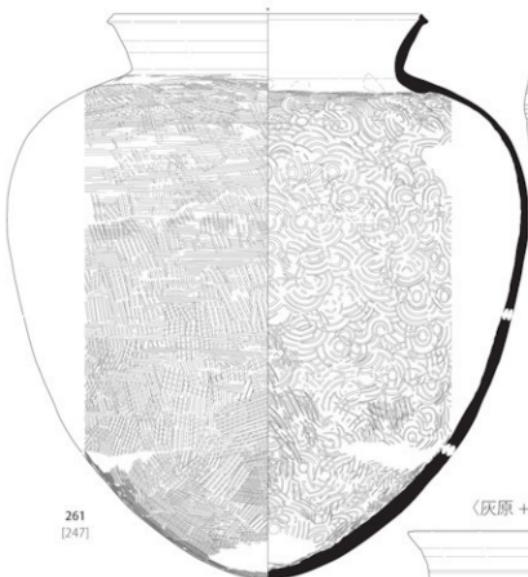
〈SK01+ 窯埋土出土 壺 F〉



第 19 図 遺物実測図 12

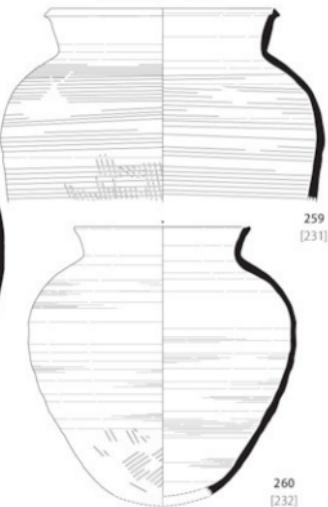


〈SK01+ 灰原 + 窯埋土出土 中壺〉



261  
[247]

〈灰原出土 小壺〉



259  
[231]

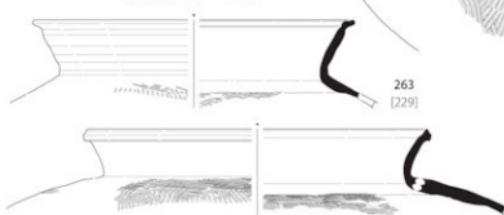
260  
[232]

〈灰原 + 窯埋土出土 中壺〉



262  
[248]

〈灰原出土 中壺〉

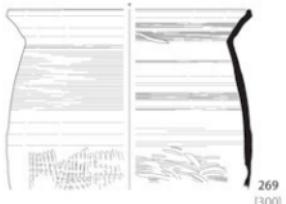
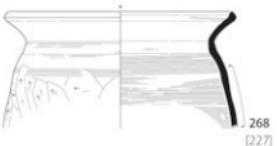
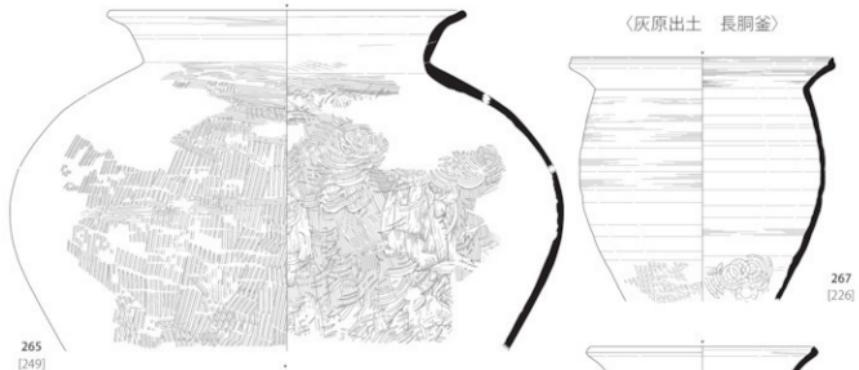


263  
[229]

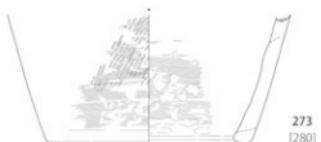
第 21 図 遺物実測図 14



〈灰原出土 長胴釜〉

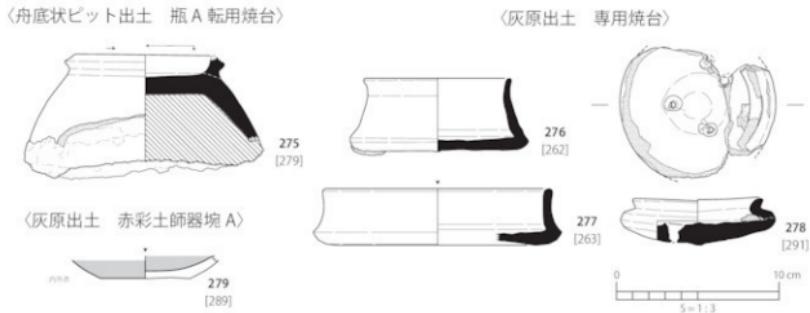


〈灰原出土 瓶〉

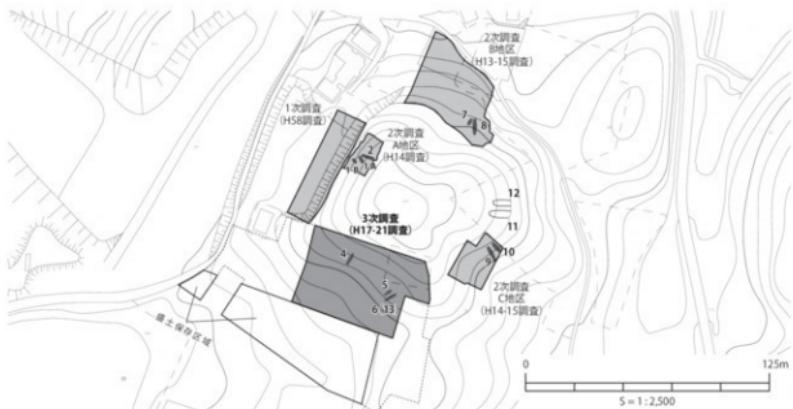


〈灰原出土 鍋〉

第 22 図 遺物実測図 15



第23図 遺物実測図 16



第24図 調査地位置図（上段・S=1:2500）と全体平面概略図（下段・S=1:600）

掲載 No.	実測 No.	器種名	区	地点	取上げ詳細	法量(cm)	性質	焼成	色調	胎土	充填	回転	特記(重ね焼き・焼痕等)	
1	97	突帯蓋	D	灰原	8 4Dgr22層	つ[4.7], 高[6.9], 幅[3.9]	製	堅織	内青灰、外輪 (灰粒)-7.5YR7/4	通常	右	天外回転X		
2	192	突帯蓋	A	窓埋土	4厚F 1.0-1.0層・B 1.2層・ 厚1.2区	[3][19.8], つ[3], 高[25.1], 幅[2.3]	製	堅織	外輪・灰白、灰 [3-7] 5Y4/2	砂多	1	-		
3	11	II-B 直大	B II 墓頂	4厚F 2.0層・B 4.1	[3][17], 高[2]	輪(2次被熱)	内青灰	通常	5	右	重B b類?	天外回転X		
4	12	II-B 直中	B II 墓頂	4厚F 3.1	[3][15.2], 高[1.6]	輪(2次被熱)	内青灰	砂多	2	右	天外回転X	かがみ大		
5	21	II-B 直小	A	窓灰削	4厚C 1.3層・5層	[3][12.2], 高[2]	製	竿手・長[1.7] (半平)	外灰	通常	14	-	重A類?	
6	22	II-B 直大	A-D	窓灰削・灰原	4厚D 1.3-5.5層・5 4Dgr16層 (35.2) + き4gr	[3][16.4], つ[2.7], 高[3.9], 幅[1.5]	製	良	内青灰白	通常	20	-	重B a類	
7	260	II-B 直大	A	SK01	SK1-19.6・63・91	[3][16.4], 高[2]	輪(2次被熱)	内青灰	砂多	11	-	一部酸化気味		
8	91	II-B 直大	A-D	灰原	か4Bgr7層・13層・7E 1.4層 + か4Gcr18層・5D区窓削	[3][15.2], つ[2.1], 高[4.4], 幅[1.7]	輪(2次被熱)	内青灰	砂多	7	-			
9	77	II-B 直大	A	灰原	8 4Bgr1層・6層	[3][15.4], つ[2.5], 高[3.8], 幅[1.4]	製	堅織	内青灰白	通常	22	右	重B a類, 天外回転X, 内火印記号「×」	
10	84	II-B 直大	A-D	灰原	か4Agr1層・5 か4Bgr24層	[3][16.5], つ[2.7], 高[3.3], 幅[1.1]	製	堅織	内青灰白	通常	9	右	重A類, 天外回転X, 内火印記号「×」	
11	72	II-B 直大	A-D	灰原	か4Agr22層・2 4Dgr21層・ 2 4Dgr37層・5 4gr 内	[3][17.2], つ[2.9], 高[4.5], 幅[1.6]	製	堅織	内青灰白	通常	5	右	重B a類, 天外回転X	
12	70	II-B 直大	D	灰原	か4Agr22層・3 4Gcr18層	[3][17.5], つ[2.7], 高[4.6], 幅[1.5]	製	良好	内灰白, 外灰	通常	32	右	重A類?, 天外回転X	
13	76	II-B 直大	A	灰原	5 4Bgr1層・14層・5 3Cgr1 層+1.5gr	[3][18.4], つ[2.9], 高[3.4], 幅[1.1]	製	良好	内青灰白	通常	3	-	重B b類	
14	75	II-B 直大	D	灰原	か4Gcr26層・5 4gr26層	[3][16.8], つ[2.7], 高[4.6], 幅[1.2]	製	堅織	内青灰白	通常	3	-	重B a類	
15	78	II-B 直大	D	灰原	8 4Gcr22層・5 4gr 内	[3][16.8], つ[2.7], 高[2.4], 幅[1.4]	製	堅織	内灰白, 外灰	通常	26	-	重A類	
16	88	II-B 直大	D	(灰原)	か4gr 灰原盛土・か4gr 内	[3][15.5], つ[2.4], 高[4.8], 幅[1.2]	製	良好	内灰白	通常	8	右	重B a類, 天外回転X	
17	179	II-B 直大	A-D	(窓埋土)	か4表土 1区・盛土 1区・ 4Agr1層+か4gr か4Gcr18層	[3][15.9], 高[3.3]	製	良好	内青灰	通常	11	右	重B a類?, 天外回転X	
18	180	II-B 直大	A	灰原(窓埋土)	か4表土 1区・か4gr	[3][15.8], 高[2.4]	製	良好	内灰白	通常	15	-	重B a類, 天外回転X	
19	181	II-B 直大	A	灰原(窓埋土)	か4表土 1区・か4Agr1層	[3][17.2], 高[2.2]	製	堅織	内灰白, 外灰	通常	8	右	重A類	
20	182	II-B 直大	A	(窓埋土)	か4表土 1区	[3][16.5], 高[2.0]	製	竿手・ (半生)	内灰白~灰白	通常	10	-	重B a類, 天外回転X	
21	183	II-B 直大	A-D	(窓埋土)	か4表土 1区・か4gr 18層 +か4gr18層	[3][16.4], 高[2.0]	製	良好	内青灰	通常	10	左	重B a類, 天外回転X	
22	184	II-B 直大	A-D	(窓埋土)	か4Dgr2層・理土 1区・ か4Bgr22層	[3][17], 高[2.0]	製	堅織	内灰白, 外灰	通常	20	-	重A類, 天外回転X	
23	186	II-B 直大	A-D	灰原, 窓埋土	か4Bgr2層・5D区表土・ 調D区表土(灰原)	[3][16.4], 高[2.0]	製	良好	外輪・外暗青灰	砂多	11	左	重B a類, 天外回転X	
24	79	II-B 直中	A-D	灰原	8 3Cgr16層・調D区窓削	[3][13.2], つ[2.5], 高[2.2], 幅[0.9]	製	堅織	内灰白, 外輪 [3-7 黒 7.5Y3/1]	砂少	23	-	重A類	
25	80	II-B 直中	D	灰原	か4Dgr19層・5 5Dgr 表土・ 21層	[3][13], つ[2.6], 高[2.2], 幅[0.9]	製	堅織	内青灰白	砂少	13	-	重A類	
26	71	II-B 直中	A-D	灰原	か4Agr1層+か4gr21層・ か4gr24層・調D区窓削	[3][13], つ[2.1], 高[2.7], 幅[0.8]	製	良	内青灰白	通常	5	-	重A類	
27	74	II-B 直中	D	灰原	か4gr25層	[3][13.6], つ[2.2], 高[3.4], 幅[1.2]	製	堅織	内青灰白	通常	33	-	重B a類	
28	89	II-B 直中	D	灰原	8 4Agr22層・5 4Dgr22層	[3][14], つ[3.2], 高[3.4], 幅[1.3]	製	良	内灰白, 外灰白	通常	11	-	天外回転X	
29	90	II-B 直中	A	灰原	か4Bgr7層・13層	[3][13.5], つ[2.0], 高[3.2], 幅[1.3]	輪(2次被熱)	内青灰白	通常	6	-			
30	92	II-B 直中	A	灰原	か3Dgr2層・6層	[3][13.9], つ[2.9], 高[3.2], 幅[1.4]	製	良好	内青灰白	通常	19	-	重A類?, 天外回転X	
31	87	II-B 直中	D	(灰原)	か4gr 灰原盛土	[3][14], つ[2.1], 高[3.1], 幅[1.2]	製	良好	内青灰白	砂多	13	-	重A類	
32	178	II-B 直中	A	窓埋土	か4Agr2層・H 1.0-1.0層・ H 1.3層・盛土 2 区	[3][13], つ[2.5], 高[3.8], 幅[1.2]	製	堅織	内青灰白	通常	14	右	重A類, 天外回転X	
33	69	II-B 直中	A-D	灰原	か4Agr1-3層・22層・5 4Dgr 7% 粗粒	[3][14], つ[2.7], 高[3.5], 幅[1.2]	製	良好	内灰白, 外灰	通常	31	-	重A類?	
34	177	II-B 直中	A	(窓埋土)	か4表土 1区・か4gr6層	[3][13.9], つ[2.6], 高[3.2], 幅[1.3]	輪(2次被熱)	内青灰白	通常	9	-	重B a類, 天外回転X		
35	176	II-B 直中	A	(窓埋土)	か4表土 1区	[3][13.9], つ[2.9], 高[3.3], 幅[1.2]	製	良好	内灰白, 外灰	通常	20	-	天外回転X	
36	185	II-B 直中	A-D	(窓埋土)	か4表土・か4gr18層	[3][13.6], 高[2.4]	製	良好	内青灰白	通常	17	-	重B a類?, 天外回転X	
37	85	II-B 直小	A-D	(灰原)	か5gr 粗粒・調A区盛土 1・ 1.2	[3][12.5], つ[2.7], 高[2.4], 幅[0.9]	製	良好	内灰白, 外灰	通常	34	右	重A類, 天外回転X, 内火印記号「×」	
38	175	II-B 直小	A	(窓埋土)	か4表土 1区・表土 1	[3][12.3], つ[2.5], 高[2.6], 幅[0.8]	製	良好	内青灰白, 外灰	砂多	11	-	重A類, 天外回転X	
39	81	II-B 直小	D	灰原	か4gr22層	[3][12.2], つ[2.4], 高[3.2], 幅[1.2]	製	良好	内青灰白	通常	30	-	重A類	
40	73	II-B 直小	A-D	灰原	か4Agr13層・か4gr18層+ か5gr 内	[3][12.6], つ[2.5], 高[2.9], 幅[1.2]	製	良好	内灰白, 外青灰	通常	20	-	重B a類	
41	83	II-B 直小	D	灰原	か4gr25層	[3][12.4], つ[2.6], 高[3.1], 幅[1.1]	輪(2次被熱)	内青灰白	通常	10	-			
42	82	II-B 直中	D	灰原	か4gr25層	[3][12.4], つ[2.4], 高[3.5], 幅[1.2]	製	良好	内青灰白	通常	10	-	重A類	
43	31	II-B 直中	A	舟底状?	舟底上層 24	[3][12.1], つ[16.7], 高[4.1], 幅[0.9]	輪(2次被熱)	内青灰白	通常	15	-	竹付着		
44	200	II-B 中	A	SK01	SK1-53	[3][13], 高[3.8]	製	良好	内青灰白	通常	6	-		
45	190	II-B 身大	D	(灰原)	か5gr 粗粒	[3][10], 高[2.7], 台高[1.1]	製	良好	内青灰白	通常	7	-	天外回転X	
46	63	II-B 身大	D	(灰原)	調D区窓削	[3][16.1], [12.8], 高[7.2], 幅[0.9]	製	堅織	内青灰白	通常	8	-	下付・底付着	
47	301	II-B 身大	A	灰原	か4Bgr6層・5 3Cgr1-14層	[3][16.6], 台[12.5], 高[8.9], 幅[0.8]	製	堅織	内青灰白, 外青灰	砂多	15	-	外1条沈縫	
48	121	II-B 身大	D	灰原	か4gr18-27層・59%	[3][15.6], 台[11], 高[6.9], 幅[0.6]	製	良好	内灰白, 外青灰	砂多	15	-	天外回転X	

規則 No.	実測 No.	器種名	区	地点	取土手筋細	法量 (cm)	性 格	簡成	色調	砂土	完 存	回 転	特記 (重ね焼き・焼痕等)	
49	62	环B身大	D	灰原	き 4Agr18層	[1]16.2, 台10, 高6.5, 台面0.4	質	良好	内灰白。外青灰	通常	25	右	底外回転「△」	
50	124	环B身大	D	(灰原)	か 4Cgr灰原内	[1][16], 台[10], 高6.4, 台面0.6	質	良好	内灰。外青灰	通常	7	-	底外回転「△」	
51	120	环B身大	D	灰原	か 4Cgr17層・21層・26層・ 18-27層	[1][15], 台[10], 高6. 台面0.5	質	良好	内灰。外青灰~ 白	通常	7	右?	底外回転「△」	
52	123	环B身大	D	灰原	き 4Dgr18層・21層・22層	[1][15, 台10.5, 高6.1, 台面0.6	質	良好	内外灰白	通常	29	-		
53	106	环B身大	A	灰原・常理上	4 87N [4 9層・か 4Agr3層	[1][16.5], 台[11.8], 高 0.2, 台面0.5	質	良	内灰白。外青灰	通常	4	-		
54	189	环B身大	D	灰原	か 4Dgr19層	[1][19, 台[10.2], 高6.5, 台面0.4	質	不良(生)	内外白	通常	4	右	底外A3記号「×」	
55	125	环B身大	D	灰原	き 4Dgr22-22層・か 5Bgr盛 土	[1][15.1], 台[10.2], 高 0.8, 台面0.9	質	良好	内外灰白	通常	17	右		
56	103	环B身大	D	灰原	か 4Cgr19層・か 4Dgr盛 土	[1][16.4], 台[11.2], 高 0.8, 台面0.4	質	堅緻	内灰白。外灰	通常	20	-		
57	122	环B身大	D	灰原	か 4Cgr20-21層・21層・か 4Dgr18-19層・21層・22-22層	[1][16.5], 台[10.4, 高6.3, 台面0.5	質	良好	内灰。外青灰	砂多	15	右?		
58	105	环B身大	A-D	灰原(= 常理上)	4 87E [1 1層・土1区・か 4Cgr18-21層]	[1][17], 台[11.2], 高 0.4, 台面0.5	質	良好	内外灰	通常	11	-		
59	187	环B身大	A	灰原	き 4Cgr16層・表土1・盛土1	[1][16.1], 台[10.5], 高6.1, 台面0.5	質	良好	内外灰	通常	5	-		
60	108	环B身大	A	地理土	4 87E 区・M区	[1][0.6, 黄55, 台高0.5	質	良	内外灰白	砂少	36	-	底外A3記号「△」	
61	64	环B身大	A	灰原	き 4Bgr6層・か 3Cg6層・き 3Dgr6層	[1][15.5, 台[10.5, 高6.1, 台面0.5	質	堅緻	内外青灰	砂多	26	右?	体外小片?	
62	117	环B身中	D	灰原	き 4Dgr21層・22-22層・24 層	[1][12.4, 台7.8, 高4.5, 台面0.5	質	良好	内灰。外青灰	通常	36	右		
63	188	环B身中	A	灰原	き 3Cg1層・6層・か 4Bgr6 層・表土1・盛土1	[1][12.7], 台[8.4], 高4.6, 台面0.5	質	やや良	内暗灰~灰。外 青灰~灰	通常	18	右		
64	118	环B身中	D	灰原	か 4Cgr21層・か 4Dgr22-22 層	[1][12.5, 台10, 高4.4, 台面0.4	質	良好	内灰。外暗灰	通常	15	右		
65	65	环B身中	D	灰原	き 5Agr1層・表土・か 4gr	[1][12.6, 台7.9, 高4.4, 台面0.4	質	良	内灰。外青灰	通常	28	右		
66	119	环B身中	A	灰原	か 4Agr1層・か 4Bgr14層・ か 3Cg6層・1-14層	[1][12.5], 台[8.2], 高4.5, 台面0.5	質	堅緻	内灰白。外暗灰	通常	13	右?		
67	126	环B身中	D	灰原	か 4Agr6層・13層・か 4Bgr6 層・か 4Dgr19層	[1][12.8, 台7.8, 高4.6, 台面0.5	質	堅緻	内灰。外青灰	通常	21	-		
68	127	环B身中	D	灰原	き 5Agr6層・表土・か 4gr	[1][12.5], 台[7.6], 高4. 台面0.4	質	やや良	内灰。外灰白	通常	5	-	外2差沈跡?	
69	128	环B身中	D	灰原	き 4Dgr19層・き 5Agr7層・7 層合	[1][12.1], 台[7.4], 高4.2, 台面0.4	質	堅緻	内灰白。外灰	砂少	8	右		
70	294	环B身中	D	灰原	き 4Bgr24層・き 4gr灰原内	[1][12.2], 台[7.5], 高4.5, 台面0.4	質	堅緻	内灰白。外灰	通常	2	右		
71	107	环B身小	A	(常理上)	4 87表土1区	[1][12.0], 台[8.4], 高4.9, 台面0.4	軸	(次被熱)	内外暗灰	通常	4	-		
72	129	环B身小	A-D	灰原(= 常理上)	4 87表土1区・か 4Cgr18層・ か 4Agr21層・22-22層	[1][11.1], 台[7], 高4.6, 台面0.6	軸	(次被熱)	内灰白。外青灰	通常	26	-		
73	292	环B身小	D	灰原	き 4Bgr23層	[1][10.5], 台[7.8], 高3.9, 台面0.5	質	良好	内灰。外青灰	通常	8	-		
74	293	环B身小	A	灰原	か 4Agr1層・か 4gr13層・ 表土1	[1][10.6], 台[7.3], 高3.8, 台面0.5	質	堅緻	内外灰白	通常	10	右?		
75	16	环A	A	1-2空床	4 771 次2-2床 1-8・10	[1][14], 表[10.2], 高3.4	質	堅緻	内外灰白	砂少	15	右	重畠類?	
76	18	环A	A	1-2空床+	1-2空床	[1][13.2], 軸4.0, 高3.9	質	不良(酸)	内弱水垢・外黄 (SYR5/6)	通常	8	右		
77	19	环A	A	1-2空床+	1-2空床	4 771 次2-2床 3-7・8-2 次2-2床次2床0区	[1][13.2], 轴[8.4], 高3.7	質	不良(酸)	内弱明水垢 (SYR5/6)	通常	4	右	
78	3	环A	A	1-2空床	4 771 次2-2床 3-5	[1][13], 表[9.2], 高3.0	質	良好	内灰	通常	8	右	重畠類	
79	5	环A	A	1-2空床	4 771 次2-2床 32	[1][12], 表[8.7], 高3.1	軸	(次被熱)	内外暗灰	通常	13	-	底外A3記号「△」	
80	4	环A	A	1-2空床	4 771 次2-2床 16	[1][12], 表[8.8], 高2.9	軸	(次被熱)	内外暗灰	通常	7	右?		
81	297	环A	A	1-2空床下	4 771 次2-2床1次床(床下1区)	軸 8.6, 高2.9	質	良好	内灰	通常	36	-	底外A3記号「△」	
82	1	环A	A	1-2空床	4 771	[1][13], 表[9.5], 高3.5	軸	(次被熱)	内灰。外弱灰	通常	7	-		
83	2	环A	A	1-2空床	4 771	[1][13.6, 表9.6, 高3.2]	軸	堅緻	内灰白。外灰	通常	31	右		
84	29	环A	A	舟底灰狀?	舟底上1層・舟底灰・G 14f-1 層	[1][12.4], 表8.8, 高3.0	軸	(2次被熱)	内灰。外弱青灰	通常	24	右		
85	25	环A	A	空床側	4 771 区3層	[1][12.1], 表[8.6], 高3.2	軸	不良(生)	内外灰白	通常	5	-		
86	26	环A	A	空床側	4 771 C区3層	[1][12.6], 表[8.2], 高2.7	軸	堅緻	内外灰	通常	8	-	重畠類	
87	199	环A	A	SK1	SK1 C区2層	[1][12.5], 表[8.1], 高3.3	軸	不良(生)	内9.5	通常	3	-		
88	17	环A	D	灰原	き 4Agr24層	[1][12.8], 表8.6, 高3.4	質	良好	内弱灰	通常	26	右	重畠類	
89	46	环A	D	灰原	き 4Agr22-22層	[1][12.5], 表8.6, 高3.6	質	不良(生)	内9.5	砂多	11	-		
90	37	环A	D	灰原	か 4Cgr18層	[1][13], 表9.8, 高3.5	質	良	内灰	通常	25	右	重畠類	
91	115	环A	A	(常理上)	4 87表土1区	[1][12.5], 表[9.6], 高3.7	軸	半不良且	内外灰	砂多	8	-	重畠類	
92	112	环A	A	(常理上)	4 87表土1区	[1][12.0], 表[9.3], 高3.2	軸	良好	内外灰	砂少	9	-	重畠類	
93	110	环A	A+D	灰原(= 常理上)	4 87表土1区・か 4Cgr 表土・ 盛土1・灰原内	[1][12.4], 表[8.6], 高3.4	質	良好	内外灰	通常	5	-	重畠類	
94	53	环A	A	舟底	き 4Agr1層	[1][13.5], 表[9.8], 高3.6	質	良	内灰白	通常	10	-		
95	47	环A	D	灰原	き 4Agr18層・22-22層	[1][12.2], 表[8.6], 高3.4	質	良好	内外灰	通常	19	右?		
96	48	环A	D	灰原	き 4Agr22-22層・24-24層・ 25層	[1][12.5], 表[7.8], 高3.4	軸	良好	内外灰	通常	12	右		
97	50	环A	D	灰原	き 4Agr22-22層・22-22層・ 24-24層	[1][12.5], 表[9.2], 高3.7	質	良好	内外灰	通常	8	右	重畠類	
98	55	环A	D	灰原	き 4Dgr18層	[1][13, 表9.4, 高3.4	質	半不良(生)	内外灰白	砂多	10	-	重畠類、底外A3記号「△」	
99	56	环A	D	灰原	き 4Dgr21層	[1][13, 表9.5, 高3.4	質	半不良(生)	内外灰白	砂多	14	-	重畠類、底外A3記号「△」	
100	58	环A	D	灰原	き 4Agr22層	[1][13.5, 表[10.4], 高3.9	質	不良(生)	内外白	通常	10	右	重畠類、底外A3記号「△」	
101	51	环A	D	灰原	き 4Agr22層・22-22層・25層	[1][12.5], 表[8.2], 高3.3	質	良好	内外灰	通常	9	-	重畠類	

掲載 No.	実測 No.	器種名	区	地点	取上げ詳細	法量(cm)	性質	焼成	色調	耐土	充存	回転	特記(重ね焼き・焼等)
102	52	环A	D	灰原	8 4gr22層	□112.5、底14.5、高2.3	製 良好	内青灰、外灰	通常	11	右?		
103	43	环A	D	灰原	8 4gr22-22層・22層	□112.5、底19.0、高3.1	製 良好	内青灰	通常	10	右	重ね焼	
104	116	环A	A	空甕土	4 箸2層	□113.0、底10.2、高3.4	製 良好	内青灰白	通常	9	-	重ね焼	
105	113	环A	D	灰原	8 4gr18層・表土	□112.0、底10.2、高2.9	製 烧成	内青灰白	通常	18	-	重ね焼	
106	40	环A	D	灰原	8 4gr22層・25層	□112.5、底19.0、高3.1	製 烧成	内青灰白	通常	7	-	重ね焼	
107	109	环A	D	灰原	8 4gr19層・22層	□112.4、底19.0、高3.1	製 不良(生)	内青白	通常	31	左?		
108	57	环A	D	灰原	8 4gr18層・22-22層	□113.0、底9.6、高3.6	製 (半生)	内青灰白	通常	24	-	重ね焼、城外A記号「」	
109	45	环A	D	灰原	8 4gr6層・か4gr	□112.5、底10.0、高3.1	製 烧成	内青灰	砂少	7	-	重ね焼	
110	111	环A	A (窓理土)	4 空甕土 1区	4 4gr表土	□112.0、底19.0、高3.1	製 良好	内青灰	通常	5	-		
111	61	环A	D	灰原	8 4gr21層・8 5kg g 13号	□112.0、底19.1、高3	製 半生(重 (半生))	内青灰、外灰	通常	13	-	城外A記号「」	
112	274	环A	D	灰原	8 4gr22層	□112.5、底14.5、高3.7	製 不良(生)	内青灰	通常	7	-	重ね焼、城外A記号「」	
113	44	环A	A・D	灰原	8 4gr17層・3層・8 4gr24層	□112.0、底19.8、高3.4	製 良好	内青灰	通常	12	-	重ね焼	
114	36	环A	D	灰原	8 4gr22層	□112.0、底8.6、高3.3	製 良好	内青灰	通常	32	-	重ね焼	
115	42	环A	D	灰原	8 4gr22-22層・25層	□112.0、底19.0、高3.3	製 烧成	内青灰白	通常	5	-	重ね焼	
116	54	环A	D	灰原	8 4gr18層・21層・22-22層	□112.5、底19.1、高3.4	製 (半生)	内青灰白	通常	19	-	重ね焼、城外A記号「X」	
117	41	环A	D	灰原	8 4gr6層	□112.5、底19.0、高3.6	製 良好	内青灰	砂少	10	-		
118	38	环A	D	灰原	8 4gr18層	□112.0、底8.3、高3.6	製 良好	内青灰白	砂少	27	-	重ね焼	
119	59	环A	A・D	灰原	8 30gr6層・8 4gr22-22層・ 24層・表土	□112.0、底14.0、高3.4	製 烧成	内青灰	通常	11	右?	重ね焼、城外A記号「X」	
120	114	环A	A	空甕土	4 箐E5K	□112.5、底14.0、高3.2	製 良好	内青灰	砂少	7	-	重ね焼	
121	60	环A	A・D	灰原	8 4gr11層・8 4gr22-22層・ 24層	□113.0、底19.8、高3.4	製 烧成	内青灰	通常	10	-	重ね焼、城外A記号「X」	
122	39	环A	D	灰原	8 4gr6層・8 4gr10層内	□112.0、底8.2、高3.6	製 不良(酸) 内青灰 SYR72	内青灰	通常	26	右	重ね焼	
123	49	环A	D	灰原	8 4gr18層・7 <sup>6</sup> 精査	□113.0、底19.8、高3.6	製 (半生)	内青白	砂少	10	-	重ね焼	
124	10	盤A	A	1 空甕床	4 空甕1次床内床下m区	□116.0、底13.0、高2.5	製 良好	内灰、外灰白	通常	18	-	重ね焼	
125	20	盤A	A	1 空甕床	4 空 1次床下D区	□116.0、底13.0、高2.3	製 烧成	内青灰	通常	5	-	重ね焼	
126	9	盤A	A	B 2 空甕床 - II	4 空 2 空甕床 21-4 号33	□116.5、底13.4、高2.3	製 烧成	内青灰	通常	13	右	重ね焼	
127	7	盤A	A	B 1 空甕床 - 床下	4 空 2 次床 39-2 次床床下N区	□117.0、底15.1、高4.4	製 良好	内青灰	砂多	9	右		
128	8	盤A	A	B 1 空甕床 - 床下	4 空 2 次床 35-2 次床床下N区	□116.0、底13.5、高2.6	製 不良(生)	内青白	通常	3	右		
129	6	盤A	A	B 1 空甕床	4 箐22	□115.0、底14.9、高2.3	製 (2次熟熱)	内青灰	通常	3	-		
130	28	盤A	A	角被覆式?+3	放上球64	□116.0、底16.0、高2.3	製 (2次熟熱)	内青灰、外青灰	通常	6	-		
131	24	盤A	A	空甕切	4 grD 6.5 5 個	□117.0、底13.2、高2.6	製 烧成	内青灰	通常	5	-	重ね焼	
132	23	盤A	A	空甕切	4 grD 6.5 5 個	□115.0、底12.0、高2.4	製 烧成	内灰、外青灰	通常	3	-	重ね焼	
133	297	盤A	A	SK01	SK01-104	□116.0、底13.0、高2.8	製 良好	内灰	砂少	36	右		
134	258	盤A	A	SK01	SK01-105	□117.0、底13.0、高2.6	製 良好	内青灰	通常	36	右	重ね焼	
135	143	盤A	D	灰原	8 4gr24層・8 4gr24層	□117.0、底14.0、高2.6	製 良好	内青灰	通常	10	右		
136	159	盤A	D	灰原	8 4gr24層・24層	□116.0、底15.0、高2.9	製 半生(重 (半生))	内青灰白	通常	6	-		
137	146	盤A	D	灰原	8 4gr26層	□116.0、底13.0、高2.6	製 良好	内青灰	通常	19	-		
138	150	盤A	D (灰原)	8 4gr	4gr 底内	□115.0、底13.1、高2.9	製 良好	内青灰	通常	23	右	重ね焼	
139	34	盤A	D	灰原	8 4gr11層・23層・24層・ 8 4gr 表土上土	□116.0、底13.0、高2.8	製 良好	内青灰	通常	15	-		
140	154	盤A	A	灰原	8 30gr2層・6層・8 4gr6	□116.2、底13.8、高2.3	製 良好	内青灰白	通常	24	-	重ね焼	
141	32	盤A	D	灰原	8 4gr21層	□115.8、底13.4、高2.1	製 烧成	内青灰白	通常	31	右	重ね焼	
142	144	盤A	D	灰原	8 4gr24層	□115.0、底13.7、高2	製 良好	内青灰白	通常	16	-	重ね焼	
143	140	盤A	D	灰原	8 4gr6層	□116.0、底13.0、高2.1	製 (2次熟熱)	内青灰	砂少	12	右		
144	163	盤A	A	(窓理土)	4 空甕土 1区	□116.0、底14.3、高2.2	製 半生(重 (半生))	内青灰白	通常	5	-	重ね焼	
145	139	盤A	D	灰原	8 4gr23層	□116.0、底13.4、高2.1	製 烧成	内青灰	通常	8	-	重ね焼	
146	33	盤A	D	灰原	8 4gr2層・18層・21層	□116.8、底14.0、高2.4	製 半生(重 (半生))	内青白	通常	14	右	重ね焼	
147	131	盤A	D	灰原	8 4gr22層・8 4gr21層・ 15層・15.0、底13.2、高2.3	製 半生良	内青灰白	通常	28	左?	重ね焼		
148	35	盤A	D	灰原	8 4gr22-24層・8 4gr24層 +調D 从灰原	□117.0、底15.1、高2.3	製 良好	内青灰、外灰	通常	7	右		
149	132	盤A	A	灰原	8 4gr6層	□116.0、底13.7、高2.3	製 半生良	内青灰白	通常	24	右	重ね焼	
150	138	盤A	D	灰原	8 4gr26層	□116.4、底13.6、高2.3	製 良好	内青灰	通常	16	-	重ね焼	
151	134	盤A	D	灰原	8 4gr18層	□116.0、底13.0、高2.5	製 良好	内灰、外青灰	通常	17	-	重ね焼	
152	137	盤A	D	灰原	8 4gr6層	□115.5、底12.2、高2.4	製 不良(生)	内青白	通常	12	-	重ね焼	
153	133	盤A	A	3Cgr1層・4gr14層・ 表土	8 4gr14層・8 4gr14層・ 表土	□116.0、底13.7、高2.6	製 良好	内青白、外灰	砂少	18	-	重ね焼	
154	148	盤A	D	灰原	8 4gr6層・8 4gr26層・ 24層・7 <sup>6</sup> 精査	□116.0、底13.6、高2.4	製 烧成	内青灰白	通常	10	-	重ね焼	
155	152	盤A	D (灰原)	8 4gr盛土	□116.8、底13.7、高2.6	製 不良(酸) (2/SYR72/2~ 6/2)	内青灰	通常	16	右	重ね焼		
156	156	盤A	D	灰原	8 4gr21層	□115.4、底13.2、高2.5	製 不良(生)	内青白	通常	26	-	重ね焼	
157	153	盤A	D	灰原	8 4gr22層	□116.1、底13.4、高2.7	製 良好	内青灰白	通常	27	右	重ね焼	
158	149	盤A	D (灰原)	8 4gr灰原内	□117.0、底14.4、高2.6	製 烧成	内青灰白	通常	29	右	重ね焼		
159	256	盤A	A	灰原	8 4gr6層	□116.5、底13.0、高2.2	製 不良(生)	内青白	通常	7	-	重ね焼	城外A記号「○」
160	157	盤A	A	灰原	8 4gr2-23層・6層	□115.9、底14.1、高2.5	製 不良(生)	内青白	通常	9	-	重ね焼	
161	160	盤A	A	灰原 (+ 窓理土)	8 4gr1-1層・8 4gr1-1層・ 6層・3D熟成層・8 4gr6層	□115.4、底13.2、高2.4	製 良好	内青灰	通常	18	-	重ね焼	
162	162	盤A	A・D	灰原 (+ 窓理土)	8 4gr1-1層・8 4gr1-1層・ 6層・3D熟成層・8 4gr6層・ 4gr5層・表土	□116.0、底13.0、高2.6	製 烧成	内青灰白	通常	25	-	重ね焼	
163	161	盤A	A・D	灰原 (+ 窓理土)	8 4gr表土 1区・か4gr灰原土・ 通土	□116.0、底12.6、高2.4	製 良好	内青灰白	通常	8	-	重ね焼	

地質 No.	実測 No.	層名	区	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性質	焼成	色調	土性	充存	回数	特記 (重ね焼き・横割等)
164	155	盤 A	A	灰原	含 4Bgr6 刷 + 含 4gr 磨土 + 表 1.4	[1] 15.8, 底 12.8, 高 3	製	良好	内灰白、外青灰	通常	26	重畠類	
165	141	盤 A	D	灰原	含 4Bgr23 刷 + 含 4Cgr22 刷 + 7% 粘合 + 含 4Cgr23 刷 + 含 4Bgr 15%	[1] 15.8, 底 13.5, 高 2.5	製	堅緻	内外暗青灰	通常	18	重畠類	
166	142	盤 A	D	灰原	含 4Bgr6 刷 + 24 刷	[1] 17.8, 底 15.5, 高 2.5	製	堅緻	内外灰白	通常	11	重畠類?	
167	147	盤 A	B	灰原	含 5Agr6 刷 + 7% 粘合 + 表 0.7	[1] 16, 底 14, 高 2.4	製	良好	内外灰白	通常	14	左? 重畠類?	
168	151	盤 A	D	灰原	含 4Cgr21 刷 + 18.2 刷	[1] 16.2, 底 13.9, 高 2.4	製	良好	内灰、外灰白	砂多	20	右? 垂直類	
169	135	盤 A	D	灰原	含 4Bgr6 刷 + 22.2 刷	[1] 17, 底 14.6, 高 2.5	製	良	内外灰白	通常	13	重畠類	
170	158	盤 A	A	灰原	含 4Dgr19 刷 + 含 3Dgr6 刷	[1] 16, 底 13.6, 高 2.3	製	中空不良 (半緻)	内外灰白~明灰灰	砂少	17	重畠類	
171	145	盤 A	D	灰原	含 4Agr26 刷	[1] 16.5, 底 13.8, 高 2.5	製	良好	内外灰	通常	16	重畠類	
172	136	盤 A	D	灰原	含 4Dgr21 刷	[1] 16.2, 底 13.6, 高 2.5	製	不良 (生)	内外灰	通常	15	重畠類	
173	130	盤 A	D	灰原	含 4Bgr18 刷	[1] 16.8, 底 14.3, 高 2.5	製	中空不良 (半緻)	内外灰白	通常	14	右?	
174	15	盤 B	A	B I 窒床 + 1 2 窒床	4 焼 2 次床 4B-1 次床 2 次床 3	[1] 20.2, 台 [12.2], 高 3.2, 台高 0.7	(2 次被熱)	内暗青灰、外暗灰	通常	7	右? 残外回転ケツリ		
175	14	盤 B	A	B II 窒床	4 焼 2 次床 12	[1] 23, 台 [15.2], 高 3.1, 台高 0.6	(2 次被熱)	内青灰、外暗青灰	砂多	6			
176	13	盤 B	A	B II 窒床	4 焼 40	[1] 19.1, 台 [14.2], 高 3.4, 台高 0.6	(2 次被熱)	内青灰、外暗青灰	砂多	13	右? 残外回転ケツリ (1月)		
177	30	盤 B	A	角底灰 C+?	舟底上刷 + 角底下刷 + F 刷 + 舟底上刷 + 角底下刷 + H 刷	[1] 20.4, 台 [14.6, 高 3.6, 台高 0.6	(2 次被熱)	内外灰	通常	20	右? 重畠類?、残外回転ケツリ		
178	201	盤 B	A	SK01	SK1-64 C 区	[1] 19.5, 台 [15.5], 高 3.0, 台高 0.6	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	2		
179	165	盤 B	A+D	灰原 (- 積理土)	4 烧 1.1% + 含 4Cgr18-21 刷 + 21 刷 + 含 5Agr6 刷	[1] 21, 台 15.7, 高 3.8, 台高 0.7	製	良好	内外灰	通常	16	右	
180	66	盤 B	A+D	灰原	含 3Dgr2 刷 + 含 4Cgr21 刷 + 含 4Bgr22 刷 + 调 D 地区表土	[1] 20, 台 [14], 高 3.6, 台高 0.6	製	堅緻	内外灰白	通常	10	重畠類、残外回転ケツリ	
181	166	盤 B	A+D	灰原 (- 積理土)	4 烧 1.1% + 含 4gr 磨土 + 含 3gr 刷 + 调 D 地区表土	[1] 20, 台 [15.4], 高 3.5, 台高 0.6	製	中空不良 (半緻)	内外灰 (底内灰 明赤灰)	通常	19	右? 重畠類、残外回転ケツリ	
182	171	盤 B	D	灰原	含 4Agr1 刷 + 24 刷 + 25 刷 + 含 4Dgr18 刷 + 22.2 刷	[1] 19.8, 台 14.6, 高 3.8, 台高 0.4	製	良	内灰白、外灰	通常	24	右? 残外回転ケツリ (1月)	
183	170	盤 B	D	灰原	含 4Bgr25 刷	[1] 19.5, 台 [15], 高 3.5, 台高 0.7	製	良	内外灰白	通常	10	重畠類	
184	168	盤 B	D	灰原	含 4Bgr23 刷 + 含 4Dgr21 刷	[1] 20, 台 [14.8], 高 3.5, 台高 0.6	製	堅緻	内外暗青灰	通常	14	右? 重畠類、残外回転ケツリ	
185	174	盤 B	D	灰原	含 4Bgr1 刷 + 23 刷 + 28 刷	[1] 19.8, 台 [14.6], 高 3.6, 台高 0.6	製	良好	内灰白、外青灰	砂多	5	右? 重畠類、残外回転ケツリ	
186	173	盤 B	D	灰原	含 4Dgr18 刷	[1] 21.2, 台 [16], 高 3.6, 台高 0.5	製	堅緻	内外灰白	通常	11	重畠類、残外回転ケツリ (1月)	
187	167	盤 B	A	灰原	含 4Agr13 刷	[1] 21.8, 台 [16], 高 3.6, 台高 0.5	製	良好	内外灰白	通常	16	重畠類	
188	164	盤 B	A	空理土	4 烧 E 区 + H 区 10 刷 + H 区 10 刷 + 调 D 地区表土	[1] 22.4, 台 [15], 高 3.8, 台高 0.6	製	良好	内外明青灰	通常	9	左? 重畠類、残外回転ケツリ	
189	68	盤 B	A	灰原	含 4Bgr6 刷 + 调 A 地区表土 1	[1] 21.4, 台 [13.2], 高 3.2, 台高 0.7	製	堅緻	内灰白、外暗灰	通常	14	右? 残外回転ケツリ	
190	67	盤 B	D	灰原	含 4Cgr23 刷 + 调 D 地区表土 内	[1] 19.2, 台 [13], 高 3.4, 台高 0.6	製	(2 次被熱)	内暗灰、外青灰	通常	11	右? 残外回転ケツリ	
191	169	盤 B	D	灰原	含 4Bgr22 刷 + 22.2 刷 + 25 刷 + 含 4Cgr21 刷	[1] 19.8, 台 14.7, 高 4.3, 台高 0.7	製	堅緻	内外灰白	通常	10	重畠類、残外回転ケツリ	
192	172	盤 B	A	灰原	含 3Cgr1-6-16 刷 + 1-14 刷 + 2 4Bgr14 刷	[1] 21, 台 16.4, 高 4, 台高 0.4	製	中空不良 (半生)	白、白灰~灰	通常	25	右?	
193	283	盤 B	D	(灰原)	调 D 地区表土 内	[1] 14.5, 台 [17.3], 高 6.5, 台高 0.7	製	堅緻	内灰白~灰、外灰	通常	4	右? 重畠類、残外回転ケツリ	
194	27	高盤	A	角底灰 C+?	舟底上刷 2	[1] 19.8, 高 2.0	製	良好	内外明青灰	砂多	13	右? 残外回転ケツリ	
195	95	高盤	A+D	灰原	含 4Agr6 刷 + 22 刷 + 25 刷 + 含 4Bgr2-22 刷 + 含 5Cgr40 刷 + 调 A 地区表土 1	[1] 19.8, 刷 10.2, 高 7.3	製	良	内外明青灰~灰	砂多	11	右? 残外回転ケツリ、脚外斜	
196	299	高盤	D	(灰原)	含 5Agr 10% 刷	[1] 14, 高 8.4	製	堅緻	内外灰白	砂多	6	外斜	
197	93	高盤	D	灰原	含 4Bgr23 刷 + 含 4Cgr23 刷 + 调 D 地区表土 内	[1] 20.1, 高 2.7	製	良好	内灰、外明青灰	通常	23	右? 残外回転ケツリ	
198	94	高盤	D	灰原	含 4Dgr6 刷 + 调 D 地区表土 内	[1] 20, 高 2.6	製	良好	内灰、外明青灰	砂多	16	右? 残外回転ケツリ	
199	96	高盤	D	灰原	含 4Cgr23 刷 + 含 4Bgr22 刷	[1] 20, 高 3.1	製	良好	内外灰	砂多	9	右? 残外回転ケツリ	
200	238	跡 F	D	灰原	含 5Agr6 刷 + 7% 粘合 + 1% SF + 5gr 灰原	[1] 16.7, 台 12.4, 高 19.3	製	良	内外明青灰	砂多	8	右? 手鋏切り、内斜材、ガラス片、瓦片、容量 2.4L	
201	239	跡 F	A+D	灰原	含 3Cgr1-14 刷 + 1-14 刷 + 表 1-14 刷 + 调 D 地区表土 1	[1] 17.2, 高 16.9	製	良好	内外明青灰	砂多	8	内外斜材、ゆがみ大	
202	235	跡 F	D	灰原	含 4Dgr22 刷 + 含 5Cgr 5% SF + 调 D 地区表土 1	[1] 11.8, 高 3.0	製	中空良	内灰~灰白	通常	19	右? 手鋏切り、底外斜材 + 1-14 刷 + 表 1-14 刷	
203	236	跡 F	D	灰原	含 4Cgr18 刷 + 含 4Dgr19 刷 + 调 D 地区表土 1	[1] 11.4, 高 1.4	製	中空良	内灰~灰白	通常	25	右? 手鋏切り、底外斜材	
204	234	跡 F	A+D	灰原	含 4Dgr6 刷 + 磨土 1	[1] 19, 高 3, 高 7.4	製	良好	内外明青灰~灰白	通常	22	右? 手鋏切り、底外斜材、磨土内、ガラス片、瓦片、骨片、瓦片	
205	237	跡 A (肥沃)	A	灰原	含 4Agr13 刷	[1] 19.3, 高 7.4	製	(2 次被熱)	内暗灰、外青灰	通常	-	礫面 1.3 (未用鉛筆), 1.1 条	
206	253	盤 A	A	SK01	SK1-103, C 区 C 3 刷	[1] 9.5, 高 4.8, 高 10.3)	製	良	内外灰白	砂多	25	右? 4.8-10.3, 頭側削除、頭側削除	
207	272	盤 A	A	SK01	SK1-36 + 48 - 83 + 84 + 87 + 89 + 92, C 区 1 刷	[1] 9.3, 高 5, 高 16.2, 高 19.0, 高 10.5	製	良好	内暗灰、外青灰	砂多	16	右? 5.2-16.2, 頭側削除、頭側削除	
208	242	盤 A	A	空理土	4 烧 Q 区 28 刷, S 区 28 刷 + 8 T/T 3	[1] 9, 台 8, 高 5.1, 高 16.4, 高 22.8, 台高 1.2, 高 10.5	製	良好	内灰白、外青灰	砂多	22	右? 4.8-22.8, 頭側削除、頭側削除	
209	241	盤 A	A+D	灰原 (- 積理土)	4 烧 土 1 K + 含 4Agr1 刷	[1] 10, 高 11.7, 高 12.4, 高 1.5	製	良好	内外灰白	砂多	36	左? 1.1 級光深、頭側削除	
210	210	盤 A	A+D	灰原	含 4Agr1-3 刷 + 6 刷 + 调 D 区 调 A 地区表土 1	[1] 10, 高 11.7, 高 12.4, 高 1.5	製	良好	内外灰白	砂多	13	左? 1.1 級光深、頭側削除	

編號 No.	実測 No.	器種名	区	地点	取上げ詳細	法量(cm)	性質	焼成	色調	胎土	灰輪	特記(重ね焼等)
211	211	瓶 A	A	灰原	さ 4Agp6 刷	台8. 頂5. 腹15.8. 高11. 台面1.2	製	良好	内灰白-7. 外明青-8. 灰白	砂多	台 右 3.3	側面1. 條沈綴. 頸接合A3 刷5. 創5. 台面行着
212	296	瓶 A	D	灰原	さ 4Dgr18 刷	頂4.9. 腹16.4. 高(4.2)	製	良好	内灰白. 外灰	通常	-	- 頸接合A2 刷
213	212	瓶 A	A・D	灰原	さ 4Agp1 刷+6 刷+か 4Cgr5 刷	台8.4. 高(6.2). 台高1.1	製	良好	内灰白	砂多	台 左 3.6	側面下回転7.5°
214	278	瓶 D	A・D	II 2 黒床(=灰原)	4 Agp11. 肩土1. 表土1. 壱4Bgr1 刷	底9.7. 腹[15.2]. 高(10.1)	製	堅織	内灰白. 外明青	通常	灰 灰	側面3~3 条沈綴. 腹内 4.5 黑斑. 刷行着
215	273	瓶 D	A	SK01(窓埋土上)	SK1.5+22.4 黒土1. 表土1	底10.2. 腹18.2. 高(17.4)	製	堅織	内灰白-7. 外明青	砂多	台 右 1.5	側面下回転7.5. 刷9.1 灰斑
216	240	瓶 D	A・D	灰原. SK07(窓 埋土上)	4 Agp22-22 刷+1 刷+14 刷+ さ 5Agp6 刷+SK07D(13 創)	底9.5. 腹[6.3]. 高(17.7)	製	良好	内灰白. 外明青	砂多	底 右 3.6	側面2 条沈綴. 刷5.3 条 刷行着. 頸接合A3 刷. 腹 行着付行. 容量2.37L
217	209	瓶 D	D	灰原	さ 4Dgr24 刷	口9.4. 底9.5. 頂5.8. 腹18.2. 高23.3. 高7.7	製	良好	内灰白-7. 外明 青-灰白	砂多	底 左 3.6	側面下回転7.5. 腹外 4~5 条沈綴. 刷5.2 行 付行. 容量2.2L
218	204	瓶 D	A・D	灰原	さ 3Cgr1 刷+1-14 刷+ 4Bgr16 刷+6 刷+14 刷. さ 4Dgr18 刷	口8.0. 頂5.6. 腹 16.1. 高[24.2]. 頂高5.8	製	良好	内灰白. 外明青	砂多	1.1	側面下回転7.5. 腹外 4 条沈綴. 刷行着付行(环 付行)付行. 容量2.2L
219	205	瓶 D	D	灰原	さ 4Agp18 刷+21 刷+1 4Agp22-24 刷+さ 4Dgr21 刷	腹17.2. 高(19.5)	製	良好	内灰白. 外明青	通常	刷 底 3.6	側面下回転7.5. 腹外 4~5 条沈綴. 刷5.2 行
220	243	瓶 D	A	窓埋土	4 Agp15-23 黒土10.9 刷+ 5Agp6-8-12X 刷+8.7~9.7 刷+3	口18.2. 底12.3. 頂5.9. 腹19.9. 高29.7. 高6.6	製	良好	内灰白. 外青灰	砂多	右 右 3.2	側面下回転7.5. 腹外 4~5 条沈綴. 刷5.3 行 付行. 容量3.84L
221	202	瓶 D	A・D	灰原	さ 3Cgr6 刷+さ 3Dgr5 刷+さ 4Agp6 刷+18 刷+24 刷+さ 4Bgr23 刷. さ 4Agp1 刷+6 刷+ か 4Cgr18 刷+18.27 刷+21 刷+ さ 4Dgr18 刷+5.8 18 刷	口13.2. 底12.4. 頂7.8. 腹21. 高35.4. 高6.5	製	良好	内灰白-7. 外明 青-灰白	通常	右 右 3.6	側面下回転7.5. 腹外3~4 条沈綴. 刷行着付行. 頸接合A3 刷. 容量5.55L
222	207	瓶 D	A・D	灰原	さ 4Agp22 刷+25 刷+さ 4Bgr1 刷	口11.6. 頂6.2. 高 刷6.9	製	堅織	内灰白-7. 外灰	砂多	6	側面2 条沈綴. 頸接合B 刷. 灰9.1行着
223	208	小型瓶	D	灰原	さ 4Dgr6 刷. さ 5Agp6 刷	口16.3. 頂4.2. 高(4.2)	製	堅織	内灰白-7. 外青	砂多	5	-
224	245	小型瓶	D	灰原	さ 4Agp21 刷	口13. 高2.4	製	良好	内灰白. 外青灰	通常	6	-
225	246	小型瓶	D (窓埋)	さ 4Agp6 灰原表土+ 盛土	口14. 高2.8	製	良好	内灰白. 外青灰	通常	9	-	
226	203	瓶 D (三耳)	A・D	灰原	さ 4Agp24 刷+さ 3Agp1 刷+ さ 4Dgr18 刷+21 刷+22-22 刷+か 4Cgr21 刷	口10.6. 底11.3. 頂7.2. 刷20.5. 高31.3. 高6.6	製	堅織	内灰白. 外青灰	通常	30	側面下回転7.5. 腹外 2 条沈綴. 刷5~6 条沈 綴. 特外4.1. 頸接合A2 刷. 容量4.82L
227	206	瓶 D (三耳)	A・D	灰原	さ 3Cgr1 刷+さ 4Agp14 刷+ さ 3Dgr18 刷+さ 4Dgr19 刷+ 21 刷+22-22 刷+か 4Cgr19 刷+ 18.19 刷+18.27 刷+21 刷+ さ 4Dgr19 刷	口10.7. 頂30.4. 高5.8. 刷20.1. 高(30.2). 高6.8	製	堅織	内灰白. 外灰	通常	21	側面下回転7.5. 腹外 2 条沈綴. 刷5~6 条沈 綴. 特外4.1. 頸接合A2 刷?
228	193	壺	A・D	SK01-1. 灰原	SK1.94+さ 4Dgr6 刷	口11.0. 頂2.0. 高5.1. 刷2.0	軸(2次被熱)	内灰白. 外灰	通常	5	内9.0記号「1」. 外9.0記号 「×」. 灰9.0行着	
229	102	壺	D	灰原	さ 4Dgr18 刷+さ 4Dgr18 内 刷	口11.2. [2]. [4.1]. 高(5.2). 刷(2.4)	製	堅織	内灰白. 外 灰(1.9~7.5) 刷(4.2)	砂多	5	-
230	101	壺	A・D	灰原	さ 4Cgr18 刷+18-27 刷+か 5Agp28 刷	口11.0. 頂2.1. 高5.1. 刷(2.3)	製	堅織	内灰白	通常	9	- 外大回転7.5°
231	100	壺	A・D	灰原	さ 4Agp25 刷+さ 4Bgr1 刷+1 刷9.7	口11.5. [2]. [3.8]. 高(5.4). 刷(2.3)	製	堅織	内灰白	砂多	9	-
232	99	壺	A・D	灰原	さ 4Agp13-3 刷+5 刷+か 4Agp6 刷+か 4Cgr18 刷+21 刷	口11.5. ~2.9. 高6. 刷2.9	製	堅織	内灰白	砂多	20	- 外大回転7.5°
233	98	壺	A・D	灰原	さ 4Agp1 刷+18 刷+25 刷+ さ 4Bgr13 刷	口11.5.2. ~2.7. 高5.9. 刷2.3	製	堅織	内灰白	砂多	25	-
234	104	壺	D	灰原	さ 4Dgr22-22 刷+19 刷+さ 4Agp1 刷+5 Agp6 上H.2	口12.0. [2]. 5.6. 高8.3. 刷4.8	軸(2次被熱)	内灰白	砂多	12	外大回転7.5°. 内9.0 Da 刷. 外8.0行着付行	
235	217	壺 A	A・D	窓埋削+灰原	4Cgr18 刷+21 刷+18-27 刷+ 21 刷+22-22 刷+か 4Dgr21 刷+ 18.19 刷+18-27 刷+21 刷+ さ 4Bgr19 刷	口10.8. 頂2.1. 高5.1. 刷22.4. 高(20.8). 高7.7	製	堅織	内灰白	通常	36	側面下回転7.5. 腹外 2 条沈綴. 特外5~6 条沈 綴. 内外好1. 刷行着
236	265	壺 A	A・D	窓埋削+灰原	4 Agp7 D 5 刷+さ 4Dgr18 刷+ 6 刷+5 Agp6 灰土+調 D IV 表土 +灰土 A IV 表土	口18.3. 頂18.4. 高8.6. 刷17.6. 高16.4. 台高 1.5. 高1.3	製	良好	内灰白. 外青灰	砂多	9	回転糸切1. 腹外1 条 刷. 膜糊着. 容量1.94L
237	267	壺 A	A	窓埋削+灰原	4 Agp C 3 刷+さ 4Agp2-3 刷+ 刷土 1	台11.2. 高7.7	製	堅織 (一層化)	内灰白 (2.5Mx3.2~ 1.3/1.)	砂多	台 7	城外9.0記号「×」
238	223	壺 A	D	灰原	か 4Cgr21 刷+21 刷+さ 4Agp18 刷+21-21 刷+22-22 刷+7.8 精査	口11.2. 台8.2. 高 1.1. 台21.6. 高21.8. 台灰2.4. 高1.7	製	堅織	内灰白	通常	36	側面1. 案沈綴. 腹外1.8 刷. 刷1.2~1.3. 腹内 1.5. 灰1.5. 台面2.86L
239	213	壺 A	D	灰原	さ 5Cgr28 刷+灰土+さ 4Dgr6 刷	口18.3. 台19.4. 高18.6. 刷18.7. 高16.7. 高6.8	製	良好	内灰白. 外明青	砂多	10	側面下回転7.5. 腹外 2 条沈綴. 膜糊着. 容量 1.219L
240	214	壺 A	D	灰原	か 4Cgr23 刷+か 4Dgr6 H.7. +5 Agp22 刷+調 D IV 表土及 灰土 1	口19.3. 頂19.8. 高 1.7	製	堅織	内灰白	通常	22	側面下回転7.5. 腹外 2 条沈綴. 膜糊着 (H.10と刷1.2~1.3). 台 面1.7~1.8. 台面行着
241	215	壺 A	A・D	灰原	さ 3Dgr6 刷+さ 8 Agp1-3 刷+ さ 4Agp18-27 刷+24 刷	口18.8. 頂19.6. 高 18.5. 高19.1. 高21.1	製	堅織	内灰白. 外青灰	通常	10	側面3 条沈綴. 膜糊
242	222	壺 A	A	窓埋土	4 Agp7 X 9-10 刷	高(8.9)	製	堅織	内灰白. 外青灰	砂多	右 右	側面下回転7.5. 腹外 3 条沈綴. 膜糊記号「×」
243	264	壺 F	A・D	窓埋削+灰原	4 Agp14 刷+灰土表土+盛土 1.1~1.2	口11.6. 腹1.5. 高26.2. 刷3.6	製	良好	内灰白-7. 外明 青~灰白	砂多	9	- 内好1~4~5 条 刷. 膜糊着. 容量8.34L
244	266	壺 F	A・D	窓埋削+灰原	4 Agp15.5 刷+か 4Agp18-27 刷+7.8 刷	口16.2. 頂15.9. 高 12.7. 高12.5. 高3.5	製	堅織	内灰白-7. 外明 青~灰白	通常	18	- 側面外1~部付
245	233	壺 F	A・D	SK01-3-5 黒 EK+H.4 北 灰原	底9.8. 高12.2	製	良好	内灰白	砂多	左 右 1.5	側面下回転7.5. 腹内 灰. 台面1.7~1.8. 台面行 着	
246	221	壺 F	A	窓埋土	さ 4M 区	口11.2.3. 頂12.2. 高 8.9. 高2.2	製	良好	内灰白-7. 外灰	砂多	10	- 国外1. 案沈綴. 腹外

規範 No.	実測 No.	器種名	区	地点	取上げ詳細	法線 (cm)	性格	熟成	色調	歯土	完 存	回 転	特記 (重ね焼き・焼等)
247	250	齒 F	D	灰原	き 4Rgr24層	口[9], 頭[2], 高(3.6), 頭高1.8	製	堅緻	内外面灰灰	砂多	12	-	側外 1 条沈綴
248	216	齒 F	A	灰原	き 4Agr-2-3層・6層・7-8層 + き 4Rgr14層	口[14.4], 頭[12.7], 脚 [19.4], 高(18.2), 頭高2.3	製	良好	内外面灰灰	砂多	15	-	90%上 条沈綴?, 腹内 外付
249	219	齒 F	A	荒埋土	4.871区 13-16層	口[11.4, 縮1.8, 頭 10.8, 脚19.7, 高20.8], 頭高2.1	製	良	内暗灰、外青灰	謹極 多	36	-	内外付外人、脚外下付?, 腹 内下3~4条沈綴, 腹外 軸用横台(环)付着, 容 量340L
250	224	齒 F	D	灰原	か 4Gr22層・23層・き 4Rgr19層・21-22層・23層・ き 4Gr22層・5層 40gr19層	口[12.2, 或8.8, 頭 11.3, 頭19.3, 高20, 頭高2.3]	製	良	内外面灰白	砂多	30	-	脚外外付, 腹外下付?, 腹内付着, 容量324L
251	218	齒 F	A・D	荒埋土	4.871区・M区・R区 26層・ 57?・9・土造1区・調ア盛土・ 調D盛土	口[14.8], 頭[10.4], 頭 [14.4], 脚[21.2], 高 20.3, 頭高 2.4	製	やや不良	内灰~ア, 外明 青灰~灰白	砂多	6	-	側外 1 条沈綴?, 腹外下 付?, 腹内付着, 容量377L 軸用横台(环)付着, 植 木柱あり, 容量416L
252	254	齒 E	A	SK01	SK1-74	口[20.4, 頭[18.3], 脚 [22.8], 高(16.7), 頭高2.4	製	堅緻	内灰白、外青灰	通常	8	-	脚外外付, 立付着
253	271	齒 E	A	SK01	SK1-12・23・24・25・26・ 27・28・32・56	口[7.6, 頭10.9, 脚 16.1, 高(12.6)	製	良好	内明青灰~灰白、 外青灰	砂多	底 36	-	側外 1 条沈綴?, 腹外下 付?, 17~19层, 軸用横台, 立 付着
254	251	齒 E	D	(灰原)	調 D区原内	口[17.6, 頭[16.6], 脚 [21.4], 高(19.6), 頭高2.3]	製	堅緻	内灰, 外青灰	通常	6	-	側外 1 条沈綴
255	220	齒 E	A・D	灰原(・荒埋土)	4 穴?・か 4Agr13層・か 4Gr18層・19層・21-20層・ 21-22層・23層・24-25層・ 25-26層・26-27層・ 25-26-27層・表土・1.572?	口[17.9, 或13.5, 頭 15.8, 脚24.4, 高24, 頭高 4]	製	やや不良	内明青灰、外青 灰	砂多	20	-	側外 1 条沈綴, 腹外下 付压痕多数, 容量5.39L
256	276	横脛	A・D	SK01・灰原	SK1-41・58・60・65・82・C 6・2層・き 4Agr4層・7層	口[11.4], 頭[10.4], 高 [15.4], 頭高 3.6	製	良好	内外面灰灰	謹極 多	20	-	側外 1 条沈綴?, 内斜 付?
257	255	小猿	A	SK01	SK1-4	口[17.4], 頭[15.4], 高 [7.5], 頭高 4.2	製	良	内外面灰	砂多	15	-	側外 1 条沈綴
258	277	小猿	A・D	灰原・SK07	か 4Agr13層・か 4Gr23 層・か 4Agr6層・22層・き 4Gr18層・SK07A区 13層	脚[25.2], 高(24.5)	製	堅緻	内灰~灰白, 外 青灰	砂多	-	-	
259	231	小猿	A・D	灰原	き 3Dgr9層・底・き 4Gr14 層・23層・か 4Gr23層・2 4Gr18層・25層 45gr28層	口[18.4, 頭17.1, 脚 16.6, 高(15.9), 頭高 3.6]	製	良好	内灰~ア, 外明 青灰	謹極 多	32	-	側外 1 条, 腹外下付外 類, 表土
260	232	小猿	A・D	灰原	か 4Agr1層・底 4Dgr6層・ 底 4Dgr6層	口[14.3], 頭[12.9], 脚 [12.2], 頭高 2.4	製	良好	内灰~ア, 外明 青灰	砂多	15	-	側外下付外 1 条, 腹内 外付, 容量4.72L, 容量 2.86L
261	247	中猿	A・D	SK01・灰原・ 荒埋土	SK1-1~4・4711.9・頭[1.5]・ 尾[1.4]・N区 0・頭[0.1]・ O・4・14・28・脚[14.2]・ 5・28・38・39?・表土・か 4Gr13層・き 4Agr1層	口[25.2], 頭[23.3], 脚 [42.7], 頭高 4.5	製	堅緻	内褐灰, 外灰白	通常	21	-	側外 1 条沈綴→脚4, 内 斜付且杜猿→脚一部付 ?, 容量312.6L
262	248	中猿	A・D	灰原・掌埋土	4.871区・A区 2層・N区 9層・ か 4Gr19層・き 3Gr3層・1 6層・底 5層18層・21層・ き 4Gr22層	口[25.2], 頭[23], 脚 [42.7], 頭高 4.5	製	良好	内明青灰, 外 青灰	通常	13	-	側外 1 条杜猿→脚4, 内 斜付且杜猿→脚一部付 ?, 容量46.3L
263	229	中猿	D	灰原	き 4Dgr6層	口[26.1], 頭[22], 高 [7.2], 頭高 4.5	製	良好	内外面灰灰	砂多	7	-	ZSDと同一, 腹内付 類, 腹内且杜猿類, ゆがみ大
264	228	中猿	A	灰原	き 3Gr1-14層・底 3Dgr2層・ 6層・底 4Gr17層・表土	口[27.7], 頭[25.5], 高 [7.1], 頭高 3.9	製	良好	内外面灰	通常	12	-	側外 1 条杜猿, 腹内 且杜猿類, ゆがみ大
265	249	中猿	A・D	灰原	か 4Agr1層・底 4Gr24 層・+ 5層 5Gr1層・18層・ か 5Gr24層・底 5Gr18層	口[28.7], 頭[23.4], 脚 [45.2], 高[27.8], 頭高 4.3	製	良好	内灰~ア, 外明 青灰~灰白	通常	14	-	側外 1 条杜猿→脚4, 内 斜付且杜猿→脚?, 容量 46.3L
266	252	中猿	A	灰原・掌埋土 +SK07	4.871区・か 4Agr6層・13 層・底 4Gr18層・14層・か 4Gr18層・19層・20層・ か 4Gr18-27層・+ 5Gr19層・ 8層・21層・4Gr18層・24 層・+ 4Gr17層・底 4Gr18 層・SK07 A区 13層	口[29.1], 頭[24.5], 脚 [40.6], 高[29.6], 頭高 4.4	製	堅緻	内灰白~褐色, 外的青灰~灰白	通常	30	-	側外 1 条杜猿→脚4, 内 斜付且杜猿類, ゆがみ大
267	226	長胴並	D	灰原	か 4Gr23層・7? 精緻・ き 4Gr16層	口[21.4], 頭[17.6], 脚 [20.2], 高[19.9], 頭高 2.6	製	良好	内灰, 外明青灰	謹極 多	13	-	土師器形, 腹外下付11Ha 類, 腹内且杜猿→脚4, Dc 類
268	227	長胴並	A	灰原	き 3Gr1層・底 4Gr14層	口[18.3], 頭[15.4], 高 [8.2], 頭高 2.5	製	良好	内灰, 外明青灰	謹極 多	12	-	土師器形, 腹内外付人, 腹 内付?
269	300	長胴並	A・D	灰原	か 4Gr1層・底 4Gr13層・ + 4Dgr21-22層	口[19.6], 頭[17], 脚 [20.1], 高[14.7], 頭高 2.5	製	良好	内外面灰	砂多	12	-	90%+11~13Ha類, 腹 内付+11~12且杜猿類, 腹 内付?
270	225	長胴並	A・D	灰原	き 4Gr6層・底 4Gr18層・ + 4Gr原・表土	脚[19.8], 高[22.4]	製	良好	内灰灰	謹極 多	-	土師器形, 腹95%+11Ha 類→脚4, 2条沈綴, 腹内 且杜猿類	
271	281	長胴並 (土師器)	D	灰原	き 4Dgr6層	口[25.3], 頭[22.7], 高 [7.2], 頭高 1.7	製	良好(鰐)	内淡黃 (2.5YR7/3), 外淡黃 (2.5YR8/4)	砂多	4	-	1層脚4 条沈綴, 腹外 1~2条沈綴, 腹内付 1~2条沈綴, 腹内付?
272	282	長胴並 (土師器)	D	灰原	き 5Dgr18層・底 5Gr竹?	口[24.8], 頭[23.1], 高 [4.2], 頭高 2.8	製	良好(鰐)	内淡黃 (2.5YR7/3), 外淡黃 (2.5YR8/4)	砂多	4	-	口2層外付?
273	280	瓶 (土師器)	D	(灰原)	き 4Gr灰原内	底[15.9], 高[10.6]	製	良(鰐)	内浅黃 (10YR8/3), 外棕 (7.5YR7/6~6/6)	砂多	6	-	外付 1 条沈綴, 内斜 付?
274	244	調	D	(灰原)	調 D区灰原内	口[28.2], 頭[25.1], 高 [7.6], 頭高 2.6	製	良	内灰白, 外明青 灰	謹極 多	5	-	外付 1 条沈綴, 腹内付 外付?
275	279	瓶 A (軸用横台)	A	角状灰?	4.77房上層 35 層	台[9.5], 高[5.3]全高6.6 cm, 高2.6	軸(2次熟)	内青灰	砂多	36	右 (軸用横台)	外付向付?, 台邊道離	
276	262	横行 C	D	(灰原)	か 4Dgr 灰原付?	口[8.9], 頭[11.4], 高 4.5	製	堅緻	内灰灰	通常	36	左 (付)付着	付付?
277	263	横行 B	D	(灰原)	調 D区灰原内	口[13.9], 頭[15.2], 高 3.5	製	堅緻	内各部灰~灰白	通常	6	-	底付?
278	291	横台 A	A・D	(灰原)	調 D区表土・底 2gr竹?	口[7.9], 底 9.2, 高 2.8	製(2次熟)	内灰灰	謹極 多	5	-	底付 1 条沈綴, 腹外 1~2条沈綴, 腹内付?	
279	289	赤彩瓶 A (土師器)	A	灰原	き 3Gr1-14層・1層	底[5.5], 高[1.4]	製	良好(鰐)	内淡黃 (10YR8/3), 外黃 (7.5YR8/8)	通常	12	-	内赤外赤

## 付章 1 その他の遺構

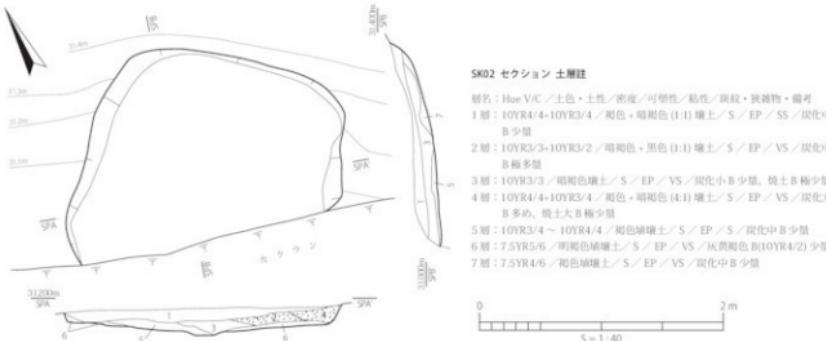
### (1) SK02 [不明土坑]

4号窯から東へ約4.5m離れた調査区B区斜面に位置する。南側を攪乱坑によって削られているため全体形状は不明だが、東西2.29m、南北残存1.61m、深さ最大22cmを測り、底面は平坦に近い。2層および4層に炭化物を多量に含む。4号窯に伴うSK01(東西2.85m×南北推定2.89m)と同規模・同形状の土坑であることが推測され、類似した機能が考えられるが、出土遺物がなく時期不明である。

### (2) SK03 [製炭土坑]

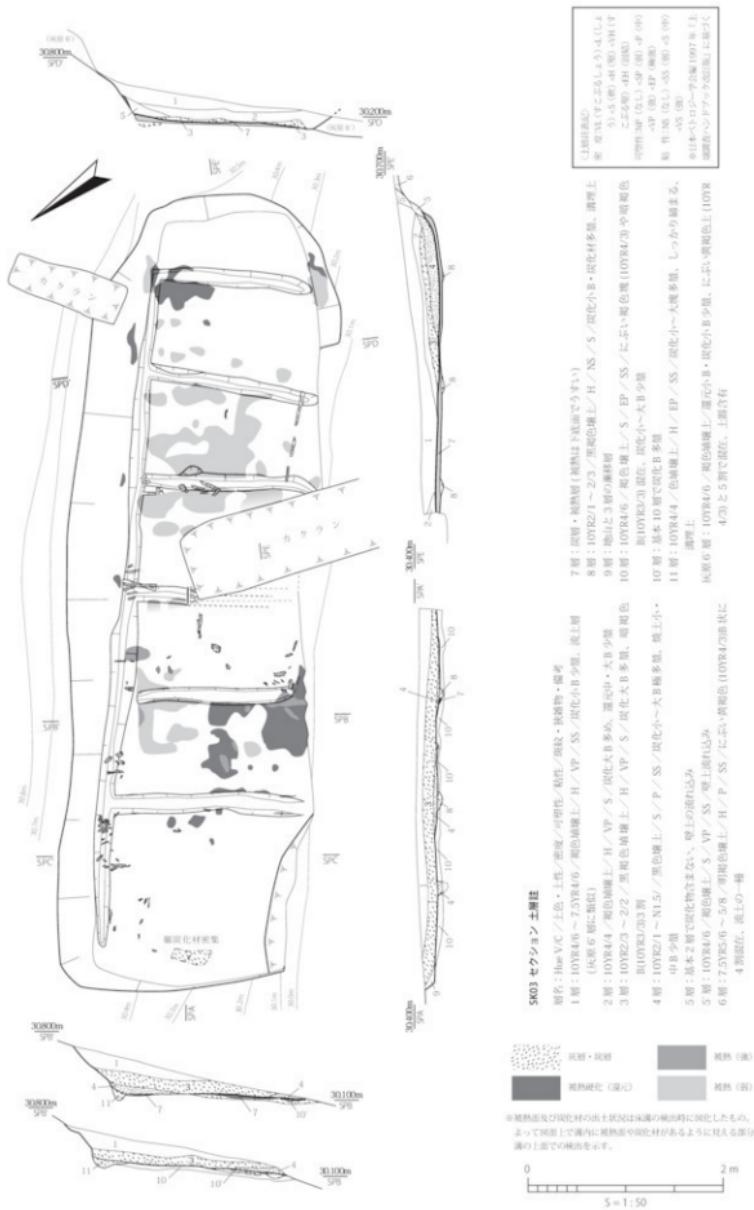
調査区D区からE-I区にわたって構築された全長8.22m、幅残存1.73～2.55mを測る製炭土坑である。土坑上面および斜面下方の側壁を中心に削平を受けるが、斜面に対して平行に掘削される平面長楕円形の土坑と推定される。斜面下方の側壁については全周せず、斜面を切って平坦面を造成する意図があったのかもしれない。深さ(壁高)はやや不明瞭だが、推定で40～50cm程となる。床面には所々に被熱痕がみられ、焼結硬化する部分もある(暗赤褐色～赤褐色の被熱弱と黄褐色の被熱強は酸化被熱、焼結硬化は還元被熱)。床直上には炭化物を極多量に含む層が覆い、木材の形が分かる炭化材も一部残存する。長軸に沿って並べられた炭化材に関しては、炭焼きの痕跡を示す可能性がある。床下には排水溝と思われる深さ10cm程の浅い溝が斜面上方側の壁際を巡るとともに、その溝から分岐してさらに6本の溝が長軸に直交して延びる。溝内には灰が充填され、部分的に炭化材も残る。溝底はいずれも被熱を受けず、所々肩部のみ被熱を受ける。炭化材の年代測定では11世紀前半～12世紀中頃の値が得られ、樹種同定では数種類の広葉樹材利用が明らかになった。詳しくは付章2を参照されたい。遺物は上層からわずかに須恵器の盤A・腹胴部片・専用焼台(B類)を確認しているが、おそらく5・6・13号窯からの混入と考えられる。

周辺の類例をあげると、二ツ梨豆岡向山窯跡群A地区のSK02(VI期頃)、二ツ梨一貫山窯跡の2号炭窯(VI<sub>2</sub>期)・3号炭窯(VI<sub>2</sub>期～VI<sub>3</sub>期)、林遺跡の1号木炭窯(10世紀以降)・4号木炭窯(時期不明)があり、時期不明を除いて9世紀末～10世紀より古くなる事例はない。斜面に直交する一貫山3号例以外は今報告例と同様に全て斜面に平行あるいはやや斜めに構築される。床溝は壁際や長軸に平行するものはあるが、今報告例のような直交は認められなかった。いずれも地上式や半地下式の構造をもつものであり、地下掘り抜き式の須恵器窯や炭窯とは異なる技術が導入されたことを示唆するものである。



第25図 SK02 平面図・断面図

第26図 SK03平面図・断面図



## 付章 2 自然科学分析

### 第1節 放射性炭素年代測定

バレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹

小林聰一・Zaur Lomtatidze・小林克也

#### 1 はじめに

石川県小松市に所在する二ツ梨豆岡向山窯跡群から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS 法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている(樹種同定の項参照)。

#### 2 試料と方法

試料は、3 次調査 D 区～E-1 区の製炭土坑である SK03 から出土した炭化材 3 点(試料 No.73: PLD-31692、試料 No.81: PLD-31693、試料 No.89: PLD-31694)である。SK03 の時期については、共伴遺物がなくて不明であったが、出土した炭化材はすべて同時期に焼かれたと考えられる。いずれの試料も最終形成年輪を測定している。樹種同定の結果、試料 No.73 はエゴノキ属、試料 No.81 はサカキ、試料 No.89 はクマシデ属イヌシデ節であった。測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計(バレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 $^{14}\text{C}$  年代、暦年代を算出した。

表 1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31692	試料 No.73 調査区: 3 次調査 D 区～E-1 区 遺構: SK03 層位: 覆土	種類: 炭化材(エゴノキ属) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-31693	試料 No.81 調査区: 3 次調査 D 区～E-1 区 遺構: SK03 層位: 覆土	種類: 炭化材(サカキ) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-31694	試料 No.89 調査区: 3 次調査 D 区～E-1 区 遺構: SK03 層位: 覆土	種類: 炭化材(クマシデ属イヌシデ節) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

#### 3 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した  $^{14}\text{C}$  年代を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 枝を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$  年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$  年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した  $^{14}\text{C}$  年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその  $^{14}\text{C}$  年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された  $^{14}\text{C}$  年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、および半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期  $5730 \pm 40$  年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$  年代の暦年較正には OxCal4.2 (較正曲線データ : IntCal13) を使用した。なお、 $1\sigma$  暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された  $^{14}\text{C}$  年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に  $2\sigma$  暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は  $^{14}\text{C}$  年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表 2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
PLD-31692 試料 No.73	-29.86 $\pm$ 0.18	925 $\pm$ 18	925 $\pm$ 20	1045-1095 cal AD (42.8%) 1120-1142 cal AD (19.8%) 1147-1154 cal AD (5.6%)	1038-1158 cal AD (95.4%)
PLD-31693 試料 No.81	-31.29 $\pm$ 0.18	924 $\pm$ 18	925 $\pm$ 20	1045-1095 cal AD (42.5%) 1120-1142 cal AD (19.3%) 1147-1155 cal AD (6.3%)	1038-1159 cal AD (95.4%)
PLD-31694 試料 No.89	-28.61 $\pm$ 0.24	984 $\pm$ 20	985 $\pm$ 20	1017-1043 cal AD (55.0%) 1105-1118 cal AD (13.2%)	997-1005 cal AD (1.3%) 1011-1050 cal AD (61.0%) 1083-1126 cal AD (26.7%) 1136-1152 cal AD (6.5%)
		較正年代の統合結果		1037-1048 cal AD (11.7%) 1085-1124 cal AD (43.1%) 1138-1150 cal AD (13.3%)	1030-1056 cal AD (20.4%) 1076-1154 cal AD (75.0%)

#### 4 考察

以下、 $2\sigma$  暦年代範囲 (確率 95.4%) に着目して結果を整理する。

製炭土坑 SK03 出土の炭化材である試料 No.73 (PLD-31692) は 1038-1158 cal AD (95.4%)、試料 No.81 (PLD-31693) は 1038-1159 cal AD (95.4%) で、11 世紀前半～12 世紀中頃の暦年代を示した。また、試料 No.89 (PLD-31694) は 997-1005 cal AD (1.3%)、1011-1050 cal AD (61.0%)、1083-1126 cal AD (26.7%)、1136-1152 cal AD (6.5%) で、10 世紀末～12 世紀中頃の暦年代を示した。

これらの試料は製炭土坑から出土した炭の製品または燃料材であると考えられ、同じ時期に焼かれたと考えられる。したがって、各試料の暦年代範囲は近い時期を示すと予想されるため、各試料の較正年代を結合し、重複している箇所を抽出した。計算には、暦年較正用ソフト OxCal に付属する Combine の機能を用いた。結合の結果は、 $2\sigma$  暦年代範囲において 1030-1056 cal AD (20.4%) および 1076-1154 cal AD (75.0%) で、11 世紀前半～12 世紀中頃の暦年代を示した。これは平安時代中期～後期に相当する。

## 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C 年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kalske, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

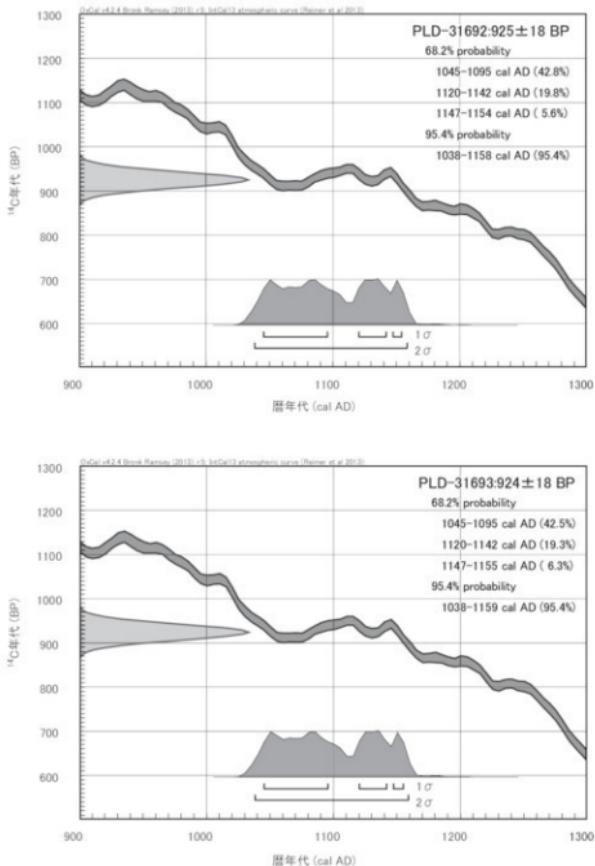


図 1-1 曆年較正結果 (1)

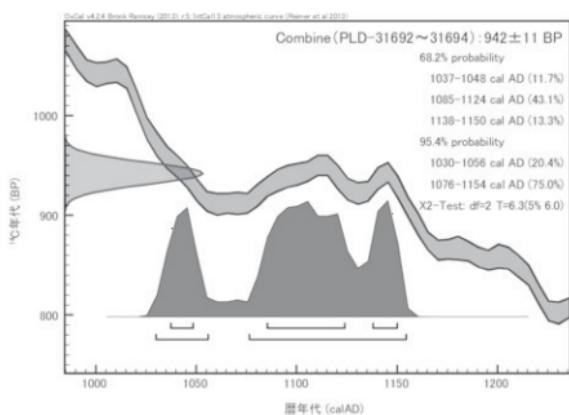
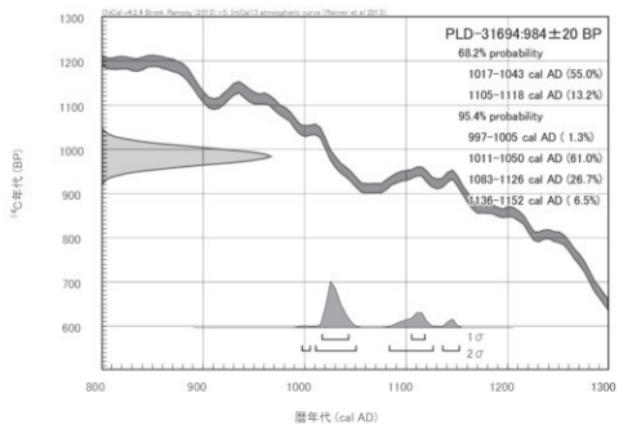


図 1-2 歴年較正結果 (2)

## 第2節 ツツ梨豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定

小林克也（株式会社パレオ・ラボ）

### 1はじめに

ツツ梨豆岡向山窯跡群は、加賀地域最大の須恵器窯跡群である南加賀窯跡群の支群の1つである。ここでは、2次調査および3次調査で出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

### 2 試料と方法

2次調査のA地区（以下、2次A地区と呼ぶ）の試料は、須恵器窯跡である1-A号窯跡から7点、1-B号窯跡から9点、2号窯跡から8点、2・1-A・1-B号窯跡から22点、製炭土坑であるSK02から14点、土坑であるSK03から1点、SK07から3点、粘土塊集中2から3点の、計67点。同じく2次調査のB地区（以下、2次B地区と呼ぶ）の試料は、須恵器窯跡である7号窯跡から1点、8号窯跡から11点、7・8号窯跡から1点、土坑であるSK03から1点、グリッドで採取された炭化材1点の、計15点。3次調査（以下、3次と呼ぶ）の試料は、4号窯跡から8点、5号窯跡から7点、6号窯跡から27点、5・6・13号窯跡灰原・前庭部から25点、SJ02から1点、SK03から28点、グリッドから2点の、計98点がみられた。分析試料は、総計で180点となった。

2次A地区的遺構の時期は、2号窯跡が8世紀前半、1-A号窯跡と1-B号窯跡、SK02、SK03、SK07は10世紀前半、2・1-A・1-B号窯跡が8～10世紀、粘土塊集中2が時期不明である。

2次B地区的遺構の時期は、8号窯跡が8世紀前半、7号窯跡とSK03が10世紀前半、7・8号窯跡が8～10世紀で、グリッドで採取された試料は時期不明である。

3次では、4号窯跡が9世紀前半、6号窯跡が9世紀末～10世紀初頭、5号窯跡が10世紀前半、5・6・13号窯跡が9～10世紀、SJ02が8世紀後半～9世紀前半で、グリッドで採取された試料は時期不明である。SK03は、炭化材の放射性炭素年代測定の結果、11世紀前半～12世紀中頃の暦年代を示した。

分析に先立って、計測可能な試料について、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行なった。復元直径は1cm刻みの同心円に試料を当てて求めた。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

### 3 結果

同定の結果、針葉樹ではモミ属とスギの2分類群、広葉樹ではカバノキ属とクマシデ属イヌシデ節（以下、イヌシデ節と呼ぶ）、アサダ、クリ、スダジイ、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属と呼ぶ）、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節と呼ぶ）、ツバキ属、サカキ、サクラ属、カエデ属、ニシキギ属、エゴノキ属、ハイノキ属の15分類群の、計17分類群が産出した。

表1 ニツ梨豆岡向山窯跡群出土の樹種同定結果

樹種	地区	2次調査												3次調査																	
		A地区						B地区						C地区						D地区											
		1-A 号	2-B 号	2-C 号	2-D 号	2-E 号	2-F 号	7-A 号	7-B 号	7-C 号	7-D 号	7-E 号	7-F 号	4-A 号	4-B 号	4-C 号	4-D 号	5-A 号	5-B 号	5-C 号	5-D 号	6-A 号	6-B 号	6-C 号	6-D 号	5+6 号	13 号	SJ	SK	SI	SK
モミ属	道構	2	2	10				3						1				8	2	2	11										41
スギ		3	8	4				1	3													4	23	13	1					60	
カバノキ属																														14	
クマシデ属イヌシデ属		1						4						1	1	1	1					1		5						1	
アサダ								2													1			1						6	
クリ								1	6																					2	
スダジイ																														1	
ブナ属																														3	
コナラ属アカガシ亜属								3																						7	
コナラ属コナラ節								1																						3	
ツバキ属								7	5																					12	
サカキ								1																						2	
サクラ属																														5	
カエデ属																														3	
ニシキギ属																														4	
エゴノキ属																														5	
ハイノキ属																														1	
合計		7	9	8	22	14	1	3	3	1	11	1	1	1	1	1	8	7	27	25	1	28	2	180							

スギが最も多くて60点、モミ属が41点、イヌシデ節が14点、コナラ節が12点、クリが9点、アカガシ亜属が7点、アサダが6点、ツバキ属とサカキ、カエデ属、エゴノキ属が各5点、サクラ属が4点、ブナ属が3点、カバノキ属とスダジイ、ニシキギ属、ハイノキ属が各1点であった。

2次A地区では、1-A号窓跡でスギが3点とモミ属が2点、ツバキ属とイヌシデ属が各1点、1-B号窓跡ではコナラ節が7点とモミ属が2点、2号窓跡ではスギが8点、2・1-A・1-B号窓跡ではモミ属が10点、スギとイヌシデ節が各4点、アサダが2点、クリとアカガシ亜属が各1点みられた。SK02ではクリが6点とコナラ節が5点、ブナ属が3点、SK03ではスギが1点、SK07ではスギが3点、粘土塊集中2ではモミ属が3点みられた。

2次B地区では、7号窯跡でハイノキ属が1点、8号窯跡ではカエデ属が5点とアカガシ亞属が3点、アサダが2点、イヌシデ節が1点、7・8号窯跡ではイヌシデ節が1点みられた。SK03ではモミ属が1点みられた。グリッド出土の炭化材はイヌシデ節が1点であった。

3次調査では、4号窯跡でモミ属が8点、5号窯跡ではスギが4点とモミ属が2点、アサダが1点、6号窯跡ではスギが23点とモミ属が2点、スマジイとサクラ属が各1点、5・6・13号窯跡ではスギが13点とモミ属が11点、イヌシデ節が1点みられた。SJ02ではカバノキ属が1点みられた。SK03ではイヌシデ節とサカキ、エゴノキ属が各5点、アカガシ亜属とサクラ属が各3点、クリとツバキ属が各2点、スギとアサダ、ニシキギ属が各1点みられた。グリッド出土の炭化材は、ツバキ属が2点であった。

復元直径の計測では、全体的に計測が行なえた試料がすくなかったが、2次A地区のSK02では6cm以下の試料が多く、2次B地区の8号窓跡では4~6cmにピークがみられた。また3次の6号窓跡では11~20cmの試料が多く、SK03では6cm以下の試料が多かった。

平均年輪幅の計測結果では、0.96cm ある幅の広い試料（試料 No.154：スギ）もあったが、ほとんどの試料は 0.5cm 以下であった。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 図版1 1a-1c(No.2)、2c(No.44)、3c(No.50)、4c(No.166)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1~12列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2~4個みられる。放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高地に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミ、低標高地に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図版1 5a-5c(No.5)、6c(No.25)、7c(No.115)、8c(No.147)

仮道管と放射組織、放射仮道管で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、1~10列となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(3) カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図版1 9a-9c(No.98)

小型の道管が単独ないし2~3個複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は10~20段程度の階段穿孔を有する。放射組織は同性で、1~4列となる。

カバノキ属にはマカンバやダケカンバ、ウダイカンバなどがあり、代表的なマカンバは北海道から本州北中部の温帯の、日当たりの良い場所に生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で強韌だが、切削加工は容易である。

(4) クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Eucarpinus* カバノキ科 図版1・2 10a-10c(No.74)、11a-11c(No.77)

小型の道管が単独ないし2~7個、放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1~4列となり、集合放射組織がみられる。

クマシデ属イヌシデ節は温帯から暖帯の山林などに分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬く、割裂しにくい。切削加工は中庸である。

(5) アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 図版2 12a-12c(No.108)

小型の道管が単独ないし2~7個、放射方向に複合して密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で、1~4列となる。

アサダは北海道中南部から九州にかけての温帯から暖帶上部に分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で割れにくく、切削加工等は困難である。

(6) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図版2 13a-13c(No.85)、14a(No.143)、15a(No.145)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

(7) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 図版2

16a-16c(No.38)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、單列である。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(8) ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版3 17a-17c(No.133)

小型の道管が単独ないし2～3個複合して密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～3列のものと広放射組織がみられる。

ブナ属にはブナやイヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は、重硬で強度があるが、切削加工は困難ではない。

(9) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版3 18a-18c(No.82)

大型の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、單列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬、強靭で耐水性があり、切削加工は困難である。

(10) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinoides* ブナ科 図版3 19a-19c(No.137)、20a(No.139)、21a(No.140)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、單列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靭で、切削加工はやや難しい。

(11) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図版3 22a-22c(No.65)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は10～20段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1～2列が直立する異性で、1～4列となる。

ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬で、切削加工は困難である。

(12) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版3・4 23a-23c(No.70)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は20～40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、單列である。

サカキは日本海側と新潟県、太平洋側と関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強靭、堅硬で、切削加工は困難である。

(13) サクラ属(広義) *Prunus* s.l. バラ科 図版4 24a-24c(No.91)

小型の道管が単独ないし2～4個、放射方向ないし斜線方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。

広義のサクラ属には、モモ属、スモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属、バクチノキ属以外は他のサクラ属と区別できないため、モモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す意味で、広義のサクラ属とした。

#### (14) カエデ属 *Acer* カエデ科 図版 4 25a-25c(No.109)

中型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。木部繊維の壁の厚さの違いで雲紋状の文様が木口面にみられる。道管は單穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～2列のものと幅5～8列程度のものがみられる。

カエデ属は10列以上の放射組織を持つチドリノキ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はチドリノキ以外のカエデ属である。カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

#### (15) ニシキギ属 *Euonymus* ニシキギ科 図版 4 26a-26c(No.76)

小型の道管がほぼ単独でやや疎らに散在する散孔材である。道管は單穿孔を有する。放射組織は上下端1～2列が直立する異性で、單列となる。

ニシキギ属にはニシキギやマユミなどがあり、代表的なマユミは、北海道から九州までの山地にみられる落葉高木または小高木の広葉樹である。材は強靭で韌性がある。

#### (16) エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版 4 27a-27c(No.69)

小型の道管が単独ないし2～4個複合してやや疎らに散在する散孔材である。軸方向柔組織は晩材部で線状となる。道管は20～40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は1～4列が直立する異性で、1～3列となる。

エゴノキ属は温帯から亜熱帯の低山地、原野に分布する落葉小高木の広葉樹である。材はやや重くて韌性があるが、切削加工などは容易である。

#### (17) ハイノキ属 *Symplocos* ハイノキ科 図版 4 28a-28c(No.99)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は20～40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、1～4列となる。

### 4 考察

以下に、2次A地区、2次B地区、3次の同定結果について個別に考察し、二ツ梨豆岡向山窯跡群の森林利用および丘陵の植生変化について考える。なお、考察にあたっての炭化材の評価については、須恵器窯跡および灰原、土師器窯跡出土の炭化材は、燃料材の残渣であると考える。製炭土坑出土の炭化材は、焼成された製品としての炭（以下、炭製品と呼ぶ）か、燃料材残渣かの判断ができないため、炭製品または燃料材と表記する。土坑や粘土塊集中、グリッドなどで取り上げられた炭化材については用途不明とした。須恵器窯跡の燃料材や、製炭土坑の炭化材の供給源については、藤原（1992）および小林・北野（2013）に指摘されているように、窯跡周辺の樹木が利用されていると想定した。

#### ・2次調査A地区

須恵器窯跡で、燃料材の同定数の多い窯跡に着目すると、8世紀前半の2号窯跡では針葉樹のみで、10世紀前半の1-A号窯跡では広葉樹よりも針葉樹が僅かに多いが、1-B号窯跡では針葉樹よりも広葉樹が多くみられた（表2）。須恵器窯跡の燃料材は、操業時期の経過と共に燃料材の樹種が針葉樹主体から広葉樹主体へと変化した可能性がある。また、10世紀前半の製炭土坑であるSK02で

表2 2次調査A地区的樹種同定結果

樹種	種類	燃料材	10C前半				不明	合計		
			8C前半		8~10C					
			2号窯跡	1-A号窯跡	1-B号窯跡	SK02	03	07		
モミ属				2	2				17	
スギ		8	3			1	3	4	19	
クマシデ属イヌシデ節			1						5	
アサダ									2	
クリ					6				7	
ブナ属					3				3	
コナラ属アカガシ亜属									1	
コナラ属コナラ節				7	5				12	
ツバキ属		1							1	
合計		8	7	9	14	1	3	22	3	67

は、針葉樹はみられず、クリやブナ属、コナラ節、ツバキ属といった広葉樹がみられた。これは1-B号窯跡の燃料材と同様の傾向を示しており、10世紀前半のA地区周辺では、広葉樹が一定数生育していた可能性を示唆する。

須恵器窯跡および製炭土坑の炭化材について復元直径分布をみると、計測不可の試料が多いため試料数は少ないが、須恵器窯跡の2号窯跡では復元直径10cm以上の材がみられるのにに対し、1-A号窯跡、1-B号窯跡では復元直径10cm以下の材が多い傾向がみられた。また、1-B号窯跡の復元直径10cm以下の炭化材は、いずれも広葉樹であった。2・1-A・1-B号窯跡の灰原では、復元直径20cmまでの径の材が偏りなくみられた。製炭土坑であるSK02では、復元直径10cm以下の材のみがみられた（図1）。

以上のように、A地区では8世紀前半には復元直径10cm以上のスギが利用され、10世紀前半には復元直径10cm以下の広葉樹が利用されていたという傾向が確認できた。

#### ・2次調査B地区

須恵器窯跡の炭化材に着目すると、8世紀前半の8号窯跡では燃料材・構築材共に広葉樹のみが用いられ、針葉樹は確認できなかった。構築材では、カエデ属のみがみられた。10世紀前半の7号窯跡ではハイノキ属1点のみであった。試料数が少ない窯跡もあるため推測の域を出ないが、2次B地区的窯跡では針葉樹を燃料材としてあまり利用していなかった可能性がある。

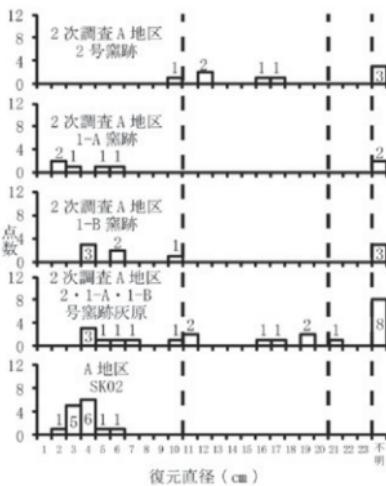


図1 2次調査A地区須恵器窯・製炭土坑の復元直径分布

表3 2次調査B地区の樹種同定結果

樹種	種類	時期	8C前半	10C前半	8~10C	不明	合計
		遺構	8号窯跡	7号窯跡	SK3	7・8号窯跡灰原	
		構築材	燃料材		燃料材	不明	
モミ属					1		1
クマシデ属イヌシデ節			1			1	3
アサダ			2				2
コナラ属アカガシ亜属			3				3
カエデ属		4	1				5
ハイノキ属				1			1
合計		4	7	1	1	1	15

須恵器窯跡の炭化材の復元直径分布をみると、8号窯跡の燃料材では復元直径10cm以下の材が多く、構築材では復元直径4~5cmの材のみがみられた。7号窯跡および7・8号窯跡灰原の試料については、復元直径の計測が行えた試料が少なく、傾向は掴めなかった。

以上のように、B地区では試料数が少ないため推測の域を出ないが、構築材、燃料材とともに復元直径10cm以下の広葉樹が利用される傾向がみられた。

### ・3次調査

須恵器窯跡および土師器窯跡、製炭土坑に着目すると、9世紀前半の4号窯跡、9世紀末~10世紀初頭の6号窯跡、10世紀前半の5号窯跡のいずれも、針葉樹が多かった。9~10世紀の5・6・13号窯跡の灰原から出土した炭化材でも針葉樹が多くみられることから、3次調査の須恵器窯跡では、通年で針葉樹を燃料材として多用していたと考えられる。一方、8世紀後半~9世紀前半の土師器窯跡であるSJ02ではカバノキ属が1点みられ、11世紀前半~12世紀中頃の製炭土坑であるSK03では針葉樹は1点のみで、イヌシデ節やサカキを中心とする広葉樹が多くみられた(表4)。須恵器窯跡では針葉樹主体、土師器窯跡および製炭土坑では広葉樹主体で、主体となる燃料材が異なっており、遺構の種別毎に使用する燃料材の樹種が異なっていた可能性がある。ただしSK03は9~10世紀の窯跡よりも100年ほど時期が新しい遺構であり、9~10世紀には周辺の森林に針葉樹が多く分布していたが、SK03が使用される頃には周辺の森林は広葉樹も多く分布する森林へと植生が変化していた可能性も考えられる。

須恵器窯跡の炭化材の復元直径分布をみると、試料数の多い6号窯跡では、復元直径10cm以上20cm未満の材が多く、15cmにピークがみられた。また、4号窯跡と5号窯跡では傾向はつかめないが、5・6・13号窯跡灰原では、復元直径1~19cmの材が、偏りなくみられた。土師器窯であるSJ02の炭化材は復元直径5cm、製炭土坑であるSK03の炭化材は、復元直径6cm以下の材のみであり、

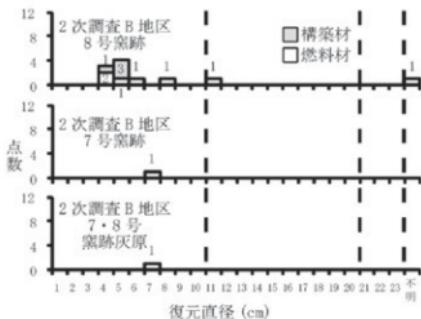


図2 2次調査B地区須恵器窯の復元直径分布

表4 3次調査の樹種同定結果

樹種	種類	燃料材				燃料材?	炭製品か 不明	合計			
		8C後半～ 9C前半		9C末～ 10C初頭							
		9C前半	10C前半	10C前半	9～10C						
モミ属	SJ02	8	2	2	11	5・6・13号 窓跡灰原・前庭	グリ ッド	23			
スギ	4号窓跡	23	4	13	1	SK03		41			
カバノキ属	1							1			
クマシデ属イヌシデ節				1		5		6			
アサダ			1			1		2			
クリ						2		2			
スタジイ		1						1			
コナラ属アカガシア属						3		3			
ツバキ属						2	2	4			
サカキ						5		5			
サクラ属		1				3		4			
ニシキギ属						1		1			
エゴノキ属						5		5			
合計		1	8	27	7	25	28	2	98		

ピークは3cmであった(図3)。

以上のように3次調査の須恵器窓跡では、6号窓跡にみられるように、復元直径10cm以上のスギが多用される傾向がみられたが、土師器窓跡および製炭土坑では、復元直径10cm以下の広葉樹が利用されていたのが確認できた。

#### ・二ツ梨豆岡向山窓跡の森林利用

##### および丘陵の植生変化について

遺構ごとの主要燃料材を時期順に示した表を表5に示す。

8世紀前半操業の須恵器窓跡は、2次A地区2号窓跡と2次B地区8号窓跡であるが、燃料材の主体となる樹種をみると、前者はモミ属とスギといった針葉樹、後者は広葉樹であった。窓跡周辺の樹木を燃料材として伐採利用していたと考えると、8世紀前半頃の2次A地区と2次B地区では、窓跡周辺の植生が異なっていた可能性がある。

次に、9世紀前半に操業がはじまる3次の4号窓跡、9世紀末～10世紀初頭の3次の6号窓跡、10世紀前半頃の3次5号窓跡では、モミ属およびスギ

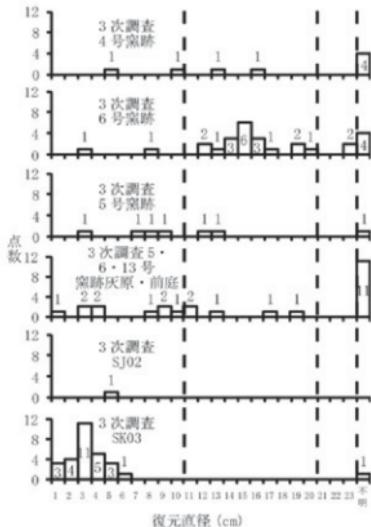


図3 3次調査須恵器窓・製炭土坑・  
土師器窓跡の復元直径分布

表 5 時期別主要燃料材 (※ ■ は同定数が多い樹種)

時期	遺構の種類	窯跡名称	樹種		
			モミ属	スギ	広葉樹
8C 前半	須恵器窯跡	2次 A 地区 2号窯跡		8	
8C 前半	須恵器窯跡	2次 B 地区 8号窯跡			11
9C 前半	須恵器窯跡	3次 3号窯跡	8		
9C 末~10C 初頭	須恵器窯跡	3次 6号窯跡	2	23	2
10C 前半	須恵器窯跡	3次 5号窯跡	2	4	1
10C 前半	須恵器窯跡	2次 A 地区 1A 号窯跡	2	3	2
10C 前半	須恵器窯跡	2次 A 地区 1B 号窯跡	2		7
10C 前半	製炭土坑	2次 A 区 SK2			14
10C 前半	須恵器窯跡	2次 B 地区 7号窯跡			1
11C 前半~12C 中頃	製炭土坑	3次 SK03		1	27

が多くみられた。いずれも 3 次調査の窯跡であり、9世紀前半～10世紀前半頃の窯場周辺にはモミ属やスギといった針葉樹が多く生育していた可能性がある。

10世紀前半の2次 A 地区 1-A 号窯跡ではスギ、2次 A 地区 1-B 号窯跡では広葉樹が多くみられた。また 2 次 B 地区 7 号窯跡では広葉樹がみられた。2 次 A 地区では針葉樹、1-B 号窯跡では広葉樹が多くみられるため、10世紀前半の窯場周辺では針葉樹と広葉樹が共生していた可能性が高い。ただし 10世紀前半の製炭土坑である 2 次 A 地区 SK02 では広葉樹のみが出土しており、広葉樹主体の森林の存在を裏付けている。2 次 B 地区は分析点数が少ないと傾向が確認できなかったが、A 地区と同様に広葉樹主体の森林が広がっていた可能性がある。

11世紀前半～12世紀中頃の製炭土坑である 3 次の SK03 では、広葉樹が多くみられた。3 次調査地点の周辺では、10世紀前半頃までは針葉樹主体の森林が広がっていたと考えられるが、須恵器窯跡の操業終了時には、窯場周辺の針葉樹の大部分が伐採され、広葉樹主体の森林へと変化した可能性がある。

北陸地方の日本海沿岸地域では、金沢市畝田東遺跡群の弥生時代～平安時代にかけての遺構で行われた花粉分析の結果が示すとおり、スギが卓越する（パリノ・サーヴェイ株式会社, 2006）。よってスギは、人為による植生変更を受けていない森林の指標となりえる樹種である。二ツ梨豆岡向山窯跡群が操業されていた丘陵では、8世紀前半頃は 2 次 A 地区のある北西側および 3 次調査地点の南西側の斜面には針葉樹を主体とする森林が広がり、2 次 B 地区のある北東側の斜面は広葉樹を主体とする森林が広がっていたと考えられる。北西側および南西側の斜面は、窯跡の操業と共に針葉樹が減少し、10世紀前半には北東側の斜面と同様に広葉樹主体の森林に変化していたと考えられる。このような、須恵器窯業や製炭などの手工業生産活動に伴う炭化材が、針葉樹主体から広葉樹主体へと変化するとの同様の状況は、富山県立山町の上末窯谷窯跡の樹種同定結果においてもみられる（林, 1989）。

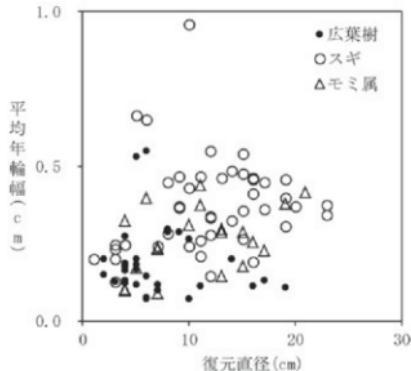


図 4 須恵器窯跡の復元直径と平均年輪幅

一方、須恵器窯跡の燃料材の復元直径では、スギは平均年輪幅が比較的広く、復元直径が10cm以上の試料が多くみられるが、広葉樹は平均年輪幅が比較的狭く、復元直径が10cm未満の試料が比較的多くみられる（図4）。つまり、須恵器窯跡の燃料材には、針葉樹であれば10cm以上の径の大きな木を、広葉樹であれば10cm未満の径の小さい木を選択利用していた可能性がある。なお、製炭土坑出土の炭化材は、いずれも復元直径6cm以下で、平均年輪幅が0.5cm未満の材のみがみられた（図5）。試料が炭製品なのか燃料材なのかの判断はできないが、復元直径のバラつきが少なく、一種の規格性のような、強い選択性がうかがえる。

上記の植生の変遷および燃料材の直径による選択性を考慮すると、二ツ梨豆岡向山窯跡群の須恵器窯跡の燃料材では、8世紀前半に針葉樹を主に利用する窯跡、広葉樹を主体的に利用する窯跡がみられる点を考慮すると、特定の樹種を燃料材として多く利用するため、窯場の選択を窯場周辺の植生で左右するような、強い樹種の選択性は確認できなかった。ただし、窯場周辺の森林内から、針葉樹なら直径10cm以上、広葉樹なら直径10cm未満を選択するような、緩い選択性が存在した可能性が考えられる。製炭土坑では、特定の樹種のみを多く利用する傾向はみられなかつたが、産出した広葉樹はいずれも薪炭材として普通に利用される樹種であった（伊東ほか、2011）。薪炭材に適した直径6cm以内の広葉樹を選択的に伐採していたと考えられる。

南加賀窯跡群では、二ツ梨一貫山窯跡および林オオカミダニ支群の窯跡等で出土した須恵器窯跡および製鉄関連遺構、土師器窯跡などの炭化材樹種同定の結果により、一つの丘陵で多種の手工業生産を行う場合、生産遺構または生産工程の木材として適した材を選択し、他業種と採取する木材が競合しないような工夫をするのが基本であったと考えられている（望月、2008）。二ツ梨豆岡向山窯跡群の炭化材でも同様の傾向が確認できる。

#### 参考・引用文献

- 藤原学（1993）須恵器窯と燃料薪、考古学論叢・関西大学考古学研究室開設40周年記念、495-517。
- 林 昭三（1989）越中上末窯出土炭の樹種、富山大学人文学部考古学研究室編「越中上末窯」：209-214、富山大学人文学部考古学研究室。
- 伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌、238p、海青社。
- 小林克也・北野博司（2013）山形県高畠町高安窯跡群にみる古代窯業における燃料材選択と森林利用、植生史研究、22（1）、p23-28。
- 望月精司（2008）北陸地方の古代窯業・製鉄業の森林利用、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター編「古代窯業の森林利用技術—陶人と森との関わり—」予稿集：33-44、東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター。
- パリノ・サーヴェイ株式会社（2006）花粉分析等による古環境復元、石川県埋蔵文化財センター編「能田東遺跡群VI」：4-33、石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター。

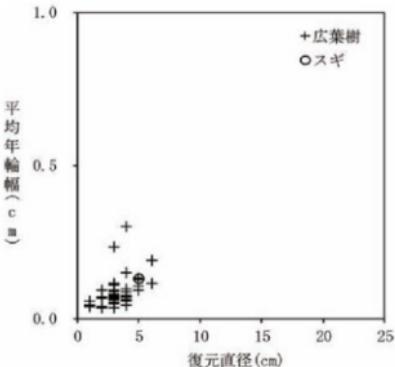


図5 製炭土坑の復元直径と平均年輪幅

付表 1-1 ニツ梨豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	袋 No.	調査 年次	地区	遺構名	部位	地区・ No.	層位	種類	樹種	残存 半径 (cm)	残存 年輪 数	復元 年輪 幅(cm)	平均年輪 幅(cm)	備考	時期	年代 測定番号	
1 1		4号窯跡					5層	燃料材	モミ属	1.6	3	0.53			9世紀前半		
2 2							①区 表上		モミ属	0.7	3	0.23					
3 3							P区 1層		モミ属	2.6	15	0.17					
4 4							B区 2層		モミ属	2.2	7	0.31					
5 5			5号窯跡				C区 3層		スギ	2.9	7	0.41			10世紀前半		
6							①区 表上		モミ属	2.6	9	0.33					
7 6							C区 4・5層		アザダ	0.9	7	0.13					
8							C区 2層		スギ	2.6	7	0.37					
9 7							C区 2層		スギ	2.7	6	0.45					
10							C区 2層		モミ属	1.0	11	0.09					
11 8		東	6号窯跡				C区 7層	燃料材	スギ	3.7	11	0.34			9世紀末～ 10世紀初頭		
12							C区 3層		スギ	3.2	12	0.27					
13							G区 15層		スギ	1.7	5	0.34					
14 10							D区 3層		スギ	4.6	24	0.19					
15 11							F区 (6 窯 束e区) 3層		スギ	2.7	5	0.54					
16 12							F区 (6 窯 束e区) 3層		モミ属	0.9	5	0.18					
17			東				E区 中層	燃料材	スギ	2.6	8	0.33			9世紀末～ 10世紀初頭		
18 13							D区 3層		スギ	3.7	8	0.46					
19							D区 3層		スギ	1.2	6	0.20					
20							D区 3層		スギ	3.4	7	0.49					
21 14							D区 3層		スギ	3.2	5	0.64					
22							D区 3層		スギ	3.5	5	0.70					
23		3次 調査	6号窯跡				D区 3層	燃料材	スギ	5.2	14	0.37			9世紀末～ 10世紀初頭		
24							D区 3層		スギ	3.4	9	0.38					
25							D区 3層		スギ	3.1	9	0.34					
26 15							D区 3層		スギ	3.7	12	0.31					
27							D区 3層		スギ	3.7	8	0.46					
28							D区 3層		スギ	3.2	7	0.46					
29			前庭部				D区 3層	燃料材	スギ	3.6	10	0.36			9世紀末～ 10世紀初頭		
30							D区 3層		スギ	2.8	10	0.28					
31 16							D区 3層		モミ属	5.2	18	0.29					
32							D区 3層		スギ	5.4	12	0.45					
33							D区 3層		スカラ属	3.2	11	0.29					
34 17							D区 3層		スギ	3.3	8	0.41					
35		3次 調査	5・6 ・13号 窯跡				D区 3層	燃料材	スギ	2.2	4	0.55			9～10世紀		
36							D区 3層		スギ	4.3	9	0.48					
37 18							D区 3層		スギ	1.4	11	0.13					
38							D区 3層		スダジイ	1.0	5	0.20					
39 19							さ5-C 区	燃料材	スギ	0.6	2	0.30			9～10世紀		
40							さ5-C 区		スギ	1.8	9	0.20					
41 21							さ5-C 区		スギ	2.0	8	0.25					
42							さ5-C 区		スギ	1.4	6	0.23					
43 22							さ5-A 区	燃料材	モミ属	0.3	1	0.30			9～10世紀		
44 23							さ5-D 区		モミ属	0.3	1	0.30					
45 24							さ5-D 区		スギ	0.4	3	0.13					
46 25							さ5-D 区		スギ	0.6	3	0.20					
47 26							さ5-C 区		ケマシデ属 イヌシデ節	0.4	2	0.20					
48 28							さ5-C 区		モミ属	1.1	6	0.18					
49 29							さ5-C 区	燃料材	スギ	0.5	2	0.25			9～10世紀		
50 30							さ5-C 区		モミ属	0.5	2	0.25					
51 31							さ6-B 区		スギ	3.9	9	0.43					
52							さ6-B 区		モミ属	1.7	6	0.28					
53							さ6-B 区		モミ属	1.5	5	0.30					
54 32							さ6-B 区		モミ属	2.2	4	0.55					
55 32							さ6-B 区		モミ属	1.8	6	0.30					
56							さ6-B 区		モミ属	1.5	4	0.38					

付表 1-2 ニッ梨豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

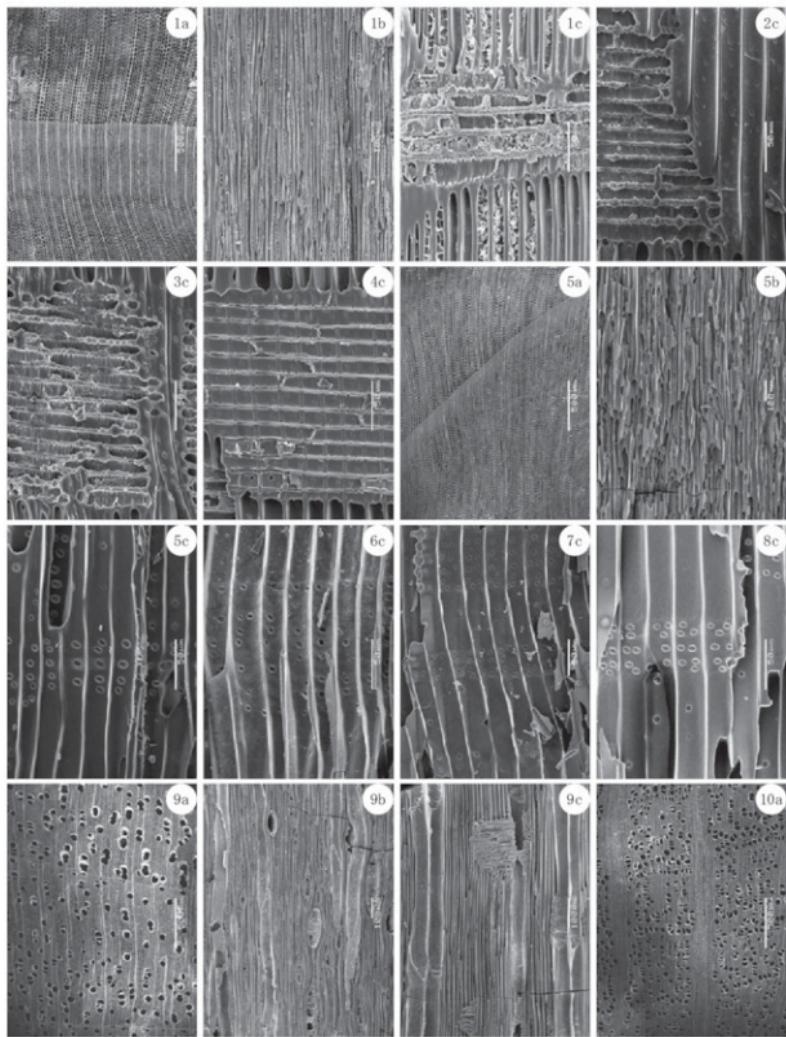
試料No.	袋No.	調査年次	地区	遺構名	部位	地区・No.	層位	種類	樹種	残存半径(cm)	残存年輪数	復元直徑(cm)	平均年輪幅(cm)	備考	時期	年代測定番号
57		33	5・6 ・13号 窓跡	灰原 区	3層	6-B 区	3層	燃料材	スギ	2.4	6	19	0.40		9~10世紀	
58									スギ	4.2	9	9	0.47			
59									スギ	4.2	9	11	0.47			
60									モミ属	1.6	7	17	0.23			
61									モミ属	1.9	8	-	0.24			
62									モミ属	1.7	8	-	0.21			
63									スギ	1.1	3	9	0.37			
64	20			グリッド	C-4 区 [X]	C-4 区 [X]	盛上	不明	ツバキ属	0.5	5	-	0.10	-部 SK03	不明	
65	27								ツバキ属	0.6	10	-	0.06	-部 SK03		
66		34	3次 調査	A区	覆土	A区	覆土	燃料材 か 炭製品	クマシデ属 イヌシデ節	0.8	23	2	0.03		PLD- 31692	
67									サカキ	0.8	22	3	0.04			
68									エゴノキ属	0.9	13	2	0.07			
69									エゴノキ属	1.0	16	3	0.06			
70									サカキ	1.0	11	2	0.09			
71									サカキ	1.0	15	2	0.07			
72									アサダ	1.7	18	4	0.09			
73									エゴノキ属	1.6	14	3	0.11			
74									クマシデ属 イヌシデ節	1.6	21	3	0.08			
75									エゴノキ属	1.6	14	3	0.11			
76		35	SK03	A区	覆土	A区	覆土	燃料材 か 炭製品	ニシキギ属	0.5	13	1	0.04		11世紀前半～ 12世紀中頃	
77									クマシデ属 イヌシデ節	2.2	21	5	0.10			
78									クリ	1.5	5	4	0.30			
79									クマシデ属 イヌシデ節	1.9	15	5	0.13			
80									エゴノキ属	1.1	14	3	0.08			
81									サカキ	0.7	12	1	0.06			
82									コナラ属 アカガシ亞属	1.0	9	3	0.11			
83									コナラ属 アカガシ亞属	0.5	11	1	0.05			
84									サクラ属	1.1	8	-	0.14			
85									クリ	2.1	11	6	0.19			
86		36	SK03	b区	覆土	b区	覆土	燃料材 か 炭製品	サカキ	1.7	24	3	0.07		PLD- 31693	
87									スギ	2.5	19	5	0.13			
88									サクラ属	1.4	15	3	0.09			
89									クマシデ属 イヌシデ節	1.5	17	3	0.09			
90									コナラ属 アカガシ亞属	1.4	6	3	0.23			
91									サクラ属	1.1	25	4	0.04			
92	37								ツバキ属	1.2	19	4	0.06			
93	38								ツバキ属	0.8	14	4	0.06			
94	39	4号窓跡	B地区	灰原 区	1層	か4-A 区	1層	燃料材	モミ属	2.2	15	13	0.15		9世紀前半	
95	40								モミ属	6.3	14	-	0.45			
96	41								モミ属	2.3	9	16	0.26			
97	42								モミ属	0.5	1	-	0.50			
98	43								SJ02	-	A区	-				
99	44	2次 調査	B地区	7号窓跡	m区	2層		燃料材	カバノキ属	2.1	23	5	0.09	土師器焼成坑	9世紀前半～ 9世紀前半	
100	45				7・8号 窓跡	お6-A 区	6層	燃料材	ハイノキ属	1.2	10	7	0.12	報告書12刷		
101	46			SK03	A区	上層		燃料材	クマシデ属 イヌシデ節	1.6	16	7	0.10			
102	47			グリッド	え9	包含層	不明	モミ属	0.3	1	-	0.30	7号・8号 区域	10世紀前半		
								クマシデ属 イヌシデ節	2.9	10	9	0.29	7号・8号 区域	不明		

付表 1-3 ニッセイ豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	袋 No.	調査 年次	地区	遺構名	部位	地区・ No.	層位	種類	樹種	残存 半径 (cm)	残存 年輪 数	復元 直徑 (cm)	平均年輪 直徑(cm)	備考	時期	年代 測定番号
103	48	B地区	8号窯跡	前庭部	壇成部 床下b 区			構築材	カエデ属	1.2	10	5	0.12	仮設大井構築 材	8世紀前半	
104	49				床下c 区			燃料材	コナラ属 アカガシ亞属	3.3	11	8	0.30			
105									アサダ	2.6	21		0.12			
106	50								コナラ属 アカガシ亞属	1.3	7	4	0.19			
107									コナラ属 アカガシ亞属	1.4	7	5	0.20			
108				燃成 部	D区	13層		構築材	アサダ	1.1	4	4	0.28			
109	51				D区				カエデ属	1.7	13	4	0.13			
110	52				E区			構築材	カエデ属	2.4	13	5	0.18			
111	53				E区	③層		燃料材	カエデ属	2.4	14	5	0.17			
112	54				F区	覆土		燃料材	クマシデ属 イヌシデ属	2.5	22	11	0.11	報告書6層 8-II号窯1次 床		
113	55								カエデ属	1.9	13	6	0.15			
114		2号窯跡	8世紀前半	前庭部		上層			スギ	2.2	9	10	0.24			
115	56								スギ	1.7	5	12	0.34			
116						③下層			スギ	1.5	4		0.38			
117	57					③下層		燃料材	スギ	4.0	11	17	0.36			
118	58				n区	②下層			スギ	2.8	19	12	0.15			
119				1-A号窯 跡	m区	灰層			スギ	2.3	5	16	0.46			
120					m区	灰層 上層		燃料材	スギ	2.3	4		0.58	節部		
121									ツバキ属	0.3	2	2	0.15			
122	60								スギ	1.5	6	3	0.25		10世紀前半	
123	61								コナラ属 コナラ節	2.1	28	6	0.08			
124		A地区	1-B号窯 跡	g区		上層			コナラ属 コナラ節	1.9	25	6	0.08		10世紀前半	
125	62								コナラ属 コナラ節	1.7	24	10	0.07			
126									コナラ属 コナラ節					節部		
127									コナラ属 コナラ節							
128	63				g区	上層		燃料材	モミ属	0.4	3		0.13			
129	64			I区					モミ属	0.3	5		0.06			
130									コナラ属 コナラ節	1.8	10	4	0.18			
131	65				I区	上層			コナラ属 コナラ節	1.5	12	4	0.13			
132									コナラ属 コナラ節	1.8	11	4	0.16			
133	66								ブナ属	0.6	4	4	0.15			
134	67	SK02	10世紀前半	d区		東南ア ゼ			ブナ属	1.6	14	6	0.11			
135						上層			ブナ属	1.2	9	5	0.13			
136									コナラ属 コナラ節	1.5	21	4	0.07			
137									コナラ属 コナラ節	1.5	22	3	0.07			
138	68				No.11	-		燃料材 か 炭製品	コナラ属 コナラ節	1.3	25	3	0.05			
139				No.12					コナラ属 コナラ節	1.1	24	3	0.05	製炭土坑		
140									コナラ属 コナラ節	1.0	25	2	0.04			
141									クリ	1.4	21	3	0.07			
142									クリ	1.5	20	3	0.08			
143	69								クリ	1.1	16	4	0.07			
144		SK03	10世紀前半						クリ	1.5	20	4	0.08			
145									クリ	1.4	19	4	0.07			
146									クリ	1.6	18	4	0.09			
147	70			SK03	2-3-A 区		不明		スギ	2.3	11	11	0.21			

付表1-4 ニツ梨豆岡向山窯跡群出土炭化材の樹種同定結果一覧

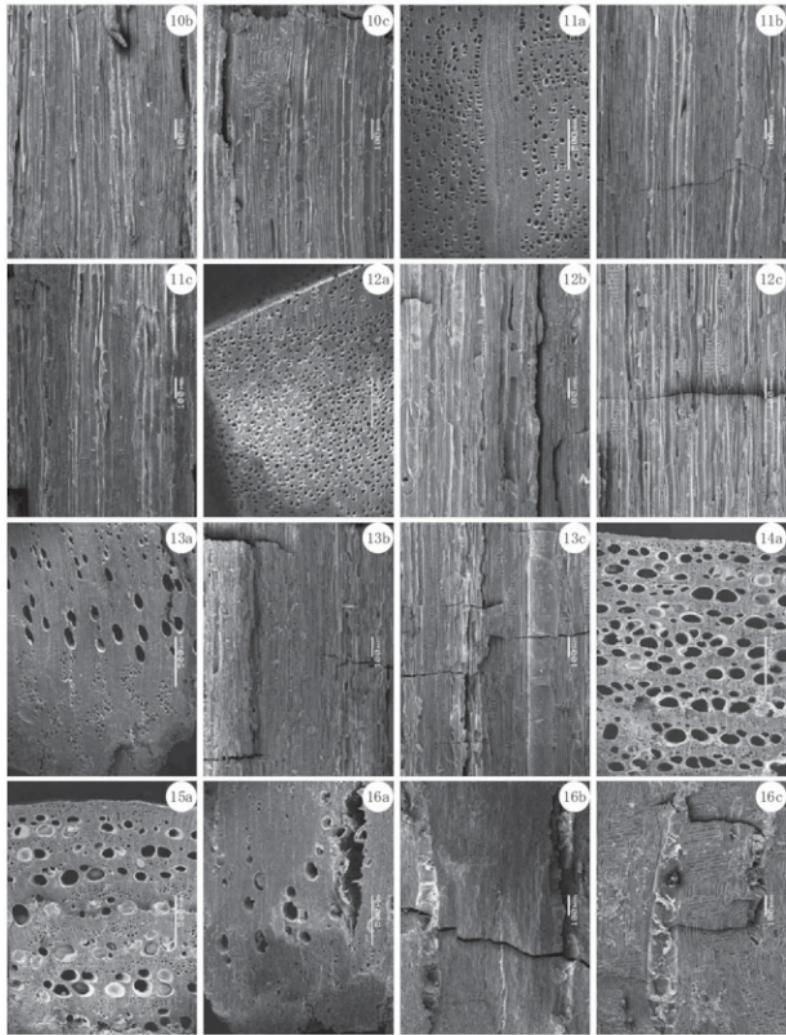
試料 No.	袋 No.	調査 年次	地区	遺構名	部位	地区・ No.	層位	種類	樹種	残存 半径 (cm)	残存 年輪 数	復元 直徑 (cm)	平均年輪 幅(cm)	備考	時期	年代 測定番号	
148		72	1-A号窯 跡	前庭 部 土坑 内	-	-	-	燃料材	モミ属	-	-	-	-	節部			
149									モミ属	1.3	4	-	0.33				
150									クマシデ属 イヌシデ節	1.0	5	2	0.20		10世紀前半		
151									スギ	2.0	3	5	0.67				
152									スギ	2.6	4	6	0.65				
153		73		SK07	-	No.2	-	不明	スギ	1.7	7	7	0.24		10世紀前半		
154									スギ	4.8	5	10	0.96				
155									スギ	0.9	7	-	0.13				
156	71								クマシデ属 イヌシデ節	-	-	-	-	節部			
157	74								スギ	1.2	3	-	0.40				
158	74	2次 調査	A地区	2・3-D 区	y1層	-	-	燃料材	スギ	2.6	10	11	0.26				
159	75								モミ属	2.2	5	11	0.44				
160	76								スギ	1.1	3	-	0.37				
161	77								クマシデ属 イヌシデ節	2.2	4	6	0.55				
162									クマシデ属 イヌシデ節	1.6	3	5	0.53				
163	78			2・1-A ・1-B号 窯跡	灰原	-	-	燃料材	モミ属	1.4	6	7	0.23		8～10世紀		
164	79								スギ	3.7	9	-	0.41				
165									モミ属	2.1	5	21	0.42				
166									モミ属	1.9	5	19	0.38				
167	80								モミ属	2.4	8	-	0.30				
168		86	粘土塊 集中2	2・3-B 区	2層	-	-	燃料材	モミ属	0.8	2	-	0.40				
169									モミ属	1.5	5	-	0.30				
170									クマシデ属 イヌシデ節	2.1	16	17	0.13				
171	81								アサダ	1.9	17	19	0.11				
172									アサダ	1.7	15	16	0.11				
173	82			2・3-C 区	7層	-	-	燃料材	コナラ属 アカガシ亜属	3.7	14	10	0.26				
174	83								モミ属	1.3	4	4	0.33				
175	84								モミ属	1.6	15	4	0.11				
176									モミ属	1.7	17	4	0.10				
177	85								クリ	0.4	1	-	0.40				
178		86	粘土塊 集中2	2・4-A 区	-	-	-	不明	モミ属	3.1	13	7	0.24		不明		
179									モミ属	1.6	6	-	0.27				
180									モミ属	2.4	6	6	0.40				



図版1 二ツ梨豆岡向山窯跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)

1a-1c.モミ属(No.2)、2c.モミ属(No.44)、3c.モミ属(No.50)、4c.モミ属(No.166)、5a-5c.スギ(No.5)、6c.スギ(No.25)、7c.スギ(No.115)、8c.スギ(No.147)、9a-9c.カバノキ属(No.98)、10a.クマシデ属イヌシデ節(No.74)

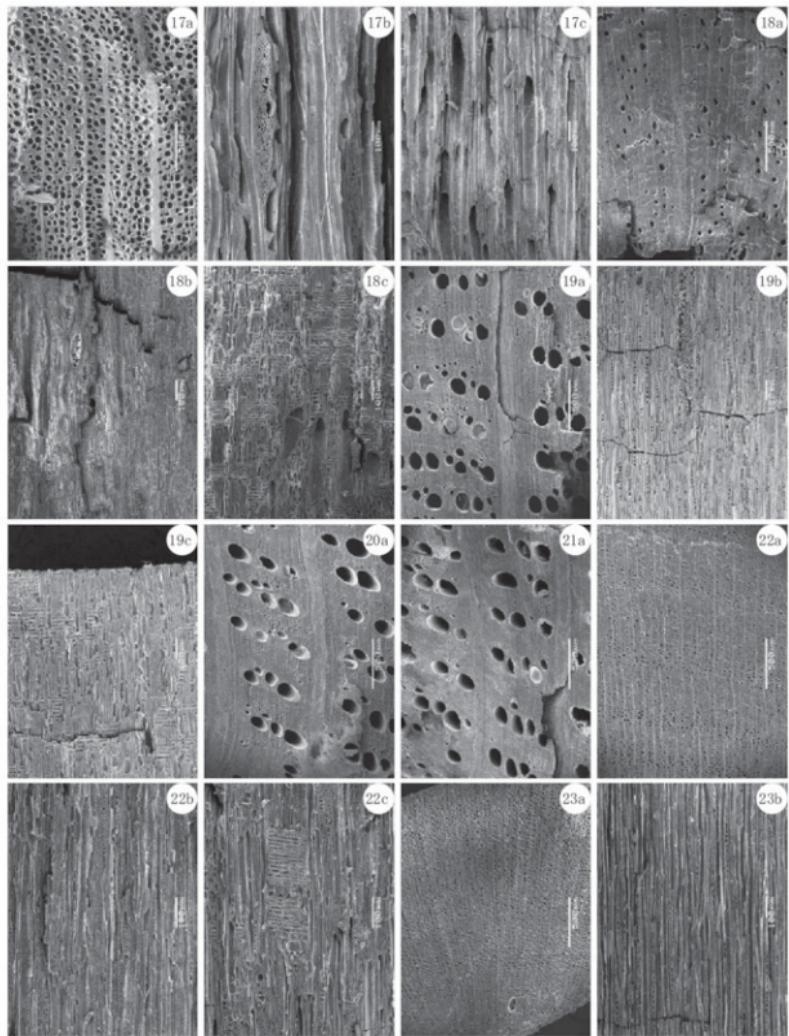
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



図版2 二ツ梨豆岡向山窯跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)

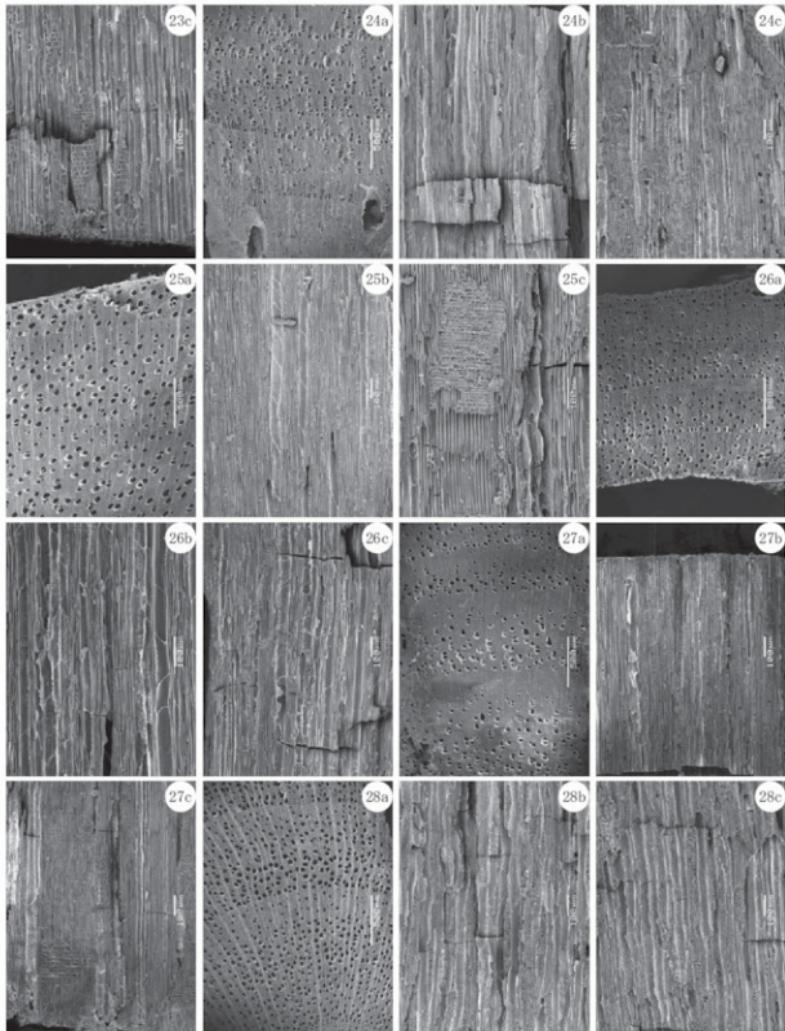
10b-10c.クマシデ属イヌシデ節(No.74)、11a-11c.クマシデ属イヌシデ節(No.77)、12a-12c.アサダ(No.108)、  
13a-13c.クリ(No.85)、14a.クリ(No.143)、15a.クリ(No.145)、16a-16c.スダジイ(No.38)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



図版3 二ツ梨豆岡向山窯跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(3)

17a-17c.ブナ属(No.133)、18a-18c.コナラ属アカガシ亜属(No.82)、19a-19c.コナラ属コナラ節(No.137)、20a.コナラ属コナラ節(No.139)、21a.コナラ属コナラ節(No.140)、22a-22c.ツバキ属(No.65)、23a-23b.サカキ(No.70)  
a:横断面、b:接縫断面、c:放射断面



図版4 二ツ梨豆岡向山窯跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(4)

23c.サカキ(No.70)、24a-24c.サクラ属(No.91)、25a-25c.カエデ属(No.109)、26a-26c.ニシキギ属(No.76)、27a-27c.エゴノキ属(No.69)、28a-28c.ハイノキ属(No.99)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



1



2



8



12



15



27



33



37



39



40





67



72



75



76



83



88



90



95



98



99



100



107



108



112



114



115



116



118



121



122



124



126



133



134



137



138



140



141



147



149



155



156



157



158



162



164



165



168



170



171



176



177



179



180



181



182



184



187



189



192



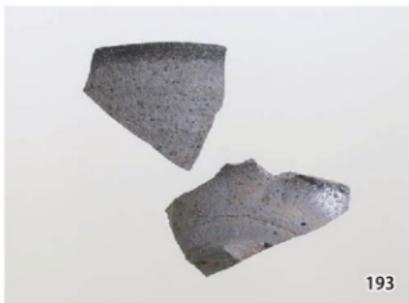
195



196



279



193



275 ~ 278 ほか



200



201



204-1



204-2



202



203



205



207



208



209



210



211



212



214



216

215



217



218



219



220



221



226



227



235



238



236



243



244



245



249



250



251



252



253



254





258



259



257



261



262



264

263



265



266



270



268



269



271



274



273



SK02 全景



SK02 セクション (上: A-A'、下: B-B')



SK03 (調査区 E-1 区側) 全景



SK03 (調査区 E-1 区側) 挖り方



SK03 (調査区 D 区側) 全景



SK03 (調査区 D 区側) 挖り方



SK03 (調査区 D 区側) セクション (手前: B-B'、奥: C-C')



SK03 (調査区 D 区側) 床面断ち割り

## 報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ 12
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書 XII
副書名	二ツ梨豆岡向山窯跡群
巻次	
編・著者名	横幕 真、宮田 明
編集機関	石川県小松市埋蔵文化財センター
所在地	〒 923-0075 石川県小松市原町ト 77-8 TEL (0761) 47-5713
発行年月日	西暦 2017 年 3 月 31 日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふたつねり 二ツ梨 (ふたつねり) 二ツ梨 豆岡向山	いしかわけん こまつし 石川県小松市 (こまつし) こまつ 二ツ梨町	17203	03014	36° 19' 53"	136° 25' 48"	2005. 7.21 ~ 2005.10.17	260	個人農地
						2006. 9.19 ~ 2006.12.12	640	
						2007.10. 2 ~ 2007.11.30	280	
						2008. 9. 1 ~ 2009. 3.18	487	
						2009. 9. 1 ~ 2009.12.11	600	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二ツ梨 豆岡向山	窯跡	平安	須恵器窯跡 1、土坑 3、 灰原	須恵器、土師器、炭化材	遺物編 1
要 約	4 号窯調査の遺物編。付章として、その他の遺構 (SK02・03) と自然科学分析の報告を掲載。				

---

---

## 小松市内遺跡発掘調査報告書 XII

二ツ梨豆岡向山窯跡群

平成 29 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県小松市埋蔵文化財センター  
石川県小松市原町ト 77-8 TEL (0761) 47-5713

印 刷 株式会社ゲンダ美術印刷  
石川県小松市丸の内町 2-32 TEL (0761) 22-7031

---

---